

若止む事を得ざる事ある時は魯西亞政府より箱館下田の内一港ニ官吏を差置へし

第七ケ條

若評定を待つへき事あらハ日本政府是を熟考し取計ふへし

第八ケ條

魯西亞人の日本國ニある日本人の魯西亞國ニある是を待こと緩優ニして禁錮することなし然れとも若法を犯すものあらハ是を取押へおき處するに各其本國の法度を以てすへし

第九ケ條

兩國近隣の故を以て日本國ニて向後他國へゆるす所の諸件ハ同時ニ魯西亞人にも差ゆるすへし

右條約

魯西亞ケイゾルと日本大君歟又は別紙ニ記す如く取極め今より九ヶ月の後ニ至りて都合次第下田ニ於て取替すへし是ニよりて兩國の全權五ニ名判いたし條約中の事件是を守る雙方聊違變ある事なし

安政元年十二月廿一日

筒井肥前守花押
川路左衛門尉花押

條約附録

魯西亞國全權ゼ子ラール、アチユタント、フィース、アドミラール、エフィミニス、フーチャチンと日本國委任の重臣筒井肥前守川路左衛門尉相定むる所の條約附録

第三ケ條

魯西亞人下田箱館ニ於て市中近邊緩優ニ徘徊する事をゆるすといへとも下田ハ犬走島より日本里數七里箱館ニ於てハ同五里を限とす尤寺社市店見物且旅店取建迄は定むる所の休息所ニ至るといへとも人家ニハ招待なくして決而立入る

事をゆるさす長崎ニ於てハ追而他國の爲ニ取極むる所ニ從ふへし且港ことニ埋葬所極置へし

第五ケ條

日本ニて役所を定め置品物渡方並魯西亞人持越したる金銀品物も其所ニ於て取扱ふへし魯西亞人市店にて撰ひたる品ハ商人賣買直段ニ應し船中持渡の品を以辨すへし尤役所ニ於て日本役人取計ふへし

第六ケ條

魯西亞人官吏ハ安政三年曆數千八百五十六年より定むへし尤官吏の家屋並地所等ハ日本政府の差圖ニ任す家屋中自國の作法ニて日を送るへし

第九ケ條

何事によらず外民ニゆるす所は魯西亞人ニも談判なくして一同差許すへし

右附録の事件條約本文同様是を守りて違失なきため兩國の全權名判するものなり

安政元年十二月廿一日

筒井肥前守花押
川路左衛門尉花押

別紙

先達而日本國合衆國と取極めたる條約の本書日本大君の取極ニあらざる時は魯西亞との條約本書も是ニ準して兩國の執政ニて取極へし

安政元年十二月廿一日

筒井肥前守花押
川路左衛門尉花押

別紙

今般魯西亞のためニ開くところの日本三港の内下田ハ即時ニ開き箱館並長崎ハ日本の重臣魯西亞の全權條約書面取

安政二年

替の日より三ヶ月の後にいたりて是を開くへし

英吉利約文

約文

此度大貌利太泥亞王國之軍艦ウケンセストル之惣督ヤームステイルリンギニ相會し長崎奉行水野筑後守御目付永井岩之丞大日本帝國政府之命を請薪水食料等船中必用之品を辨し又ハ破船修理の爲肥前の長崎と松前の箱館との兩港ニ貌利太泥亞國之船を寄る事を差免す

一長崎は今より其用を辨し箱館ハ此港退帆之日より五十日を経て船を寄へし尤其地々々の法度ニ從ふへし

一難風ニ逢船損せずして右兩港之外猥りニ渡來不相成事

一此度渡來之船若日本之法度を犯す事あれハ右之兩港ニ來るを禁す船中乗組之者法を犯さハ其船將屹度其罪を糺さるへし

一此度約する兩港の外今より後外國ニ差免す事あらハ其國と同様貌利太泥亞船民をも可取扱事

一右之通決定之上ハ當大日本帝國大君と大貌利太泥亞女王之承諾之旨委任貴臣の書面今より十二ヶ月ニ長崎ニおゐて取替可申事

一右之條件政府之命ニよりて定る上は此後渡來之船將かわるとも此約ハかゆる事なし

嘉永七年甲寅年八月二十三日於長崎鎮府定之

水野 筑後 守花押
永井 岩之丞 花押

亞墨利加條約

約條

一亞墨利加合衆國と帝國日本兩國の人民誠實不朽の親睦を取結ひ兩國人民の交親を旨とし向後可守ケ條相立候爲合衆國より全權マテユ、カルブレト、ペルリを日本ニ差越し日本君主よりハ全權林大學頭井戸對馬守伊澤美作守鶴殿民部少輔を差遣し勅諭を信して雙方左之通取極候

第一ケ條

一日本と合衆國とハ其人民永世不朽の和親を取結ひ場所人柄の差別無之候事

第二ケ條

一伊豆下田松前地箱館の兩港ハ日本政府ニ於て亞墨利加船薪水食料石炭缺乏之品を日本人ニ而調候丈者給候爲渡來之儀差免し候尤下田港は約條書面調印之上即時相開き箱館者來年三月より相始候事
一給すへき品物直段書之儀者日本役人より相渡可申右代料ハ金銀錢を以可相辨候事

第三ケ條

一合衆國の船日本海濱漂着之時扶助致し其漂民を下田又ハ箱館ニ護送致し本國之者受取可申所持之品物も同様ニ可致候尤漂民諸雜費者兩國互ニ同様之事故不及候事

第四ケ條

一漂着或者渡來の人民取扱之儀ハ他國同様緩優ニ有之閉籠め候義致間敷乍併正直之法度ニハ依從致し候事

第五ケ條

一合衆國の漂民其他の者とも當分下田箱館逗留中長崎ニ於て唐和蘭人同様閉籠め窮屈の取扱無之下田港内の小島周り凡七里の内ハ勝手ニ徘徊いたし箱館港之儀者追て取極候事

第六ケ條

一必用之品物其外可相叶事ハ雙方談判之上取極候事

安政二年

第七ヶ條

一合衆國之船右兩港ニ渡來の時金銀錢並品物を以て入用品相調候を差免し候尤日本政府の規定ニ相從可申且又合衆國の船より差出候品物を日本人不好して差返候時ハ受取可申事

第八ヶ條

一薪水食料石炭並缺乏の品を求る時ニハ其地の役人ニテ取扱すへて私ニ取引すへからさる事

第九ヶ條

一日本政府外國人に當節亞墨利加人は不差免候廉相免し候節者亞墨利加人にも同様差免し可申右ニ付談判猶豫不致候事

第十ヶ條

一合衆國の船若し難風に逢さる時者下田箱館港之外隈ニ渡來不致候事

第十一ヶ條

一兩國政府ニ於て無據儀有之候模様ニより合衆國官吏之もの下田ニ差置候義茂可有之尤約定調印より十八ヶ月後ニ無之候而者不及其儀候事

第十二ヶ條

一今般の約條相定候上者兩國之者堅く相守可申尤合衆國王ニ於て長公會大臣と評議一定之後書を日本大君ニ致し此事今より後十八ヶ月を過ぎ君主許容之約條取替し候事

右之約條日本亞墨利加兩國の全權調印せしむる者也

右條約本文十二ヶ條者帝國日本全權林大學頭井戸對馬守伊澤美作守鶴殿民部少輔と亞墨利加合衆國全權マテユ、カルブレト、ペルリと嘉永七年甲寅三月三日武州横濱村於て取替せ候事相違無之此度規定之書面豆州下田港ニ於て爲取替之儀者井戸對馬守に委任せしめ以後兩國互ニ條約急度相守可申事尤追而下田ニ於て取極候條約附録者別紙にこれを記す

右大君の命を以て

安政元年甲寅十二月

阿部	伊勢	守	花押
牧野	備前	守	花押
松平	和泉	守	花押
松平	伊賀	守	花押
久世	大和	守	花押
内藤	紀伊	守	花押

條約附録

日本國に合衆國よりの使節提督ベルリと帝國日本の全權林大學頭井戸對馬守伊澤美作守都築駿河守鶴殿民部少輔竹内清太郎松崎滿太郎兩國政府の爲取極置く條約附録

第一ヶ條

一下田鎮臺支配所の境を定めんか爲關所を設るハ其意の儘たるへし然れとも亞墨利加人も亦既ニ約せし日本里數七里の境關所出入するニ障ある事なし但日本法度ニ悖る者あらは番兵是を捕へ其船ニ送るへし

第二ヶ條

一此港ニ來る商船鯨漁船の爲上陸三ヶ所定置き其一ハ下田其一ハ梯崎其一ハ港内の中央ニある。島小イの東南ニ當る澤邊ニ設くへし合衆國の人民必日本官吏ニ對し可嚙を盡すへし

第三ヶ條

安政二年

一上陸の亞墨利加人免許を請すして武家町家ニ一切立寄へからず但寺院市店見物ハ勝手たるへし

第四ヶ條

一徘徊の者休息所ハ追而其爲旅店設るまで下田了仙寺柿崎玉泉寺二ヶ寺を定置くへし

第五ヶ條

一柿崎玉泉寺境内ニ亞墨利加人埋葬所を設け危略ある事なし

第六ヶ條

一神奈川ニての條約ニ箱館ニおいて石炭を得へきとあれと其地にて渡し難き趣は提督ベルリ承諾いたし箱館ニて石炭用意に及はざるハ其政府ニ告へし

第七ヶ條

一向後兩國政府ニおいて公顯の示告ニ蘭語譯司居合さる時の外ハ漢文譯書を取用ふる事なし

第八ヶ條

一港取締役壹人港内案内者三人定置へし

第九ヶ條

一市店の品を撰びニ買主の名と品の價とを記し御用所ニ送り其價は同所ニて日本官吏ニ辨し品ハ官吏より渡すへし

第十ヶ條

一鳥獸遊獵ハ都而日本において禁する處なれハ亞墨利加人も亦此制度ニ伏すへし

第十一ヶ條

一此度箱館の境日本里數五里を定置き其地ニての作法は此條約第一ヶ條ニ記す處の規則ニ倣ふへし

第十二ヶ條

一神奈川ニての條約取極の書翰を差越し是ニ答ふるニハ日本君主ニ於て誰ニ委任あるとも意の儘たるへし

第十三ヶ條

一茲に取極置く處の規定ハ何事ニ依らず若神奈川ニての條約ニ違ふ事あるとも又是を變る事なし

右條約附録エグレス語日本語に取認め名判致し是を蘭語ニ翻譯して其書面合衆國と日本全權雙方取替すもの也

右條約附録十三ヶ條ハ帝國日本全權林大學頭井戸對馬守伊澤美作守都築駿河守鶴殿民部少輔竹内清太郎松崎滿太郎ニ

亞墨利加合衆國全權マテユ、カルブレト、ベルリと嘉永七年甲寅五月廿二日豆州下田港ニおるて爲取替候事相違無之

此度規定之書面下田港ニ於而爲取替之儀ハ井戸對馬守に委任せしめ以後兩國互ニ條約急度相守可申事

右大君の命を以て

安政元年甲寅十二月

阿部	伊勢	守	花押
牧野	備前	守	花押
松平	和泉	守	花押
松平	伊賀	守	花押
久世	大和	守	花押
内藤	紀伊	守	花押

引切書也

大廣間席に

大和守殿より御渡之御書付寫

阿蘭陀之儀者勿論魯西亞亞墨利加二國者長崎下田箱館三港に渡來御差免英吉利者長崎箱館二港に渡來御差免相成候

安政二年

處亞墨利加國之儀近來清國と交易盛ニ相成御國之海上繁々致通航候付而者暗礁等心得不申候而者人命ニ拘り候間浦々致測量度旨當三月中下田に渡來之亞墨利加船より願出追而挨拶承り候ため渡來可致旨申立出帆いたし候右測量之儀容易ニ御差許難相成候付追而渡來之節下田ニおゐて精々申諭嚴敷御斷相成若又如何様申諭候而茂承伏不致節者追而此方より應接之もの彼國に被差向政府に可及懸合と迄茂爲申談候答ニ候併國風制度相違之上論談徹底致しかたき夷情ニ候得者下田に而應接之模様ニ寄内海迄茂乘入候歟如何様之次第可相成茂難計尤是迄も都而穩便之御取扱ニ相成居候儀ニ付今般とても此方ニ而者穩ニ相斷候積ニ候得共自然之儀出來候茂難計候間銘々兼而其心得ニ可被罷在候依之亞墨利加船より差出候測量之儀申立候書面和解爲心得相違候事

(此次ニ米國測量船ウケンセンス號より提出せし本邦近海測量の許可を請ひし書翰あれとも既に三月廿八日の條ニ掲げあるを以て茲ニ之を省く)

〔安政二年異國船一件〕(武藤殿)

(男所藏)

御老中阿部伊勢守様久勢大和守様薩州様を御招ニ相成追々諸國に御約條ニ相成候別冊並御書付之通御渡御演達之趣此節薩州様御同席様方御廻達ニ相成候此元ニも御兩殿様御當ニ而御直書ニ而御差廻ニ相成候を若殿様被遊御開封今便被遊御差上候寫拜見被仰付候未表向從太守様被仰出無之候ニ付極密之儀ニ候得共此元ニ而頭分之面々ハ一刻も承知無之而之不叶事ニ付内々爲含示置申候密ニ差下申候間披見之上散らぬ様仕舞置可申候右之通之事故心得とも相成候間御留守居を以極密承繕せ申候處全躰是迄之御取扱穩第一之事ニ付此節之測量願も可成丈之穩ニ御斷切之御模様別張書面之通ニ而之誠ニ理責之文躰ニ相見へ如何御斷振ニ可有之哉存居申候處是迄之願望先之望通悉被差免候程之儀此上尙御免々申所之餘り我勝手之事際限も無之此末如何様之事申出候も難計又之外々諸夷共ニ響外國方も申出候儀も可有之候御約條之積之内互ニ國禁之相守り双方共難遊ニ成候儀之可致遠慮旨申替しニ相成候事ニ而第一日本之土風列國各古來方之國禁等も有之一々御相談も無之而之御返答ニ可相成筋ニ無之日本國中隣國たり

共測量等致候儀之素制禁ニ付此儀之強而御斷切ニ相成可被仰談之由左而之直様戰爭ニ相成候儀之有之間敷一應之本國ニ歸國王之命次第參り可申其内ニ之御國方御人數等被差登候而可然との御内々御噂有之候由夫々彼方不致承伏兵端を發候ハ、渠ニ不義之有之事ニ付其時之模様ニ可被應何様無油斷實地を踏御軍備調置候様との事右之段ハ御内々ニ而も御差圖之難被出來只獨言を申候をいつ方承り候積りニ心得候様との儀御噂有之候吉田平之助を以ても浦賀詰中御懇意ニ相成候同所御奉行當時御在府松平伊豫守様ニ罷出同斷相候處是以御言葉之大同小異御趣意之相替不申候も右極密ニ承り置可被申候事

十月到着

男 吏 殿

木村次郎左衛門

八月十三日日本藩長崎留守居佐分利十右衛門汽船運用術傳習の狀況を藩政府に報告す

〔癸丑以降秘録〕

(佐分利八月十三日狀ノ一節)

一傳習一件近日ハ初公義佐嘉筑前打込ニ而三日程積二日止位之事ニ而則別紙之通願書此方々傳習被差出御受取ニ相成船越候船池邊也將へ一應御懸合相成候處いつ方も承知仕今日願濟御付札ニ相成候様ニ内意有之候然處士已上ハ誓詞も被仰付候處手數も懸り鐘も夫々持越不申佐嘉杯も歩並と申達込ニ而有之候得共此元御留守居方誓詞見届候上印形書付を以參達仕候へハ相濟候間右之趣承合別紙之通取計候旨蘭人へ諸家様方直傳習之儀ハ昨年相濟候御家迄ニ而一統御差留ニ有之候由御座候依而御三家迄ニ而矢張一同之答ニ付別紙通詞共役割たし通辯仕候

志筑龍太 荒木熊八 品川藤兵衛

機方 本 木 昌 造

(測量方) 榎林 榮左衛門

(測量方) 砲術方 西 吉 十 郎

安 政 二 年

七五三

製造方 川原 又兵衛

運用法 猪俣宗七郎

運用法 西 富太

八月十四日幕府再ひ水戸齊昭に隔日登城を命じ庶政に參與せしむ

〔相州御備場御用一件〕

(八月十四日阿部伊勢守本藩留守居を召喚して令達寫を交付す)

大目付に
御目付

水戸前中納言殿海岸防禦筋並御軍制御改正之儀ニ付近比八月々三度宛御登城ニ在之候處此度御政務筋之儀ニ付改而被仰出候趣有之就而ハ彼是御相談之儀有之候間御老體之儀御苦勞ニ者被思召候得共以後者隔日に御登城被成候様被仰出候

右之通被仰出候間可得其意候

八月十四日長崎奉行西役所に於て英人と應接す

〔癸丑以降秘録〕

去十四日ニ之西御役所へ英人御呼出御奉行御兩人御目付御兩人其外列座御應接有之同日朝六半蘭船將並加飛丹御呼出御應接有之引取四前九ツ時方英人御呼出有之候處蒸氣船ニ而内港迄乗入候段迎之檢使へ申出候間其儀ハ張切方内之難相成申候へ共不致承知候間左候ハ、暫相待候様奉行へ可申段檢使申候處不聞入直ニ内湊へ乗入蘭船相繫つたし夫方小舟をおろし大波戸方上陸仕候右乗入候節余程騒動ニ而有之候然處右様之躰ニ而市中ホと徘徊可致見込ニ而口々押へ等有之候處上陸方ハ靜ニ仕船將共七人通辯ハ此節速越候日本人力松と申者之由十五才之時漂流つたし候者ニ付一通

り日本國も相分り候由初座一通り挨拶済茶菓出夫方御應接二切有之酒肴飯替りニハ平麥麵出申候由御奉行方先般惣督アトミラール方申立ニ之國王五ニ陸敷つたし和親を結度と之儀ニ有之候處今度船中欠乏之品を乞請度渡來之處品々國禁之事を申立殊更奥湊へ之乗入候儀不相叶段檢使方申候へ共不聞入乗入候儀ハ國王五ニ陸敷申合を取崩ニ相當如何心得候哉諸事近々アトミラール渡來之上及談判候間右之趣納得有之度御申聞ニ相成候由英人方右之次第ハ心得違ニ而相斷引取候節直ニ蒸氣船ニ引取元之外湊へ相繫可申旨返答仕候由御座候依而如元乘戻り申候其後至而靜謐ニつたし居候處底意何程ニ可有御座哉今度惣督御應接如何相片付可申哉一統心遣仕候事ニ有之候段右ハ御用人山内徳左衛門方内々承り候次第ニ御座候此節ハ書翰之取遣之外ハ蘭通詞等御入無シニ而直ニ右方松通辨與力取次ニて相辨候間委敷次第相洩不申候尤追而ハ江戸表に呈書ニ相成候間呈書方相分可申候間其上ニ而委細言上可仕旨

八月十八日英國水師提督スターリング長崎に渡來す

〔癸丑以降秘録〕

八月十八日英船三艘來佛船壹艘來猶又英船一艘來但右之英之内一艘ハ去十日ニカ出帆之英船之由
佐分利八月廿日之狀 英惣督之船十八日渡來佛郎西も一艘相加り跡船來候段申立勢を見せ日本次第奔命ニ疲れ候様ト之仕懸と相見申候

〔全書〕

八月廿一日英船貳艘長崎退帆
佐分利八月廿四日之狀 十八日惣督着此節ハ先手ニ蒸氣船杯渡來仕せ長崎押破候而下田箱館同様ニつたし度英夷申台參候處長崎ハ御手當筋行届居押破出來兼色々難題而已申候而數十日之間滯船つたし惣督參候處ニて是迄之模様及相談

候と相見同廿一日廿二日迄ニ初發方參居候船々皆々出帆仕候(略)

〔癸丑以降秘録〕

八月廿二日 英船四艘長崎退帆、一蘭船將並甲比丹西役所へ御呼出

八月廿三日蘭國王像を獻す

〔癸丑以降秘録〕

八月廿三日 佛郎西船一隻英船一隻長崎ニ來、一蘭國王像を獻スイキリスハ惣督一手之船四艘ノミ殘居中候處一昨日出帆之英蒸氣船又々昨日廿三ハ乘返元之處ニ碇を入申候間御座候處英惣督渡來いたし居候へ之用事有之出入りたし候儀ハ差構申間敷杯申候趣ニ而何たる譯共相分不申出入りたし手數懸らせ疲せ候積りと相見へ申候佛郎西も昨日廿日迄ニ三艘ニ相成申候猶も跡船有之趣申立候近日ニハ惣督御應接ニ而黑白片付何様惣督ハ長滞船之模様ニ無之いつれ之道ニても一ト先退帆猶返事聞ト申事ニも相成可申候此節ハ畢竟御固嚴重ニ付破レ不申事ト相見へ小事之様ニ有之候へ共舉而筆頭ニ難盡候一昨廿二日ハ四半比々西御役所へ兩御奉行兩御目付御打寄蘭船將並加比丹兩人御呼出御對談有之夜中九ツ前引取昨廿三日ハ今度兼而献上之國王畫像使節行列ニ而献上り候譯ハ遠國ニ付國王直ニ而會も出來不申彌御懇意を結ひ情意を通スル之心得と承り申候向方ニてハ畫像献上ハ重キ取扱と見へ余程之行列ニて有之候右式相濟行列ハ差返し又々船將カヒタン兩人相滞四ツ比迄御對話右ハ全ク兩人へ御相談御取扱セシ次第ト相考申候右兩夜共蘭人引取後御書付渡ニ而夕刻方罷出居九ツ過ニ相成申候最早十日餘夜中之御呼出し續キ御役所ハ夜通し毎度有之一統余程草臥候拜見申候何様此節迄ハ長崎押破レ無之船々退帆可仕見込申候 八月廿四日

八月廿三日在浦賀本藩留守居助勤吉田平之助浦賀奉行松平信武に謁し米船より願出てたる海岸

測量拒絶に對する當局の意向を質す

〔相州御備場御用一件〕

吉田平之助八月廿三日松平伊豫守様に罷出親取候趣書取

今度從 公義被 仰出之趣ニ付御内意之筋有之今日浦賀御奉行松平伊豫守様に罷出亞墨利加方願立居候海岸測量之儀容易ニ御許容無之付而者自然之儀差起候哉難計候間一統實備之覺悟いたし候様御書附之趣奉得其意候右者御内慮奉親候茂恐多奉存候得とも亞墨利加之儀者既ニ和親を御取結ニ相成居候上者渠も願之趣至極尤之様ニ御座候處是迄之御取扱振レ違此節御斷切之御評議ニ相成候儀者近來水戸前中納言様隔日御登 城茂被爲蒙 仰たる御様子ニ付全躰之御模様打替り此上願ケ間敷儀者御許容無之模様次第ニ者御打拂之御決定ニ茂被爲在候哉又測量之儀者初發方御免無之御見頁を以御評決ニ相成候哉御様子次第ニ者受場を始手元之覺悟ニ茂係り候儀ニ付不顧憚極御内々御模様同取候様重役共申聞候との趣を以奉親候處成程測量師之儀者重疊理詰之書翰ニ而御免無之而者難成筋合と誰茂相考候得共是迄數ヶ條之御條約總而渠も願ニ被任際限も無之事ニ而尙測量を茂御許容ニ相成候ハ、又如何様之御難題筋願立候哉も難計第一日本ハ外國ト違自國之者ニさへ測量之儀者被禁置其上諸侯伯ト申候而茂往古方各國法有之從 公義茂存分ニ御取扱之難被出來増而外國ニ係り非常之願筋御免ニ相成候様之儀之國主ニ而之存寄等得計御示談之上ふくテハ御取扱ニ難相成國風ニ候へ之不容易筋ニ而測量之儀諸國ニ亘り勝手ニ被任置候而之必定上陸いたし其末無禮不法之振廻等いたし候ハ、國々之左法人質茂異り其分ニ之難關如何様之儀差起り候哉も難計其邊之儀之從 公義御手ニ不及事ニ候へハ測量之爲却而和親を害ヒ戰爭之場を引起し候基ニ付いつま之道ニも穩之御見込無之元來御條約ヶ條之内ニも双方迷惑ニ係り候儀之遠慮可致との御取替りも相成居候事ニ付旁右之譯合を以重疊御論ニ相成候ハ、是迄渠も願望多分相叶居候儀ニ付存之外承服可致事も可有之哉又者不聞入戰爭を申懸候敷も難計候得共全躰是迄之儀之國王之命ト唱諸蠻悉億劫ニ申立候處内輪ハ總而同盟之者共ニ而實情何程ニ可有之哉外國之事ニ候へ之事實茂寸斗相分兼候付此節御斷切ニ相成候

ハ、必衷情茂相分り可申將又近來士風益情弱之風ニ陥り寸斗實備ニ其兼候間一ツハ士氣御引立之御趣意とも被思召候右之次第ニ付根元ハ上より被仰出候事ニ可有之候得共前中納言様に茂得斗御相談被爲在候而御決議ニ相成たる事ト御推考被成候段被仰聞候付左候ハ、測量願御免ニ相成候上之外ニ願々間敷儀決而仕間敷との趣を以相願候而茂御許容無之御模様ニ可有御座哉ト奉親候處此儀之今カケ様ト御内話茂不被爲出來候得共時宜次第ニ之強テ御免無之とも難申畢竟當時之勢ニ而者必多物相察際限茂無之故御押ニ相成候事ニ付願振且心得方之模様等ニ而之臨機應變之御處置相持儀も可有之哉ニ候へ共アメリカ而已ニ不限諸蠻同様之御扱ニ相成候而之就中英吉利佛蘭西并津輕様御領分ニ而之不法之働もいたし條約之表ニ戻候間先ハ容易ニ御免難成兼而御手前方茂此上之儀之御許容無之様御願被成候事ニ而此節御断切ニ相成候而茂右之通事を分御論ニ相成候事故急ニ者御打拂ト申持ニ之至中間敷其上御返答承リニ參り候ハ、一應ハ是非下田表に入津可仕若又同所乘通り浦賀又ハ内海に乘入候ハ、御條約之掟も有之事ニ付却而御論談之道具ニ相成被ハ非分ニ落入願之趣意を失候事故容易ニ下田を差置乘入候儀之有之間敷ト御見込被成候併御沙汰筋之儀之表立被仰出候事ニ付重覺實備之覺悟をいたし置候様々被仰聞候左候而猶御聞込之筋も被爲在聊心組ニ相成候儀者無御伏藏御内敷可被下段も被仰聞候付幾重ニ茂宜敷奉願候旨厚御禮申上引取候事

八月廿三日

八月廿四日本藩江戸留守居福田源兵衛幕府右筆組頭に就きて幕府の對外處置に關する意見を開

〔相州御備場御用一件〕

福田源兵衛八月廿四日御右筆組頭衆迄罷出伺取候趣演達書取

此度薩州様方御廻達ニ相成候御書付之内測量御断切之御一條を以勘考仕候得者是迄夷賊御取扱之御振合を被改向後者嚴敷御仕懸ニ相成候ニよリ候而者兵端を被候とも聊御厭無之乾ト 皇國之御武威を御示し申御處置ニ持り候様ニ茂被

奉親此儘御書付を國許に遺候ハ、越中守を初重役共如何計職室勞可仕第一之家中一統人氣之動搖必定ニ可有之儀之重疊恐多奉存候得共御内輪之御模様より少々伺取候而國許に申替候様いふし度重役共奉願候との趣を以昨夕御右筆組頭衆に罷出申演候處表分御咄ト申儀者難相成獨り言可被成候間何方ニ而敷承り候ト申形ニ而致推察候様被仰聞左之通一 根元亞墨利加カ一昨年来願出之趣ハ大概何も敷茂御許容ニ相成候末當春下田ニ而測量之儀一旦難叶ト御断ニ相成間も本く押而願出候御許有之候而之何事茂申出さへいふし候へハ相調候様ニ相心得被踏付候形ニ相成就而ハ諸夷より申候而茂同様御許容無之候而ハ難相成無際限様ニ成行可申依之測量之一條者何方迄茂屹ト御断ニ相成日本之強を御示有之夫茂無味口御制切ト申譯ニ而者無之初發約條之内双方之迷惑ニ相成候儀者互ニ可致遠慮との儀者御取持しニ茂相成居餘事ニ付測量之儀者日本往古より之國禁ニ而自國之ものありとも難叶法ニ候を新ニ交りを結候外國に致許容候而之第一諸侯伯承引可致様無之との振合を以及斷候ハ、彼之願望多分御許ニ相成候末ニ茂候へハ大方夫ニ而納可申何様是非御断切之御趣意ニ而ハ有之由候事

一 右之通下田ニ而御論ニ相成候末直ニ江戸に罷越相願候ほと、申候節者當所ニ而之應接則江戸之御下知ニ而何方よりとも同様ト申所ニ而押留若聞入不申江戸に乘入候ハ、最初之掟ハ皆此後之事茂不安心ニ付一向ニ是迄之約條茂都而及破談ほと、の道理を以御諭有之筈之由候事

一 萬一前條御断を憤り候とも土臺測量願之事ニ候得者多して五六艘茂渡來可致夫ニ而直様及戰爭候譯茂無之一應罷歸國王に相連候上追而之模様ニ應軍艦差向候時ニ茂至り可申哉其内ニ者如何様とも手當可致出來何様是迄者何茂彼之内望通ニ相成候付とんと衷情相分不申此節御断ニ相成候ハ、却而眞疑強弱等推了出來候端とも相成可申且又ふとへ直様兵端開候而茂幾五六艘之事ニ候得者聊恐ニ足不申其上亞墨利加之願筋日本未曾有之取扱を以差免置候末測量之一條止を不得之譯ニ而及斷候を憤り戰爭をも仕懸候ハ、渠益非分ニ陥り同盟之諸夷といへども却而日本に荷擔いたし候氣味ニ茂成行可申との事

一武備御取締筋付而之追々被 仰出有之候得共 公義御旗下并諸侯藩中とも太平遊惰之風習不相替今分ニ而之屹々難相濟候付日本國中一致之備等心得相揃目を覺し本氣ニ成候處を專 御世話被爲在候付御備場之儀諸手賦之矢張是迄之通ニ而彌以嚴重ニ有之士氣不撓武技熟練さへいたし候得之此節之御沙汰ニ因別段御人數増ニ者及間敷下田に異船入津いたし模様ニ應其節御人數等之儀御國に申向候儀可然萬々一戰爭之勢ニ相成候共右之通右より左ニ之有之間敷其崩茂有之候ハ、其期ニ臨御相談可被成との事

一水戸前中納言様今度より隔日御登 城之儀茂相伺候處何そ此節異船御取扱之御模様且御政事向格別之御改革ふと、申譯ニよつて右之通被 仰出たるニ而之無之日本國中此上ニ茂能々一幹ニ心を合聊茂怠り無之様猶御相談共外 御治世續之流弊御取直被是之御趣意ニ而有之由候事以上

八月廿五日

八月廿五日在府本藩老臣は幕府對外處置の概況を藩政府に報し且つ事變計り難きを以て砲術練習の急務たる所以を切言す

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候松平薩摩守様去ル廿三日御呼出ニ付阿部伊勢守様ニ被成御出候處魯西亞亞墨利加英吉利と御條約書三冊外ニ御書付二通御渡久世大和守様ニ被成御出候處亞墨利加船より測量願出之和解書一冊外ニ御書付二通被成御渡候由ニ而伊勢守様御演達之趣御書取とも被成御添候而薩摩守様より若殿様ニ御差廻ニ相成候を御直書を以此節太守様ニ御差上ニ相成候御模様ニ付右之寫一と通取揃夫々致進達候共已前水戸中納言様是迄ハ一ヶ月三度宛御登城被爲在候處隔日ニ御登城被成候様被仰出候即下亞墨利加測量御斷之一條右御書付之通候得之於公邊異船御取扱之御趣意打替向後右體自由之願筋ハ一切御制切品ニより而其儘兵端を御開乾と日本之武威を御示と申御所置ニも相成爲中哉左候ハ、御備

場御人數之儀茂當時之儘ニ而ハ相成申間敷此許ニ而さへ右之通致心遣候へハ右御書付等其儘差進候而者於御地之御案勞者彌増ニ可有之就而者聞之傳御家中一統之人氣茂可致動搖と咄合御内輪之御模様を少々喚取申度福田源兵衛を御右筆組頭衆に差遣且吉田平之助も幸致出府居候付御在府之浦賀奉行松平伊豫守様ニ差出極密奉伺候處御内話之次第別紙兩通之通御言葉之異同ハ有之候得共測量御斷ニ相成候建候ニ戰爭を引起候譯ニ無之必竟ハ公義諸藩ともニ武備一致ニ心を揃本氣ニ相成候様との御趣意ハ相替儀無之左候へハ御備場之儀も先ハ當時之儘ニ而子細無之御互ニ致安心候尤士氣不撓之一條者他ニ比候而も強而不可耻氣味も有之候得共武技熟練之事ハ相州着營之上俄ニせり立候而可相調筋無之此儀者申達候通御臺場筒打様之儀且向後江戸詰之面々も是迄之心得とハ氣向も違不申候而者相成間敷急ニ戰爭ハ有之間敷候得共右之御趣意且夷情ハ實ニ難計候付夷人ニ對し戰爭之心得足輕杯之打方等ニ至迄重疊研究有之度於其地如何様卒御仕法を被附置度御奉行に茂得斗御咄合候様存候此段爲可申達如是御座候以上（本書に添付せし阿部久世兩閣老交付掲げあるを以茲に略す）

八月廿五日

木村次郎 左衛門 溝口藏人

御家老中宛
御中老宛

向々右之趣者委細井上加左衛門に申含明日出立之筈ニ付同人着之上直と御間候様存候何様前條之次第ニ付御人數増等之議論説有之譯ハ無之候得共萬々一右様之議なと起候而も加左衛門着迄之間ハ決而御取扱無之様有之度此段も爲念申達置候以上

八月廿九日幕府長崎に於て英國と條約の批准を交換す

安政二年

〔癸丑以降秘録〕

八月廿九日英夷西御役所御呼出御應接有之
佐分利九月四日狀入、廿九日 西御役所御應接彼國女王之格式を以罷出候との儀ニ而番所々々迄も惣而麻上下惣數三十
人餘上陸一應御對面貴臣調印之開港之御約定書取替し濟御奉行兩人相伴通譯力松迄一座膳部段取有之二汁五菜之料理
御馳走其上人拂之應接幕比引取御約定書當春江戸へ被差越候節肥筑御兩家へハ特御承知御封印ニ而御家老御呼出御渡
封之儘兩侯御落手被成候儀ニ付此元へ相洩不申候

八月晦日幕吏古賀謹一郎洋學所頭取となる

〔癸丑以降秘録〕

八月晦日

二九御留守居

洋學所頭取 古賀 謹一郎

九月二日藩主齊護時運の趨勢を察し將來益々武備を整へ藩屏の任を全うせんと欲し書を老臣に
下して來年より五年の間節險力行を旨とすべきを示達せしむ

〔神庫文書已印十二番十二印〕 （神庫文書上丙二十九番五百六十七、嘉永六年以後異國船渡來一件にも出つ）

卷込上書

安政二卯年九月二日勝手方に於陽春間相渡ス也

下案

勝手向之儀追々省減申付候得共駈と甘茂出來不申内去々夏江戸近海に異船渡來後無存懸御備御受持之蒙豪命を候付而
者人數之往返兵器之製造等多端之儀ニ而莫大之用途差洩其後茂異船之模樣不隠風説茂有之方今之急務者國力を養武備

之手當專之時節ニ而從公義茂追々御沙汰之旨有之候得者下地省略中之儀ニ者候得共來年より五ヶ年之間猶一と際格外
之節儉申付候勿論我等手許之不自由者聊厭不申參勤之行裝等茂省略を用其外諸事例格たりと母成丈省減致し役々一と
際荷厚非常之手當行届候様可申付候家中之儀茂右之主意を以愈誠實ニ質素節儉を守り銘々相應ニ非常之備茂不薄様心
を用屹と事實相立候様可申聞もの也

九月

齊

家

老 中
老 中

九月三日日本藩は曩に増加せられし我管轄地の貢米も亦從來主管地の制に従ひ金納に換へられん
事を幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

九月三日阿部伊勢守様は福田源兵衛持參以御取次差上御落手

越中守相模國武藏國御預所年貢米之儀異國船渡來之節夫役飯米並陣屋詰人數非常之節之備米ニ仕度以來年々冬御張紙
直段ニ三兩増を以陣屋元ニ買入皆石代上納之儀去七月奉願候處願之通被仰付候然處去冬武州久良岐郡ニ而増御預所被
仰付候付而者右村々下地作地少之所柄ニ付非常之節之糶米手當手薄御座間右村々之儀茂前條同様陣屋元ニ買入皆石代
上納被仰付被下候様奉願候尤御預所取扱之儀役人共不案内ニ而諸手數ニ被擲萬一御備場之要務届兼候様茂成行候而者
以之外之儀重疊懸念仕候付御預所御年貢米之儀右壹兩之規矩を以引受上納之儀委細當四月奉願置候願之通御間濟被成
下候得者前文石代納之儀奉願候ニ及不申候得共未御沙汰之節無御座追々收納之時節ニ差臨候事ニ付右之御模様ニ不拘
此段別段奉願候何卒右久良岐郡之儀茂最前之御預所同様御間濟被下度左様無御座候而之御預所之内兩端之扱ニ相成村
々氣受ニ茂係り抑揚筋ニ茂差障申候間何卒御備場御用別段之譯を以願之通御間濟被成下候様奉願候此段申上候様申付

安政二卯年

七六三

越候以上

九月三日

細川越中守家來

福田源兵衛

卯十月十七日伊勢守様御呼出ニ付源兵衛參上之處本文御願ニ付左之御書取御添御用人を以被成御渡候
當卯年より石代金納之積相場之儀之冬張紙直段三兩増ニ而相納尤御勘定組之儀御預所に掛置候役人より御勘定所に相
伺候様可仕候事

九月三日日本藩財津次郎兵衛に西洋砲術研究の爲め下會根金三郎に入門を命す

〔相州御備場御用一件〕

財津次郎兵衛儀此節其許着いたし候付居り合候上出府被仰付西洋流砲術下會根金三郎様に入門被仰付御備場にて有折
罷越見繕候様被仰付候條此段可被達候以上

九月四日

木村次郎左衛門
溝口藏人

田中八郎兵衛殿

尙々御臺場にて打方稽古等之儀ハ諸事引廻之面々差圖いたし候様被仰付候條此段も可被達候以上
一右之趣三池尉右衛門に知せ

〔△書〕

財津次郎兵衛

右者此節御備場着いたし候付居り合候上出府被仰付西洋流砲術下會根金三郎様に入門被仰付御備場にて有折罷越見繕

候様被仰付旨同(九)九日及達候

九月十一日在府本藩老臣は藩製小銃の成功を藩政府に報告す

〔相州御備場御用一件〕

別紙を以申達候西洋流小筒五拾挺先便被差越候付拾四挺之江戸表之御用ニ被差置答ニ而差寄其内壹挺江川様練之節
大島久平致持參候處都合四十發内外一發も移兼候杯と申儀無之諸藩中之面々も大ニ羨候由其後残り拾三挺も於目白臺
試旁致練打候處是又同様ニ而其以具合宜孰も致太慶候此段爲御安心申達候條御奉行に茂御申聞候様已上
九月十一日

木村次郎左衛門
溝口藏人

御家老宛
御中老宛

(本朱書)

十月十日之日附にて返事來り候稜々之内
是又同様ニ而具合宜御座候由何をも大ニ安心仕候事ニ御座候

九月十五日日本藩政府は來年より五ヶ年間特別儉約の旨を布達す

〔安政二年御書附並諸御觸達〕

覺

御勝手向之儀兼而御出納之幅合兼居候内一昨年以來者莫太之御出方差湊諸間出金等茂被 仰付以上於地旅新々ニ八万

安政二年

七六五

兩餘之御才覺有之地下江戸大坂之御借財共ニ者三拾万兩近ク相成此段茂御軍備すじ之御手當を初年々御備場交代等付而者無際限御出方差臨居候而已ふらす何時非常之變事可起成哉茂難計時勢ニ付來年より五ヶ年之間格外之御儉約被仰付委細之御首書之通ニ而來年頭々御禮式等茂御差略被 仰付此節從 公邊御沙汰之趣茂一統爲心得可申置旨被仰出候條寫之別紙相添候銘々覺悟筋之儀ニ付而者追々厚 御示之趣有之候而茂兎角平素之心得方衣服飲食等奢美を競候風俗不相止御年限中ニ茂其際立兼候様ニ茂有之候ハ、衣服御制度等屹ト被引改候時宜ニ茂至可申哉畢章不虞之手當も不濟様ニト別段を以手取を茂被増下置候得共御勝手向之御都合次第ニ之無餘儀減少被 仰付儀茂可有之候條兼而其覺悟有之候様組支配方に茂精々可被申置候以上

九月十五日(八月七日の幕令及九月二日)の藩主直書を参照せよ)

〔魚住 舊藩令達〕

覺

- 一年頭御禮之節着座以上太刀馬代進上ニ不及依之御禮茂御略式ニ被遊御受候間何を茂半上下ニ而可有出仕候
- 一御禮初茂是迄之通御略式ニ被仰付置候間外様ハ出仕ニ不及候
- 一式日並正月七日亥猪諸懸之着座以上麻上下着御禮儀訓迄ニ而被召出無之候
- 一付紙 貳日御禮等當年中ニ是迄之通被遊御受來正月ハ本文之通被仰付候旨
- 一御節句御禮之思召を以獨禮段之御切米取以上出仕
- 一但御在府年ニ是迄之通御物頭列以上出仕
- 一御寺參拜是迄之通
- 一野方御出之節屋敷前形儀手桶出し不申晝夜共辻御目見ニ罷出候ニ不及候

右之通五ヶ年中相心得候様可申置旨被仰出候以上

九月

九月十八日在長崎本藩砲術師範池部啓太書を小佐井才八に贈り航海術の練習を命せられ尋て外國渡航の下命あるべきを賀す

〔養田文書〕(養田屋 雄氏藏)

當五日並十日附之御紙表同十五日一同ニ着悉々拜誦仕候如貴意秋相増至極之身洞ニ御座候處彌御平安被成御座珍重奉存候次爰許一統無異變消光罷在中候間乍憚御休意可被成下候然之貴所様は茂天文曆學測量術御修行として江戸に被差越航海術も稽古被仰付都合次第外國渡海も可被仰付尤士庶之振合ニ而被差越候段被蒙仰候趣恐悦ニ奉存候外國御渡海之儀之御迷惑ニも可被思召ヌかし此節之於官府茂重疊御人撰之儀ニ而御規模無此上於野老も歡喜不斜奉存候乍此上御出精御研究之程奉祈候扱蘭人茂一昨日歐歸り候哉ニ承り候處昨夕又承り候ニ之右蘭人迎之軍艦とも承り兩條未タ相分り不申コル子一リツセン歸國致候得之同人替ニ炮術心得居候者參候段神奈川行前ニ噂も致居候由何様兩三日中方之傳習相始り可申留守内茂炮術試業をも相始申候處小野登人ニ而當惑之由尤至極ニ付罷歸り度奉存候得共只今之處何分ニも歸り出來不申候尤大田黒野入之近日ニ之歸宅可有之哉と相考申候兼坂に之被仰付候ハ、五郎右衛門に御達ニ可相成候處未タ無之候ハ、此節廻レ申候と被存殘念ニ御座候山田も同斷ニ候由江戸ニ而航海術功熟之人多人數出來居候山家利和太海軍出方被仰付候由ニ付御問合可然尤來春外國渡海之航海懸り人にて別而御懇意ニ被成置候方往々御都合可被宜と愚考いたし候貴所様御出立前不得拜顔段之重疊殘心之至ニ御座候八代殿も霜月中旬出立之由ニ付立前ニ差懸り候而之何事も被行兼可申候間來月中半比迄ニハ是非歸宅いたし度心せき候得共傳習之趣未タ見込付兼申候何茂ノ追々申述先右迄早略仕候已上

九月十八日

小佐井才八様

猶々次第寒サニ趣候折柄随分御自愛御道中被成度相祈申候以上

七六八
池部 啓 太

九月廿日在相州吉田平之助等書を在府福田源兵衛等に贈り外船渡來の實なきを以て警備地一部の兵を歸國せしむることにつき浦賀奉行の同意を得たる旨を通報す

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候御備場詰組付御中小姓並大筒手共當秋交代之面々御國許方御人數參着之上茂暫之間二重ニ被差置候處最早夫ニ不及用意濟次第追々御國許に被差下旨一昨廿六日及達候右付而浦賀御奉行様に吉田平之助方相伺候趣別紙書取一通差進申候此段爲可申達如是御座候以上

九月廿八日

木村次郎右衛門
溝口藏人

御家老宛
御中老宛

當秋異船渡來之趣ニ付御備場詰交代之面々暫二重ニ被差置候處今以渡來茂不致候付今廿日吉田平之助儀浦賀御奉行土岐豐前守様に罷出當三月渡來之亞米利加船方日本海測量之儀願出御返答爲承五ヶ月至猶又渡來可致段申出致歸帆且又佛蘭西本國方之船廣東に渡り夫々江戸内海に乘入可申由於箱館渡同國之船方申出候哉之趣追々御内教茂被爲在候付爲念御備場人數少々相増置申候處今以渡來之模様も無之追々寒氣ニ茂差向候付而之事實何程ニ可有御座哉御模様ニ應候而之此節増人文之先國許に差下申度思召何程ニ可被爲在哉一應御様子奉伺何とも相心得可申旨申上候處豐前守様被

成御承知段々被入御念候御仕成御大慶思召候異船之儀ハ今以如何共様子不相分候得共申立候趣ニ之餘り渡來之時節遅々いたし候故いつを彼向ニ而模様違等之綾茂可有之哉と御考被成候夫込船之何時渡來も難計候得共其儀を心遣いたし候へハ際限も無之事ニ而先此節之申立之時節趣異船通帆不致時候ニ茂趣候事ニ付増御人數丈之相減若又自然之儀茂有之節之兼而御示談被成置候通定人數を以必。之働いたし候得ハ強チ人數之多少ニよリ勝敗ニ係り候儀茂無之候間其覺悟ニ而早々差下可然被思召旨被仰聞候尤何方々職人數減之儀問合茂有之候ハ、豊前守様に相伺御差圖を受取計候段申答候様被仰聞候付厚御禮申上引取申候以上

九月廿日

野々口金左衛門
吉田平之助

福田源兵衛殿
清田新兵衛殿
神谷矢柄殿
財満市兵衛殿

九月某日本藩藤木武兵衛江戸より歸國の途次京都に梁川新十郎^星を訪ひ外人處置に關する勅諭の趣及び諸藩の事情を聞く

〔藤木武兵衛引取書〕

安政二年九月休息奉願罷下り候節京師之儒者梁川星嚴ト申者方ハ罷越同人へハ登之節ニモ相訪ネ心安ク有之候間猶又相尋候儀ニ候處其比ニ至候而ハ纒之間ニ時世特之外切迫ニ相趣キ從公邊モ浪士等相集候様ノ儀ヲ深ク憎嫌ニ相成探索強ク星嚴モ門外不出之様子ニ付潛々ニ相叱候處是迄天下之事悉ク關東ニ被任置候得共異人御處置之儀ハ古今未曾有之

安政二年

七六九

事柄ニ付一々 天朝ニ御伺之上御處置有之候様從 朝廷屹度被仰出候趣等始而致承知其外從 朝廷被仰出候 勅諭之
趣又者諸藩之事情等一ト通り星嚴ヨリ承リ猶寛リト嘶テ承リ度存候得共星嚴方ニ者殊ニ與力同心目ヲ屬候折柄長滯留
モ六ヶ敷五ニ退而時ヲ待可申ト相約罷下候

九月晦日幕府は寺院の梵鐘を砲器に改鑄することにつき更に報慮のある所を陳示し之を列藩に
令達す

〔尊攘錄皇武令〕

伊勢守様御渡

大目付に

諸國寺院ニ有之候梵鐘之儀本寺並古來之名器當節時之鐘ニ相用候分相除其餘ハ不殘大炮小銃ニ可鑄換旨先達而 報慮
を以被仰出候一體梵鐘之儀其寺々之法器ニ候得者容易御沙汰可有之品ニ無之候得共近來諸夷引續入津いたし武備専用
之御時節大炮小銃共急務之品ニ而御國備御堅固ニ被成置度格別之 報慮も有之被仰出候事ニ候條寺院之勿論大小之檀
越寄進之輩ニ至迄厚御趣意之程相辨へ法用之儀ハ在來之半鐘又ハ盤木太鼓等相用本寺並名器當節相用候時之鐘之外鐘
鐘之分ハ一同公義に可被差上候勿論萬石以上領内之分者其所之領主に被下領主ニ而鑄換萬石以下知行並御代官領主地
頭に附屬ニ無之寺院其寺社領之分共御料所寺院一同公義ニおるて鑄換被仰付候間御府内者寺社奉行其餘者遠國奉行御
代官御預所領主ニ而寺院本末並梵鐘有無名器時之鐘之譯等札之上取計尤時宜ニ寄禮家惣代之者呼出之儀も可有之候
一萬石以下知行之分も自分ニ而鑄換之儀相願候ハ、其通ニも可被仰付候間早々願書可被差出候

但自分ニ而鑄換被仰付候へ者公義ニ而者御稱無之候間萬石以上之振合准し知行所寺院一手ニ取計候儀と可心得候
右之通被仰出候間可被得共意候尤寺院に者寺社奉行より申渡候間本末取しらべ其外取計方之儀ハ安藤長門守に承合可

被取計候

右之趣向々には不洩様可被相觸候

九月

十月二日關東の地大ニ震ふ江戸被害殊に甚し此日水藩藤田東湖戸田蓬軒等震死す

〔安政二年 異國船一件〕

十月二日大地震覺書仕差出申候尤二日今日迄も未少々充震申候而連性院樓御庭に御立除五日御上り六日又々震同様
御立除七日御上り始末大尾難共御側に書夜相詰未寢不申候夢之様ニ而執筆も出來兼候程睡り出申候間前後間落字等
御推覺可被成下候去ル二日夜五ツ半過四ツ前頃私泊番ニ而未休不申植田一郎次對談仕候處地震覺申内忽チ大地震ニ
相成即時行燈消申候脇差紙入肩衣袴押取御錠口押破御奥に馳入申候處廊下筋惣而行燈消闇ニ相成居襖立具屏風壁等倒
ま落板の間ハ震申候處二三度宛ニ打倒を何分暗闇ニ而御座間迄罷出候儀叶不申引返詰間ニ而非常手提燈漸取出蠟燭を
付可申と火打袋相尋候得共尋當不申幸御勘定方廊下掛行燈之殘居候ニ付右之火を移し漸々御建具等飛越御居間に罷出
候得之早御内庭迄御立除ニ相成御庭口を直ニ外御庭に御供仕如何様とも仕様無之其内地震も漸く相成申候間御居
間之覺取出先御馬場ニ六七枚敷並へ御屏風持出御坐所先取建申候夫々非番之者馳付候而御作事も罷出御新庭ニ幕張桐
油等ニ而御三方様夜分御明し被遊候大震之時分空中光り物數多飛申候籠口御屋敷も同様之上四方ニ火起り御前様白金
に御立除ニ相成右之幕張ニ被爲入翌々四日御歸興ニ相成申候御刻所々潰家々出火ヶ所五十余其外少々宛燒上り候取消
候之幾百ヶ所有之敷相分不申尤格別手廣く燒候之下谷方本所方深川方大名小路日比谷方西丸下本郷方牛込方芝
口露月町柴井町方折能頓斗風ふしニ而自然と鎮り申候誠以幸成事ニ奉存候大震後即晚餘程手強く震り者一度輕震ハ幾
度と申儀之相分不申今八日朝迄も度々震申候内一昨夜六半過ハ又々餘程強く震候而倒家潰家も有之御家中之面々大

安政二年

方野宿龍口白金を初御家敷ノ、惣而難ふく怪我人ハ少々宛有之、大島五郎八ハ二階ノ外に墜落され餘程之怪我、龍口ハ御殿向御長屋共餘程之損役間も詰方不相成候處有之木柵丁御屋敷内御長屋一棟後之地震ニ而倒レ太守様御鴻福を以御家中無事難有次第無申計儀ニ奉存候

一私條者知識之者即死怪我土井大炊頭様家中御廣間取次役相勤候私妻之弟越智功泊番ニ而相番三人相休居候處俄ニ地震脇差を押取立除候間よく御廣間潰レ家根下ニ相成埋を梁ニあるを候得共幸ニ棟ニ梁もたれひしれ候得共死ニ至不申相番兩人ハ即死御長屋潰を留守妻始即死○水野出羽守様御家來金澤八郎母梁ニ壓を即死増山河内守様御家來名前急々思ひ不出私娘之縁付候先之妹小兒抱候儘壓死○林大學頭様御家内方共都而屋根下ニ埋を候處大學頭様御子守共無事ニ堀出候得共奥様ハ壓死○同日長河田八之助自身執生共雨戸を踏放し庭内に飛出候得共家内子供等屋根下ニ埋を堀出無事下女二人壓死○靈岸島越前様御家來安河要藏妻棟ニ壓を即死自身大怪我生活無覺束神明前書林和泉屋新八郎死同書林佐野屋喜兵衛母妹即死○水野出羽守様御家來土方薩殿之助家來不殘屋根下ニ埋を堀出シ無事若黨一人即死○傳聞不儲本郷丹後守様御即死 御側御用 戸川播磨守様諏訪部文五郎様阿部伊勢守様御實母即死松平采女正様若殿右同水戸御側用人藤田誠之助右同御家老一人土席以上十三程即死松平下總守様御奥様奥平芳蓮院様御姫於壽々様御殿向一同相潰レ老女二人外御女中數多即死御奥様御無難○松平時之助様即死百七十人程會津様二百六七十人御臺場詰七十人程因州二百人余増山様四十人余井上様三十五人肥前様百九十人本所深川ニ而御家人御旗本壹萬余下谷方ニ而三四千計町家ハ幾万人ト申風聞無之絶言話候次第ニ御座候

一損所大略

御木丸百人番所潰を下勘定同斷黒鐵詰小屋同斷是ハ高石垣崩を掛り石壁を死候者未數不相分枯梗御門潰を和田會同斷其上樓其外石垣壁御櫓等所々大破私見受候者白金御屋敷前町家裏屋共拾軒余潰を即死多人其外破損三田臺町大槪同斷三田町少々薩州様御殿共ニ大破御住居不相成青山に御立除久留米様右同斷御住居ハ相成居申候潰家不相見神明前強

く倒を此邊尤強く相見申候柴井町邊之潰家之上燒失受岩下潰潰家數多外櫻田幸船内邊屋敷々々御殿御長屋共倒を燒失八官町邊破損迄ニ而倒家等不見受大名小路大破倒家等有之日比谷御門方龍口迄之處八代洲河岸邊一軒も不殘潰を横町少々宛倒をるゝる上御屋敷餘程張損シ西側御家老兼御小屋等住居不相成道三橋方御普請小屋大破酒井左衛門尉様越前様格別之大破ハ見受不申常盤橋外方日本橋邊之大損シ不相見本通筋京橋邊損家計内大破家所々有之京橋方新橋迄同様燒失塙地震ニ而土藏損シ候上之火故残り候土藏百ニ一も無覺束柴井町邊土藏數四五百も可有之内燒殘ハ貳ッ滿く相見申候其餘之都而燒失先私往來仕見受候處大略右之通ニ御座候

一承及候損所

千住邊新吉原淺草邊倒家潰家七步通餘之都而大破下谷本所深川邊同斷赤坂邊潰を家倒を長屋等所々ニ有之品川邊右同斷小石川邊高之の分少々輕く下々之者ハ不及申候椿大小名ニ而も住所無之野宿被成御凌々候御方數多有之候

一死亡十萬ニも可及取沙汰仕候得共夫程ニ之有之間數四五百ハ必定相見申候死亡之者取片付棺柩杯存も不寄瓶早桶も即時品切ニ相成酒樽油樽醬油樽砂糖樽等小ふるハ底を抜詰込上下ハ筵ニ而ツ、葛籠天水桶玄蕃桶長持そうめん箱米俵炭俵もつかふニ乗せ候も有之又ハ人馬共車ニ積揚ケ引參候も赤羽橋ニ而兩度見受申候

一三日公儀方御觸達當年申月次出仕御用捨玄猪御祝無之諸大名屋敷潰を燒失等ニ而難潰之面々勝手ニ御咄被下御城御飾場所之外都而其儘ニ被差置候ニ付屋敷ノも右心得ニ而入用不得止場手輕作事いたし候様昨年武器用意之ため年賦拜借之分都而被捨下以上御觸而大意之書取諸大名御側業御使番等を以三日之書一統御尋上使右之稜々之御承知ニも相成居たる儀ニ奉存候得共餘り速ふる御決議ニ感心仕上仕候

一一番御馳付ハ御老中内藤紀伊守様是ハ御寢察之儘脇差計ニ而御馳出御途中御家來馳付候衣服大小等御借御召替被成候由奉入御覽候々條數多有之候得共何分暇無之只今急御使ニ付大いそぎ誠ニ大亂筆奉申上候以上

十月八日

遠山三右衛門

安政二年

七七三

〔小楠遺稿所收越藩吉田悌藏へ答ふる書〕

水府二田失亡無是非至にて角有名之面々不幸も天運共にても御坐候らはん心細き事に御座候藤田へは段々意見申遣候
筈にて既に草稿相認罷在候中凶變相聞別而殘念に奉存候二田失亡いたし候ては水府に申遣候相手無御座意見狀も其儘
にて封し置申候來春も相成候えハ清書等も仕り御手許へ差出思召も承り可申候

坂本善兵衛記

〔溝口孤雲竊旅勤勞積書〕

安政二年十月二日夜四時分江戸大地震家居悉く破砕引續八拾ヶ所より出火都下延蔓白日の如く死するもの數萬人此後
も數日之間雲夜震動無止時依之孤雲儀即夜より白金龍口双方ニ懸 御方々様御片付を初家中之面々假小屋取建賄等之
事ニ至迄種々致心配其末御兩御上屋。御下屋敷御宿坊等一躰之御作事且邸内御長屋御藏之内取除畠地出來之類共都而
一心之決斷を以て及差圖翌春御參勤前ニ者何方茂大略出來

十月三日將軍特に震災慰問使を江戸の我藩邸に遣はす

〔安政二年〕

〔異國船一件〕

十月三日之夕御使番池田内記様龍口御屋敷に御突懸御出御城方之御使を被仰聞直ニ御通之上御重役は御逢之儀被仰聞
候處折節御家老衆白金に被上居合不申候ニ付落合半次郎罷出候處非常之地震ニ付別段厚思食を以別條不被爲在哉御尋
之旨御演達

十月三日幕府は震災破損の修繕を簡略にすべしとの令を發す

〔安政二年〕

〔異國船一件〕

大 目 付に
此度地震ニ付御城内御破損所甚數ヶ所有之條處世上一般材木其外差支茂可有之に被思召候ニ付御締場所之外其儘被差
置候旨被仰出候間銘々屋敷も其心得を以全入用之ヶ所而已格別手輕ニ普請致し候様可被心得候
右之通可被相觸候
十月三日

十月三日幕府は震災大火につき本年中月次禮式を廢すること及び諸侯の隨意下國を許すことを達す

〔安政二年〕

〔異國船一件〕

〔十月八日附遠山三右衛門ヨリ市郎兵衛様宛書翰ノ一節〕
三日公義方御觸達當年中月次出仕御用捨支猪御祝無之諸大名屋敷潰を燒失等ニ而難澁之面々勝手ニ御暇被下云々

〔安政二年日記〕

〔十月九日附溝口藏人木村次郎左衛門ヨリ家老中老宛書翰ノ一節〕
此度非常之地震(中)且出火付而ハ上下一統之困窮難申計(中)前條之通未曾有之變災有之候付而ハ月次御禮不被爲受
各別御難澁之向者勝手ニ御暇を茂可被下置旨其翌日被仰出候云々

〔安政二年〕

〔異國船一件〕

大 目 付に
此度地震并大火ニ付諸向難澁之儀をも被思召候ニ付當年中月次御禮不被爲請支猪御祝儀も不被仰出候間一統不及出仕

安 政 二 年

候事

右之通向々に早々可被相觸候
十月四日

〔公書〕

大目付に

諸大名上屋敷地震并火災とも有之候向格別可爲難澁思召候間勝手次第御暇可被下候
右之趣萬石以上之面々に早々可被達候

十月某日幕府は潰家並に類焼につき万石以下の輩に對し貸付金の制を定む

〔異國船一件〕

今度地震ニ而居宅皆潰又者及類焼候向可爲難澁被思
召當時御事多ニ者候得共格別之譯を以萬石以下之面々
地方取共左之通拜借被仰付候受取方之儀者御勘定奉行
に可被談候

九千石方五千石迄 金貳百兩
四千石方三千石迄 同百五十兩
貳千石方千石迄 同百兩
九百石方七百石迄 同五十兩
六百石方三百石迄 同三十兩

貳百石

同貳十兩

百石

同拾兩

但百俵も同斷餘も准之

右之通類焼向に拜借被仰付候

九千石方五千石迄 金百四十兩
四千石方三千石迄 同百兩
貳千石方千石迄 同七拾兩
九百石方七百石迄 同三十五兩
六百石方三百石迄 同二十兩

貳百石

同拾四兩

百石

同八兩

但百俵も同斷餘も准之

右之通居宅皆潰家之面々に拜借被仰付候

但半潰之分に之右之半減拜借被仰付候

一御足高御足扶持共ニ拜借被仰付候事

一御役料ハ相除候事

一御扶持方拾人扶持取五拾俵之積りたるをき事

一返納之儀之來ル已年方十ヶ年賦たるへき事

今度地震ニ而御家人末々輕キもの共居宅皆潰又之及類
焼可爲難澁候間格別之譯を以少給之者末々ニ至迄爲御
教左之通御金被下候受取方之儀之御勘定奉行に可被談
候

九拾俵方五拾俵迄

金七兩

四拾俵方三十俵迄

同五兩

貳十俵方十五俵迄

同三兩

十五俵以下

同貳兩

右者類焼之者共に被下候

九拾俵方五十俵迄

金五兩

四十俵方三十俵迄

同四兩

貳十俵方十五俵迄

同貳兩

拾五俵以下

同壹兩壹步

右者皆潰家之者共に被下候

但半潰之分に之右之半減被下候

右之通萬石以下之面々に可被相觸候

十月

十月五日我藩は本日より九日迄の間に於て相州警備兵の一部を歸藩せしむ

〔相州御備場御用一件〕

(全文繁雜なるを以て要領を摘記す)

十月五日 中小姓組米村平之允以下十九名(十一月五日歸着)

十月七日 杉浦津直門人引廻森小右衛門以下炮手廿名(十一月十三日歸着)

全 平野新四郎門人一名(全右)

安政二年

全 牧新兵衛門人引廻杉谷十右衛門武藤猪左衛門以下十七名(右全)
 十月八日 内尾源八門人引廻井上彦五郎權野四郎助及ひ炮手十九名(全右)
 全 中村五郎右衛門人引廻緒方久左衛門沼田勝太及ひ炮手十九名(全右)
 十月九日 平野新四郎門人引廻中垣久之允及ひ炮手十六名(十二月六日歸着)

十月七日日本藩主菅の砲壇震災により處々破損せしを以て其概況を幕府に申告す

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

海岸御月番

牧野備前守様

越中守相模國御備場之御臺場去ル二日夜地震ニ而處々及大破申候乍然防禦筋差支候儀之無御座段彼地詰役人共より申
 越候右之外委細之儀之追而可申上候得共先此段御届申上候以上

細川越中守家來

清 田 新 兵 衛

十月七日

十月九日在府本藩老臣は書を藩政府に贈り經費節減に關する其意見と藩主の直書に諭示せる所
 と符合するを喜ひ且つ震災後事情一變せしを以て家中の諸制度世子下國の供調べ等につき更に
 協議の上何分の指揮ありたき旨を陳ぶ

〔安政二年日記〕

以別紙申達候儀素節儉之儀付而之近來從公義被仰出之趣有之現實嚴敷御取扱ニ而下方ニ而之種々之風評も有之是迄之

有様ハ時勢もとんと打替候間何様格別之御取締無之候而ハ内外とも御爲ニ相成申間敷依之公邊並諸家様方之御模
 も聞合其上ニ而得斗及御相談候積ニ御座候内此度非常之地震本行諸家様方之御模樣聞合之趣別紙書付相添且出火付而ハ上
 下一統之困窮難申計自然と儉素も被行候時節ニ至候事ニ付諸家様方ニ御先立年々之御上下を初地場之御事柄とも少々
 之異論ハ御押崩ニ而耳目を驚し候程之御取締無之候而ハ何も歎も後手ニ相成世間之流波而已ニ御隨之形ニ成行外議及
 如何程ニ可有之哉此機會及御失無之候ハ、兼而御勝手向御宜々此方様さへケ様と申勢ニ而諸家様方も夫ニ被準候儀ハ
 必定ニ可有之候間御英斷ニ而非常之御取扱有之度と申談之趣機密間に書取を致させ候處先月廿二日其御地被差立候
 御飛脚ニ大阪より之抜狀昨夜着御取締付而御直書之寫被差越被仰越趣致承知候御直書之趣意當表之時情ニ致符合奉雀
 躍候然處前條之通未曾有之變災有之候付而八月次御禮茂不被爲受各別御難波之向之勝手ニ御暇を茂可被下置旨其翌日
 被仰出候程之事ニ而當表猶又致一變候付彌以實地ニ被行不申候而ハ難相成左候へハ御家中衣服御制度音信贈答等之心
 得ハ追々被仰付置候小節目之通及差圖可申哉當表昨今之有様ニ而ハ些取締兼候氣味有之第一御上下之御行粧御差略之
 稜目不相分候而ハ差寄來春若殿様御下國之御供もらへ如何様共難及差圖旁有非常之大變有之候譯を以今一應被仰談御
 様子急ニ被仰越候様存候此段爲可申達如是御座候以上

十月九日

木村次郎左衛門
 溝 口 藏 人

御 家 老 連名宛
 御 中 老

別紙

書取

水戸前中納言様隔日御登城被爲蒙仰候儀者深き御趣意有之候儀と被考其即下御老中様御初追々御除役之御方有之引續

安 政 二 年

七七九

異賊に御條約之和解書等御渡ニ而諸家實備之儀被仰渡擬又御政務之儀御代々様之思召を被爲繼毎々御世話被在候得共年久敷昌平之化ニ溶し人心兎角外見虚飾ニ相流れ萬端手重ニ成行無益之手數而已相増實備之處往々御安心不被遊殊ニ近來異賊引續致入津夫々御處置之品も有之候得とも後來別而非常之手當肝要之儀ニ付此度諸事各別簡易之御制度ニ被爲復總而無益之舊習手重之古格を被爲省質素之士風ニ相成候様被遊度との思召ニ付追々被仰出候品茂可有之因而一同右之思召ニ基き萬端厚中合聊等閑之心得無之様精々忠勤を可勵旨八月七日御廻狀到來いたし其後先月五日に至り御政務筋之儀ニ付此節改而被仰出候趣も有之御手許より萬端格別御儉素御用ゐ被遊候付而ハ金銀之御道具類も夫々可被遊御下け旨被仰出其餘奥向御女中多分御減之上都而錦服ニ被仰付一ヶ月御賄之御入費も六千兩を千五百兩に被減且市中ニ而ハやかて料理屋御遺或之無益奢侈之品物等賣買ハ一切被差止猿若町之芝居も來春方は錦服ニ被仰付杯々種々之唱も有之候得とも其儀之實否何程ニ可有之哉乍然前條被仰出之通候得之先つ御手許より萬事御儉素御用ゐ被遊候ニ相違ハ有之間敷加之去ル二日之夜大地震に而御城内を初御大名様方及市中とも夥敷潰家有之引續大火ニ及候付別而武家難澁之儀を被思召上當年中月次御禮並玄猪御祝儀茂不被爲受且諸大名各別難澁之向ハ勝手次第御暇可被下置旨被仰出右之一條ニ而も當表古今無類之變災と申儀ハ相分り然而近年御城茂度々燒失且昨年 禁裡炎上諸國地震津浪其餘種々様々之災異有之候儀ハ全く一統之奢美を被懲候天成ニ相違無之其天成ニ無心附致來り之儘押移候ハ究而永續六ヶ敷又敬慎恐懼いたし種々改革等を以萬弊を除絶し儉素を相守り候へハ殃を轉而慶となし候儀和漢其例不少候間追而ハ公邊より烈敷御沙汰可有之乍然於諸家様之右御沙汰を御待被成候譯ハ無之一刻も古風ニ復候御取扱無之候而ハ難相濟筋ニ候へ共兎角舊習之儘御押移之御方多候所乍恐此方様ハ御先祖様御以來各別之御忠節ニ而公義よりも御依頼之御模様ニ候へハ先つ一番ニ右之御趣意ニ御手を被附差寄年々御上下之節御持せ之御道具等虚飾ニ類候分ハ都而御用ゐ無之其外之品々茂左迄見苦敷位ハ無御講被差置御供立も上下之無差別股引半切地廻御行列ハ一切錦服被仰付夫に應上々様方之御仕成を初御家中之心得等嚴敷被及御沙汰太平中ハ成丈富國之基を被立置萬一兵亂之萌も有之候ハ、時宜ニ寄御道中御

供人數ハ増減被仰付大小炮も右之釣合を以御持せニ相成管之段只今より公邊に御届ニ相成屹々其通被行候者頓斗之機會ニ付諸侯方も必定御同様ニ相成可申左候得ハ公義之御趣意ニ符合いたし御城之御都合ハ不及申御自國之御強々其末ハ日本國中富國強兵之基と相成一稔之御忠節ニ可有御座且又昨年相州表御人數減之儀も必竟平穩之節無用之事ニハ可成丈失費を被省戰爭實地之節ニ至り屹々御忠節を可被爲立との趣之追々御内意ニ相成御老若様方も至極之御取扱御感心茂有之候程之事ニ而夫等之境ニも御趣意首尾いたし候形ニ相成左候へハ治ニも亂ニも乍二つ御忠節を被爲盡候譯ニ而被は大ニ御都合可宜何程ニ可有御座哉右者非常之御取締筋不容易儀ニ付詰合も少き江戸表を議を起候儀ハ重疊心痛之至候得共當今公邊之御模様委敷儀者御國許に不相分事ニ付前條之次第一と通申向候迄之儀者當表之威掌難通尤成否ハ御國許同席及御奉行中幾重ニも參談を被遂尊慮を茂奉親候上如何卒御治定ニ相成候儀申迄も無之來存若殿様御下國之御供えらへも右御治定相分り候上夫に應諸事及差圖可申何様如是之時節ニ至り候而ハ少々之差障等ニハ無拘斷然と儉素之古風被復候儀重疊奉禱候事

十月五日

十月九日京都の儒者梅田源二郎書を長岡監物の家臣笠隼太父子に贈り異船一條に關する計畫京師警備の薄弱並に自身の近況を報じ別に意見書一封を附して之を監物に致さんことを請ふ

〔佐田文書〕 (佐田右傳氏藏)

一筆啓上仕候時下冷氣相成候處先以御渾家益御清祥可被成御摘奉賀候擬之昨年左一右衛門様ニと不計東武ニ而得拜顔大慶不過之候車太様より昨冬御狀被下御高年不相變御盛ナル事ニ而感心仕候呈一書御見舞御報可申上之處僥倖昨秋より大病ニ而當年季春死去仕候其後異船一條ニ付取懸り候事共有之取紛意外御無沙汰仕候段失敬御免可被下候乍恐幕府御處分御威光不相立戎夷益跋跨之勢天變地妖屢至り不堪寒心候何時海内と不論意外之大變京畿之間に起可申も難計

安政二年

候天朝之御警備甚以御手薄之事ニ候得之甚痛心仕候事ニ候何卒御良策も御座候者御垂調被下度奉存候諸生輩涯分之力之竭し申度覺悟ニ御座候何卒左一右衛門様ニ之今一度御登京も有之候者大慶不過之候御主君様ニも昨年不計御取持ニヨリ遂拜調大慶不過之候呈一書御挨拶可申上と存しながら延引ニ相成候前文之仕合宜敷御披露奉頼候御挨拶旁鄙意御講習申上度事内々有之別封相認候間此儘御直ニ御呈上被成下度奉頼候并筒屋手代出發ニ付不取敢時下御安否相同度如此御座候尙後便可得貴意候頓首謹言

十月九日

梅田源二郎

笠 軍 太様
笠 左一右衛門 様

几下

二白何茂様に宜敷被仰上可被下候僕も六月中後妻ヲ迎に申候間乍序爲御知申上候上原甚太郎ノ妻も當夏死去仕候西依熊太郎如何仕居候や心立少しハ改り申候や宜敷御垂調奉頼候不(別封今見)(當ラズ)

十月十七日幕府蝦夷地の開發を圖り士庶の移住を獎勵す

〔尊攘錄皇武令〕

伊勢守様御渡

大目 付に

五百石以下

御目見以上以下同惣領次三男厄介

清水附之者

浪人

百姓町人

右者今般蝦夷地一體上知被仰出候付御座本御家人之内風寒暑温を不厭山野を跋涉し筋骸を固め文武之修練心懸候もの共相願候へ者元身分ニ應し在住被仰付候間名前早々調可申候但萬石以上以下之家來主人見込之者も有之候ハ、申立次第是又可被差遣候間書面之者共何をも荒地開發野馬牛牧養を始として食料藥用ニ可充生類育方金銀銅鐵鉛山開堀巨材薪柴伐出草木類植付石炭掘取器具製作採藥鯨獵何ニ不依生産ニ相成候類並湊附之場所に休泊所茶店取建度存候者ハ任望被差遣尤其品ニ應し御手當をも可被下候猶又御國益ニも相成格別出精之廉顯を候者ハ篤と事實相糺士人は身分御取立農工商之輩は地所家宅等相渡其上御賞賜御手當等も有之候條右之趣相心得有志之者ハ其筋迄可願出候猶委細之儀ハ箱館奉行可承合候

十月

十月十九日日本藩老臣大木舍人幕府より借入金のことにつき在府老臣と通議する所あり

〔自筆御用狀扣〕

安政二年
以內狀得御意申候 公義より御拜借金之儀付而者先頃御取遣ニおよび御申談之趣被仰越御同意仕居候處近來 公義御役方吉田平之助に内話有之無利足ニ而拜借被 仰付候由併御拜借濟之時分たとへハ壹萬兩ニ貳百兩之御挨拶金有之候由尤最初限りニ而元金迄十ヶ年賦ニ返納ニ相成候而宜由左候へハ先通し貳歩之利ニ相當外ニハ何之懸物及無之由諸家様者御備場等御受持之御方様者惣而御拜借ニ相成候處 此方様計り御拜借無之に申候而之 公邊之御向茂宜相聞不申之事も内話有之同人よりも頻ニ相勸メ申候右御拜借之儀之少しも好候儀ニハ無之候得共近來莫太之御出方面已ニ而一向ニ御備無之候間只今何事も申候ハ、先ハ手茂足も出不申に申様之有様ニ付何程ニ可有之哉彌以平之助贈ニ相違無之候ハ、今三万金も拜借に申出候ハ、壹万五千可被濟下哉左候而此許に御備敷又ハ櫃方ニ而も御引渡

安政二年

七八三

ニ相成如何卒御仕法茂可被付哉右之一件委細之藤井七右衛門より御元御勘定頭ニ申向候由ニ而伺おもいたし可申相州表之儀此間之風損後跡御作事先御覺置被申儀ニ候へ共自然今御普請ニ申事起りもいたし候ハ、一向御備無之候付得斗急ニ被仰談御咄合之趣急便を以被仰越可被下候以上

十月十九日

大 木 舎 人

溝 口 藏 人 様

小 笠 原 備 前 様

十一月六日柳河藩重臣立花壹岐書を在府同藩士池邊藤左衛門に寄せて水戸兩田の震死を悲しみ當今の急務は横井平四郎を水越兩藩中に薦め以て同志者の誠意を天下に通ずるの道を開くに在ることを力説す

〔渡邊文書〕(原書ハ筑後山門郡城内村渡邊村男氏所藏但シ本文ハ田尻佐氏寄贈ノ寫シニ據ル)

追々承度毎驚入計ニ而實ニ絶言語心痛此時ニ御坐候就中水府兩田之一件是ハ先月二十八日晚之夢ニ水戸一鉢兩田之身ノ上心遣ひ之想像ニ顯レ夢さめて惣身流汗何分無心元其地ノ之飛脚ハまて共ノ、不來何分堪兼東肥横井へ書狀仕出し彼藩ニ之可相分居尋ニ遣し申候處横井方小兒死去ニ而返簡延引昨五日朝過キニ使歸り返書被候處兩田壓死之由心中何共申難く天下之爲流涙中打つゝ龜公被發貴兄ノ之御狀被差出是も同様兩田死去之由心底御察可被下候扱々天下之廻運ハ老公隱然タル御心術ニ而ハ決而不相成兩田も同様隱然之運ひニ而之誠ニ不宜夫れを其儘打過候而ハ老公兩田自然と正大公明ニ被立候譯無之此故ニ小生杯心カヲ盡し兩田之心術ヲ打返し老公ニ及し天一變動一本確定之大計ヲ謀らんと日夜心志ヲ苦メ唯々兩田ヲタヨリいたし居候處今度兩田ヲ失い候而ハ誰ニ向て心志ヲ述へ可申哉老公之御心中奉恐察扱々恐入候仕合流涙迄ニ御坐候大變とハ致し方無之天兩人ヲ被殺候而之老公も被殺候と一般天命既ニ徳川氏之

天下ヲ被棄候ニ而ハ無之哉如何いたし而宜しく御坐候哉兩田亡此以後天下之爲良策有之といへとも述るに依處無之實ニ是迄ニ而御座候早々御歸國御待申上候其上尙廻運之一件御咄合可申上既ニ今度之兩田へ差出之草稿も成り此便ニ之差出さんと心得居候處扱々言語同斷ニ而御坐候天下之事件多々存寄之御坐候得共不申上候今度横井ノ之返書入御覽申候能々御懇談可被成候小生存寄之横井とハ一々同一ニ參り相違も無之候先ツ天下之事情正大之運ひハ此横井返書ニ而大様分り申候御勘考可被下候然りとはいへ共誰ヲ頼ニカヲ可用哉、ニ至り而流涙ニ御坐候

一天下如是應援ヲ失ひ候と而足ヲ止メ默然とし而力氣ヲ不用ニハ有志天下ヲ思ふ乃習忍處ニ無之如是凶害出來たる後之致し方無之以後之運ひハ如何々々如何之御賢慮ニ候哉ハ存し不申是ハ扱置先ツ小生愚計之水府兩人ヲ失ひ候而ハ如何なり共致し横井ヲ水府ニ可出事ニ御坐候此處能々御力ヲ被盡度有志之一身天下之爲死而も恨ミ無之今度大變ニ而十万余人之苦死中ニ兩田も同様其半ニ我々ハ存へ天助ニ感じ且十万余人死者之爲ニ天下ヲ一變する之誠意天下ヲ動さすんハあるへららず死而も恨べきニ非ず御力ヲ被盡度尤横井ヲ水府ニ進る之策容易ニ參り間敷先度越前主税へ之御狀申横井同藩に御進メ重々御同意ニ御坐候同藩ニ出候而も忽ち天下之應援と相成可申いつを兩藩之内ニ横井ヲ出シ御互天下ニ通ずる之道ヲ開候事當時之大急務何事ニ是ニ過可申哉此事出來候ハ、以前も能天下之大計成り申候此事出來不申迄之依然タル今日之而日天地百神ニ對シ何分面無之有志者之恥辱實ニ此上無御坐候返すノ、も御勘考可被成候
右天下之事今度之兩田之死ヲ聞キ心氣ヲ碎キ委細之認得不申然も横井返書之能々御懇談可被成御心得ニ相成申候以下一藩之事

(中略)

小生心得大概如是ニ御坐候御教示可被成下候右之今日認メ置申候尙飛脚當日ニ至り申陳候品も可有之候恐惶謹言

十一月六日

立 花 壹 岐

親 雄 拜

安 政 二 年

七八五

池邊藤左衛門様

人々御中

十一月七日長岡監物書を水戸齊昭に呈して巖に震死せし戸田藤田の不幸を悼み併せて治躰形勢を論して齊昭の過擧なからんことを希望す

〔小橋記録〕

草莽之臣禮讓に疎く身之程を辨へざる罪不勝恐縮に候へ共天下之御爲默止罷在に忍びず殊に去春出府中敷ならぬ身に意外之御懇慮を奉蒙候儀實に心肝に徹し報國之微忠片時も不忘念頭を彼是不能已至情より心盡しに彼の蕩くつ書集めて恐多くも東之空高く奉呈上候先以方今天下累卵の形勢言語に絶し候次第奉申上候迄も無御座候固より斯るへしとの御先見被爲在候故にこそ御代を知しめされ候以來幕府之御爲切々として御忠志を御盡し被遊候へ共御用ひ無之而已ならず却而讒者之舌頭に被爲係天下日月之光を失ひ候より夷賊驕傲禍今日にせまり誠に無是非事共に御座候然處思はずも一昨年墨夷浦賀に渡來兵威を挟み迫りて交易を請候其大患中に天下之幸となりて難晴積年之雲霧一朝に消散仕海防御委托之台命を蒙らせられ日々御登營之御模様四方に聞へ列國之志士仁人忽愁眉を開き天下之事定れりと勇立候ひしに嗚呼天運の然らしむる所か廟堂之佞姦依然として俗議を主張し日月を貫く御忠誠も徒に相成終に御委任之嚴命をさへ被奉辭候に至り神州之衰運只々曼天に號泣仕候より外無御座候然共猶も神君之御餘德不被爲盡徳川之御武運日出度被爲在候故に候哉先般兩閣老御退職以後再び天下之御政務御相談之台命下り要路の御役々も漸々人才を被擧候勢に移り神州一新之光景西海之果迄も目を拭ひ耳を側てひたすら以往々御美政を奉希望居候處思ひきや先月三日之大地震古今未曾有之大變死亡之者も殆十萬に及候杯と相唱申候中にも別而驚嘆仕候は御内に戸藤兩賢臣之壓死天道は是か非か擬々遺憾之次第天下之御爲悲泣胸に迫り長大息仕候此兩羽翼を御失被遊候御哀情之御情態はとかく奉申上候も恐入候

儀に而私も昨年春無存懸兩賢上之御命を受歸郷仕候後も日として思出さるなく如何にもして今一度得而暗度心願も空敷永き別れと相成實に骨肉至親を失ひ候にも越只々夢之心地に而忙然と相成候心より乍恐尊慮之中深く奉汲計候へはそゝろに袖をしほり頻りに感慨を起し過慮仕候儀も不少勿論剛健有爲之御志此時に至り御屈し可被遊とは不奉存其儀は露程も不奉氣遣候處斯る折に臨候而は古人も多く天をうらみ候憤怒之氣胸中に溢れ事を破り過を取候歴代之覆轍可懼事に御座候へは若や寛容浩大之聖慮も悲憤之情に不被爲堪切迫に事を急かれ候御誤共は被爲出来間敷哉と奉案勞候天下之事は如何に迫り候共御胸中は愈寛大に不被爲在候而は御思慮不愼怒又候間を窺候小人之爲に禍を被受候は必然と奉存候世になき兩忠臣之亡靈も黄泉より奉過慮候は全く此儀而已に可有之かと體察仕候御三思奉伏願候

一 治を論せは先づ其體を可知と古人も申置候體とは形勢を申にて可有之形勢は時と共に變して一定不仕者に而天下之事は昨年と今年とは形勢大にかはり申候されは夷賊應接之道も昨年は昨年の體あり今年は今年之體あり一概に事を執候而は却て國體を失ひ可申候哉試に一事を奉申上候へは墨夷測量御斷之一條など尤天下之人心得愉快を可申候へ共於私不奉安心候固より容易に可被許儀にて有之間敷ながら此一條を以彼國迄使節をも被差向候と申は何程に可有御座哉既に彼等神州に船をよせ候儀を御免被成候上は彼が願も更に其理無きにしもあらず御斷之趣可奉得其意哉無覺東奉存候堅く可被禁根本之通信上陸は彼が申旨に被任置如此枝葉の争より事を引起し兵端を開かれ候にも至候而は神州に有人と可申哉海外爲識者笑を取可申候加様之儀も昨年體より申候へは決而不可許今年之體より見申候は是を被許たり連御恥辱を重ねられ候共難申却而彼を懼るゝに似て甚以殘念に奉存候しかし此儀は最早天下に其御沙汰御座候に付今更申上候にも無用之事に御座候何さま彼と定約を堅められ候今にしては今丈之國體を不被失向後も彼が願を茂可被許筋は如何にも御許置かれ於大義難差通天下之心是をしも忍ぶべくんばと云に至り候而必至を以被争決然として戦を始給は天下義憤之鋒先一擧に夷賊數萬之軍艦を海底に乗沈ん事無疑候右は全く外夷應接之一條に而此餘凡而天下の事寬急本末大小輕重宜を得今日之體を不被失様之御處置偏に奉希候

一物有本末事有終始先後する所を知らば道に近しと云る聖經之旨に達せざる者は實に正しく塔に面して立るが如し其可申乎世に知者と仰かれ識者と尊れ候も此本末之序に明なるを申に而可有之候さらぬだに大變革之御時節なるに此度の異變に付而は彌以變凶爲吉之御大慮置難得大機會かと奉存候得は何卒本末之次第を不被失先大根本之堅固なる上にも堅固に御取堅めに相成度現列藩武備之嚴整ならん事を欲し給は、廟堂之諸君子先列藩困究之情を御體察然而於此處非常之御評議被爲在度候今日列藩之志は幕府の御意り也然れば其意を責給はんとらば廟堂先其罪を己に歸し己を被責てこそ列藩感服興起可仕候罪を己に不歸困究を救の仁政なくして武備を而已嚴にせよとの命令幾度出候共天下之人心決して奉服間敷候富國強兵は方今の要務に候へ共廟堂富國強兵を被唱候へは忽ち利を而已謀り候列藩の俗吏聚歛苛酷之政下民を苦め國本を弱め内亂を招の端共罷成可申候今日に當而孟子之確論目に指をさすが如く覺申候仁義あれば富國強兵其内に有之事にて器械備り倉廩滿る共上仁義の政なく下忠孝之心を失ひ候而は何を以秦楚之堅甲利兵を討可申哉物有本末事有終始幾重にも御思惟被爲在度奉祈願候

右不敬之過言深く奉恐入候而已ならず悔は跡より起るとぞ聞し高詠をも等閑に相心得候様にも可被爲思召上哉に候得共實に不能已心底より相認候儀に而心なく筆を馳候にては無御坐候間其罪を被免御勘考之端共遊し被下候は、誠以冥加至極難有奉存候謹言

數ならぬ身も世の爲とちゝにくたく心は筆に任せさりけり

霜月七日

長岡監物

十一月八日日本藩政府は前月九日附在府老臣の經費節減等の通議に對し大凡同意を表するも其細目に至りては自ら事情の異なるなき能はざる旨を答ふ

〔安政二年日記〕

委曲被仰越進致承知候成程此節其御地非常之大變付而ハ至極之機會耳目を驚候程之御取極無之候而ハ内外ニ懸不相濟

時勢之段至極御同意之事ニ付重中談候得共此元ニ而ハ一統之人氣左程ニ至り兼衣服飲食等之事先年一統及連候外枝目難立變梅も有之當時最中申談居候得共未治定ニ至り兼候間相決次第急使を以申達候言ニ居申候尤來年御參勤之節御供立等之儀ハ稜々奉伺御用人御小姓頭ハ一人御供御近習御次等之御供ハ少し減少御持せ之御筒三十挺ハ御立着迄御持せ其餘ハ御列行外箱入ニして御持せ御供之面々御物頭以上ハ踏込野羽織平士以下ハ惣而股引半切野羽織ニ而御道中御行列ハ總而御差略ト申迄ハ窺取置候得とも猶此上ニも御差略之儀段々囁合居候間是又得斗治定之上可得御意候兎角此元之儀ハ急決いたし兼何も無心配之御責も可有之候得共心底に不任儀も有之御用捨可被下候機密間まらへ之書付諸家様聞合之書付ハ直に留置申候以上

十一月八日(本書は在府老臣の通議書に朱書して返送したるもの也)

十一月九日我藩義に震災による砲墩破損の概況を申告せしが更に詳細なる調査の結果破損頗る大にして防禦の支障なしと謂ふ可からざるを以て追申書を幕府に提出す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

十一月九日神谷矢柄持參海岸御月番牧野備前守様に差上候處御落手候段御取次を以被仰聞候段書拔帳達有之細川越中守相模國御備場之陣屋並御臺場等先月二日夜

地震ニ而破損所左之通御座候

一觀音崎陣屋並右御臺場御番所軒瓦墜所々崩落

一 大津陣屋向並土藏不殘軒瓦墜所々崩落

一 同所御臺場石垣二箇所崩落

一 同所外廻石垣所々崩落 間數十八間

一 壹箇所長十七間餘 高壹間五尺

一 山谷戸角場焙硝藏軒瓦墜崩落

一 壹箇所長二十五間餘 高壹間餘

一 鴨居陣屋並土藏軒瓦墜所々崩落

一 鳥ヶ崎御臺場下石垣貳箇所亂杭共崩落

安政二年

七八九

- 内
- 壹箇所 長二十八間 幅四間
- 壹箇所 長十二間半 幅五間
- 一 龜ヶ崎御臺場石垣二箇所崩落
- 内
- 壹箇所 長四十九間 幅三間餘
- 壹箇所 長二間 幅二間
- 一 猿島破損所
- 一 御臺場炮門石垣二十七箇所崩落
- 内
- 大灣戸 長三間餘
- 十四箇所 高六尺 幅二間三尺 宛
- 亥ノ崎 長三間餘
- 十三箇所 長六尺 幅三間 宛
- 一 焰硝藏一箇所大破
- 一 道筋山崩六箇所通路支
- 内
- 壹箇所 長十間 幅二間
- 壹箇所 長四間 幅五尺

- 壹箇所 長九間 幅四間三尺
- 壹箇所 長四間 幅三間
- 壹箇所 長三間 幅三間
- 壹箇所 長九間 幅二間
- 一 柵門通石垣壹箇所崩落 間數十三間半 高五間半
- 一 地三箇所引割
- 内
- 壹箇所 長二十四間 幅二間
- 壹箇所 長二十一間 幅二間
- 壹箇所 長十間 幅一間
- 一 細川能登守細川山城守請持之臺場破損所
- 一 旗山臺場炮門石垣三箇所崩落
- 一 同所巖石少々崩落
- 一 同所番所小破
- 一 十崎番所所々破損
- 一 同所海岸石垣五箇處小破
- 右之通彼地詰役人共々申越候此段御届申上候以上
- 十一月九日 細川越中守家來 神 谷 矢 柄

越中守相模國御備場之儀先月二日夜之地震ニ而處々及大破候得共防禦筋差支候儀之無御座委細之儀之追而取調可申上旨同七日先御届申上置候其後委細取調候處外々御臺場別紙御届申上候通所々及大破候得共防禦筋差支候儀之無御座候然處猿島之儀之地方より二拾町餘相離候孤島ニ而地震後三四日程之波高ニ而渡海出來兼見分難仕海上穩ニ相成候上得と見分仕候處海岸石垣並切通し御臺場通路筋等所々崩損大灣戸並亥ノ崎炮門前二十間餘宛輪組之場處三ヶ處引割一二尺程之地引下至而危相見且炮門左右之土手石垣共悉破損仕只今之分ニ而之何分防禦筋差支申候依之守衛之者共差置候而茂防禦難相成其上風波之節は兼而渡海相成兼交代差支五六日茂相滞候儀間々御座候而難澁仕前文之通大砲居付之場處引割危相成居候付而之此末永雨等ニ而尙又崩落候儀茂難量左候而之大炮之場處に茂係り甚心遣ニ有之殊ニ炮門左右之土手崩懸居候付而之差寄手入等茂難出來彼是難澁仕候付御修復出來迄之右守衛之者共並大砲附屬之品々共ニ大津陣屋に先引取せ置申度段彼地役人共より申越候右之不容易儀ニ御座候得共防禦難相成場所に番衛差遣置候茂空敷儀ニ奉存候付御修復出來迄暫之間前文之通大津陣屋に引取せ置大砲等手入を茂仕せ度奉願候最前之御届申上候節猿島之儀之渡海難相成候付追而御届可仕旨可申上之處其儀届兼奉恐入候此節委細之趣御届仕候付此段申上候以上

細川越中守家來

神 谷 矢 柄

十一月九日
十二月廿五日御用番牧野備前守様方御呼出ニ付御留守居代勾坂平右衛門參上之處本文伺書ニ御書取御添御用人を以被成御渡
書面之趣追而相達候迄之大砲其外共大津陣屋に引取都而申立候通相心得尤異船渡來之模樣次第御固相立候儀と可相心得候事

十一月十三日在府本藩老臣は幕府より借用金のことにつき國老大木舍人に答へて反省を促す

〔安政二年 自筆御用狀扣〕

御内狀致拜見候 公義に御拜借金之儀付而之及御取遣置候通御座候處其後御役方々吉田平之助に内話之趣依而被仰談御見込之趣等委曲御指廻之通ニ付御奉行に茂得申談候様申置候處無利足ニ而御濟出之時分壹万兩ニ貳百兩之御挨拶金御出方迄ニ候へハ至而之輕利ニ而此砌一稔之御差繰ニハ相成候得共餘り結構成御取扱殊ニ 公邊御相手ニ而往々之變化之恐茂有之御奉行初御役々茂不進ニ而差寄御地風損跡之御入目杯致案勞居候處貴所様御初各別之御厚配を以案内御手輕先御才覺等ニハ不及候津志馬方申越候由左候へハ差臨候筋も無之候間可成丈ハ御拜借無ニ被押移度之申談ニ御座候得共右等之譯を以御斷等申立ニ可相成様も無之仍而平之助より御役方迄演達之振合重疊申談候處兼而御大國を被爲 知召上御備場御用等之儀之御武門第一之 御公務ニ付近々御物入莫太之末御難渡之上ニハ候得共被爲續候丈ケハ御自力を以被遊 御動上候様有御座度ケ様之爲ニハ江戸大坂に御用達を茂被立置夫等之手段も盡し如何躰ニも御取續不出來節ニ至候得といや共 公邊に奉繕外ニ無之段御國元重役共方申越候之趣を以平之助方程能内意御斷申入候而ハ如何程ニ可有之哉折角内輪御取扱之御見込迄も御研究ニ相成候儀右之通表裏申談いたし候儀甚以心外之儀ニ御座候得共拜借之未便利之取計等ニ相成候儀萬々一 公邊に相洩候様之儀共有之候而ハ以之外之事ニ付實ニ右拜借之御手を不被付候而難叶時節迄ハ可成丈其儀ニ不及候様有之度に申談候條不惡様御汲取猶御許之御模様次第宜被仰談候様存候以上

十一月十三日

小笠原備前
溝口藏人

大木舍人様

十一月十五日藩主齊護は時局に鑑みる所あり老臣以下備頭番頭等に對し文武節儉等厚く誘ふべ

き旨を諭す

〔神庫文書巳印十二番十五印〕 (齊護)

(卷込上書)

安政二卯年十一月十五日於陽春監物へ相渡頼母舍人へミセ候様備頭初番頭へ茂ミセ候様申聞相渡ス備頭初丹右衛門三左衛門忠左衛門亘番頭不殘逢此趣一ト通申聞也

先達而茂申聞置候通當時從公邊茂専ら武備御取締ニ而畢竟士中物場之強弱茂平素士氣之張弛茂兼而共方共心懸之厚薄ニより候間深心を用文武節儉等之儀厚相誘候様可致事

十一月廿日我藩は急に砲墩の修理を施さ、れば事變に臨みて防禦の術なきに至らんことを慮り鳥ヶ崎龜ヶ崎觀音崎等の臺場修築を幕府に申請す

〔相模國御備場御用諸御願御同等〕

御勘定奉行

松平河内守様に

越中守相模國御備場之御臺場先月二日夜之地震ニ而及破損候内鳥ヶ崎龜ヶ崎觀音崎者差寄防禦筋差支候儀者無御座猿鳥之儀者何分防禦筋差支申候段委細牧野備前守様に御届仕置申候右寫ニ通差上申候然處鳥龜觀之御臺場破損所之儀茂當時之儘ニ而被差置候得者兼而波當強場所ニ付此後強風雨等茂有之候得之彌以破壞ニも至防禦筋差支候程ニ可相成哉茂難量其節ニ至候而者御修復大造ニ可相成候間此段早々御普請被仰付被下候様奉願候右ニ付御普請御入料高積候帳面彼地詰役人共よ差越候ニ付相添差出申候猿鳥之儀者備前守様に奉願置候趣茂御座候付相省申候以上 (右寫ニ通云々は參照せよ)

十一月廿日

細川越中守内

清田新兵衛

安政二年

七九三

十一月廿四日日本藩管地貢米を金納に換へられん事を再び幕府に申請す
〔相州御備場御用一件〕

越中守御備場御用ニ付相模武藏國之内御預所被仰付候付而者御取箇並諸上納筋を始郡村一體之取扱方越中守方にて是迄御預所無之役人共不知案内ニ而嚴密之御法則一圓相辨不申別而當年より者御料並御改正紛雜之調筋多端ニ頁被は大造之手數相懸差寄備向急務之用意等諸事世話筋茂行届不申役人共以之外當感罷在候付以來毎歲御預所御物成石壹兩之割を以上納御差許被下永上納之儀茂右ニ准壹貫文ニ永三百文之撫ニ被爲拜領此外小物成諸運上高懸り等浮物成分ハ總而免除被仰付一年限ニ引付取計候様被成下度委細當四月書付を以奉願置候通ニ御座候處今以御沙汰無御座最早御取固筋を始諸上納等之時節ニ至專急務之手數混合御模様ニ應治定可仕廉々茂差湊内輪大ニ困窮仕居候ニ付何卒急ニ御沙汰被成下候様幾重ニ茂奉願候然處前文願之趣者數廉ニ頁不容易儀ニ而殊更今般非常之地震御大變ニ付而者乍恐諸向御紛雜御出方筋茂大造之御儀歟と奉恐察候得共御時節柄憚入廉々御所務缺に相成候儀者再應難奉願候付於手元茂重疊手を詰省略仕自然先書願之趣難被爲叶御模様ニ茂被爲在候ハ、責而本途見取物成高懸物御張紙直段ニ金三兩増を以上納仕候米辻分迄石壹兩之規矩を以越中守引受上納ニ被仰付村高三分以上違作之節者檢見御取下被仰付三分以下之違作者石壹兩之有餘を以兼而相備置御損毛ニ至不申様價上納仕且御備場外郡村ニ拘候諸普請之儀茂右之有餘を以大破小破ニ不拘一切引受手限取計候様被仰付度奉願候左候ハ、第一諸御手數大ニ相減備向手厚ニ相成候様兼而世話筋茂行届彌以實備專心を用候様ニ仕別而難有奉存候何卒願之通被仰付被下候得ハ於村方茂諸事辨別を得異船渡來之節役夫等之一助ニ茂相成可申哉乍恐於公邊茂御手數相減三步以下之違作者御損毛ニ茂至不申且御普請筋之儀茂引受手限取計候様仕候ハ、大破ニ至不申内速ニ取防茂相整村方之作所を不害御所務方ニ茂相響不申様相成被是上下之御爲筋歟と奉存候間幾重ニ茂急ニ宜被仰付被下候様尤非常之天災等ニ而類外之損害等有之節者別段御出方被仰付度奉願候此段再應申上候以上

〔本文指令十二月廿五日
日交付せられたり〕

細川越中守家來

神 谷 矢 柄

十一月廿四日

指令

内意之趣は難相整候事

十一月廿六日水戸藩原田兵介書を長岡監物に贈り曩に監物が戸田藤田の變死を弔ひ且つ水戸齊昭の心情を慰めんとして懇篤の意を致し、を謝す

〔先哲遺翰〕(子爵米田家藏)

如命未得尊顔候得共貴齋拜誦仕候先以彌御安健可被爲渡奉敬賀候然者去月二日之地震別而江戸非常之震動實ニ可恐事ニ奉存候畢竟天之御戒歟と奉恐入候併館中兩寡君之勿論奥向迄壹人之怪我も無之大ニ仕合ニ御座候乍去戸田藤田之變實ニ残念至極無此上次第二御座候藤田事ハ兼而御懇命も被下候山追々内咄も承り居別而御殘念と奉察候老寡君も殘念かり候へ共不得止事跡持張候様杯小子輩へも被申付候へ共小子も老夫殊ニ微力ニ而中々不行届致方も無之只々兩寡君之得指圖政府方持廻し候積ニ御座候兼而御承知も御座候半同志中も追々君側向ハ勿論政府中へも入候間格別宜敷此上之ケ成メハ出來可申哉と樂居中候事ニ御座候扱又御配慮被下候之兩田死失候上之寡君何となく憤悲之氣も相發り萬一急迫ニ事を誤り候様之義も有之而之大切の場合ニ候間夫等之心を付候様ニとの御事實ニ以御懇志之段不淺辱次第二奉存候右之老寡君も悉被勞少々之事ニ而も役人共へ相懸急連ニ一存ニ而事を計候儀無之却而當寡君別而近來政事向へ張込萬事世話被致候をも老寡君ニ而ハ中納言餘り勢ひ宜過候間苦勞なり杯老父へも度々沙汰も有之此節ハ引締居候間御配慮被下間敷此上尙更御心付之儀ハ何分ニも御心被添被下候様奉願候右ニ付貴書御指出ニ相成早速老寡君へ指出

安 政 二 一 年

七九五

則一封手元へ相下ケ候間則津田氏相託指上候間御落手可被下候老父も地震後側向是迄之通相勤政府へ立入萬端正敷可相勤旨被申付何共迷惑至極ニ候得共藤田之萬分の一ニも盡力仕度至願ニ御坐候間此上之何分ニも御心付被下候様候ニ奉希候以老寡君先年方工夫被致候腰手繩二ツ被致進入度手許迄被相下候間則津田氏へ相託し指上申候御落手可被下候色々申上度候へ共津田氏御承知之通如何も繁雜手透無之候間貴翰御禮用事計草々申上候頓首

十一月廿六日

長岡君執事

成祐拜

二白朔日御仕出之貴書津田氏持參早速指出候處七日御仕出之貴書も御文意御同様ニ候間別ニ返書ハ不致候間其旨をも相運候様ニと譯而被申付候間此段申上候以上

十二月二日幕府は海外の状況を觀察し且つ非常の震災に鑒みる所あり百事節約を加へ家屋新築等に注意すべき旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕

大目付に

近年外夷度々渡來付而ハ守衛之に老御府内人別多ニ相成おのつから失費も相増候段ハ無據筋ニ候然ル處今度之天災ニ付而ハ莫大之入費も相増窮迫ニ陥リ尙更可爲難儀殊ニ此度不慮之死亡又ハ怪我人も不少哉ニ相聞何共歎歎次第ニ候畢竟夫等も中古ニ見合候へ之追々御府内人數多ニ相成候事ニ付諸家屋敷々々ニ而も家作等建詰候様ニ相成候故猶更非常之災害適兼候者も夥敷儀ニ可有之一體近年諸藩困窮之上右様之儀相加リ殊に外夷差湊候折柄當節之處ニ而之御府内老幼之男女子人別減少有之度候付萬石以上隱居並厄介之男女子等在所勝手ニも可被仰出候處先つ此節者不被及御沙汰候付向後家作者勿論年中之幕方等迄も銘々家之仕來ニ不拘万端手輕ニ取賄聊外見を不服質素省略を相用可被申候尤右之

趣等閑ニ相心得候向有之候ハ、急度御沙汰可被及候事

但本文之通相達候付而は隱居並厄介之男女子等在所に遺置度向ハ夫々相伺候様可被致候事

一萬石以上家來之儀前文人別減少之御趣意を以追々定府相減候様可被致候尤領分之遠近其家々之都合も可有之事故銘々勝手之事ニ者候得共可成丈御趣意相立候様可被心得候事

右之通寄々可被達候

十一月

十二月十三日我藩主の參勤歸國の道中從者に銃器を携帯せしむるにつきては其都度供方の口頭申告を以て氣賀關門の通過をも許されんことを幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

御用番様に

越中守參勤歸國之道中供之内ニ鐵炮爲持候ニ付而前以證文等差出不申御關所前者供方之内を以相斷罷通候様仕度趣越中守在府中奉願箱根今切兩御關所に御沙汰被成下候處本阪越度致通行候付氣賀御關所に茂今切同様御沙汰被成置被下候様奉願候此段申上候様申付越候以上

細川越中守家來

十二月十三日

神谷矢柄

十二月十六日備前守様方御呼出ニ付匂坂平右衛門參上之處左之通御付札御用以御用人御渡御留守居に相達候間可被其意候

十二月廿三日蘭國甲比丹ドンクルキユルシユス條約の改正を要求し所謂和蘭取極書成る

安政二年

七九七

〔吉田文書〕(吉田傳)

(次氏藏)

和蘭約條書

日本和蘭兩國往古の通誼固らるるを以て御國初ニ和蘭國に賜りし信牌之旨趣ニ基き長崎奉行荒尾石見守川村對馬守御目附永井岩之丞淺野一學和蘭國王之大全權於日本和蘭領事官リツドルデルオルデファンデンネーデルランツセンレ
ーウメーストルヤンヘンデリツキドンクルキユルシユスと決着之取極書

第一ヶ條 和蘭國民に差免候場所に警固人無之出島を出行之儀可爲勝手次第事

第二ヶ條 和蘭人日本之掟其犯し候ハ、出島在留高官之者へ知せ可申候左候へハ同人共して和蘭政府其國法通戒可申事

第三ヶ條 和蘭人日本人を不都合之取扱を請候時之於日本和蘭領事官其旨訴日本重役が吟味之上日本國法通戒可申事

第四ヶ條 若外ニ日本津津他之國民之爲ニ開ニ相成候ハ、和蘭國に茂同様之免許可有之事

第五ヶ條 國王軍船之士官或ハ其他乗組之内或ハ和蘭陸軍之向日本ニおつて死去致し候ハ、葬送之節其身之位階ニ因て船中ニて尙空炮相放チ墓所ニおつてハ小筒空炮いたし其外之儀式ハ是迄之通候事

第六ヶ條 長崎入澳之和蘭商船海岸ニ近寄候ハ、是迄之通國旗之外合符之密旗共一ツ揚事
但軍船ハ合符之密旗所持不致候事

第七ヶ條 右兩旗疏黃鳥遠見之者見請候ハ、目當として是迄之通同所旗竿ニ和蘭旗共可引揚事
但軍船も同様之事

第八ヶ條 和蘭軍船商船共是迄之通高鋒鳥裏手ニ碇入候事

第九ヶ條 長崎奉行其爲ニ直様遣候番士官一同出島商館之役人罷越其國之船ニ無紛儀駁ト申出候上ハ右船帆を揚或ハ蒸氣又ハ日本提舟を以入港候儀是迄之通ニて買人者不差出候事

第十ヶ條 船之乗組之者共ハ端舟相用外船へ並出島へ通路可致且養生之爲港内乘廻り可申候尤商船之水夫共儀ハ其端舟ニ船頭按針役之内乗組候節ニ限り候事
但出島水門之外ニ勿論上陸致間敷且日本船之乗組と出會候儀不相成尤目印として和蘭之旗を建可申事

第十一ヶ條 出島水門之外ハ反舟を上陸致間敷事

第十二ヶ條 出島住居向土藏等は迄之姿ニて變革修葺新規取建共奉行所に相届承知之上和蘭商船館脇荷銀を以日本蔵人相雇材木買入候事

第十三ヶ條 出島滞在之和蘭人共反舟或ハ日本船を以港内乘廻り候儀差支無之尤上陸之不致右船々を以港内ニ於て養生た老釣等致候事
但目印として和蘭之旗共建可申候

第十四ヶ條 水門之鑰ハ和蘭商館高官之者預り可申尤免許無之者不入込様取締之爲開閉之節ハ詰合日本役人に相斷候事

第十五ヶ條 表門鑰ハ勤番之日本役人預り候事

第十六ヶ條 商賣船按針役以下船手之者共ハ是迄之通表門出入身許探改候事
但水門本船ニテハ改無之事

第十七ヶ條 出島方市中に持出或ハ市中から出島に持入候荷物ハ是迄之通改有之關船出島往來之荷物之改無之事
但密賣之義ハ嚴重ニ制當可致候事

第十八ヶ條 和蘭商船長崎港内滯船中仕役之節日本番士官是迄之通出島に出役可致事

第十九ヶ條 商賣方之所置ハ仕來之振合ニ可有之和蘭荷物藏之鑰尙不斷出島滞在高官之者預り日本封印ニ不及候事

安政二年 七九九

第二十條 日本宛ニ隨ひ免許を請候日本人ハ都而出島に立入是迄之通ニ候事

第廿一條 於長崎都而辭義應對ハ日本人ハ日本之作法和蘭人之和蘭之作法ニ可致候事

第廿二條 時宜ニ寄出島滞在之和蘭人之唐船並外國ニ託し書翰差送候事

第廿三條 日本和親之外國船長崎碇泊中其船主と和蘭人書翰往復いたし候事

第廿四條 和蘭船人別改之入津出帆之節兩度いたし出島ハ無之事

第廿五條 和蘭商船玉藥武器之大炮同様本船に差置候事

第廿六條 献上物御役人方進上物並八朔之是迄之通之振合ニ可致商館商賣筋ハ改革無之此後商賣筋ニ付日本方和蘭

方ニて改革致度事有之候ハ、長崎奉行和蘭領事館勘考之うへ相定可申事

第廿七條 若規定相立度事有之候節ハ長崎奉行和蘭領事官ニ而相加へ可申且双方之爲無益之煩と可相成廉之可成丈

廢し候様可致候事

右取極候二十七條兩國君承諾之書面者其爲被任候兩國之高官調印之上此取極書調印之日附カニケ年之内長崎ニ於テ取

替可申候尤右ケ條者直様取行候事爲證據大日本長崎奉行荒尾石見守川村對馬守御目附永井岩之丞淺野一學和蘭國王之

大全權於日本和蘭領事官リツドルデルオルデルテファンデン子ードルランツセンレウメーストルヤンヘンデリツキ

ドントルキユルシユス長崎ニおゐて此取極書ニ名判致し候

在府ニ而無判

荒尾 石見 守

川村 對馬 守 花押

永井 岩之 丞 花押

淺野 一 學 花押

安政二年乙丑十二月廿三日

十二月廿六日我藩士の銃器を携帶して藩地と警備地との間を往復するに當りては其都度家老若

しくは附添人の證文にて通過差支なき旨を豫め氣賀の關にも通知し置かれ度きことを幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

越中守相模國御備場御用被仰付置御場所に相詰候家中之者年中不絶交代仕身分相應炮器を茂持越國許往來仕候付而御關所證文之儀平常之通其都度々々越中守より差出御裏印等奉願候而之度々御手數之儀奉恐入且御場所手當之辨利茂宜御座候付家老證文又者附添之内重立候家來より證文差出罷通候様仕度段奉願右之趣箱根今切横川福島御關所々々に御沙汰之儀共奉願候處去年六月御開濟被成下候然處道中參懸り自然風雨病氣等ニ而今切渡海難相成節者時宜次第緩急之見計を以本阪越通行可仕候間氣賀御關所に茂今切同様兼而御沙汰被成置被下候様仕度手當筋之儀ニ付猶又奉願候此段申上候様申付越候以上

細川越中守家來

神 谷 矢 柄

十一月廿六日

正月廿五日御用番久世様方御呼出ニ付句坂平右衛門參上之處左之通御付札御用以御用人御渡御留守居に相達候間可得其意候

十二月廿九日日本藩警備地に海路運送すべき武器其他の諸品につきては定規外の便法を許可せられんことを幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

左之書付は舊臘廿九日御在番浦賀御奉行松平伊豫守様に差出候處得御取調之上御沙汰可被成由被仰聞候旨御備場詰青地源右衛門吉田平之助方申越候

安 政 二 年

八〇一

御備場より國許に船路差遣候節武器類炮器等同所詰留守居名元之證文ニ而浦賀御番所罷通候様願之通御間濟被成下候
炮器者勿論武器馬具之類茂御定法有之候得共御備場御用中者別段を以以來運送之品々都而解荷不仕箇敷之儀差札ニ而
御改を請通船被仰付被下候様有御座度左候得者急場御用之節たり共無混雜御手数茂相掛不申候間旁奉願候尤江戸並國
許より武器類炮器等船路差遣候節茂是又右同様箇荷之儘差札ニ而御改受候様兼而御沙汰被成置被下候様此段茂重疊奉
願候以上

十二月

細川越中守内
青地源右衛門

(本文ノ申請ニツキテハ翌安政三年正月廿九日浦賀奉行松平伊豫守本藩留守居ヲ召喚シ別ニ指令書ヲ用ヒス共用人ヲ
シテ申請通り許可スヘキ旨ヲ口述セシメタリ)

安政三^西年正月十三日我藩主の參勤歸國に當り之に扈從する者及び平日交代として出府の者にも亦銃器を携帯せしめたまき旨を幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

越中守相模國御備場御用付置候付而家老共並御備場に相詰候家來共交代之時身分ニ應炮器持越辨利次第ニ之船
路を茂差越申候然處越中守參勤歸國之節供ニ召連候者並平常御當地に相詰候者共之内ニ茂練合次第右御場所相詰候
者茂有之何様自然異船御備場近海に渡來人數出張仕候節右家來共之儀茂時宜ニ寄出張仕管ニ御座候依之越中守旅中供
ニ召連候家來並平日御當地詰交代之者たりとも身柄之者之出府之節身代相應炮器爲持越候様爲仕度尤旅中荷造ニ仕候
而者別段宰領之者差添不申候而者難相成第一夫方之失費茂相懸り加之旅行差急候節繼人馬差支違却仕候儀可有之茂難
計其上宿驛難澁も可仕彼是ニ而徒士若黨杯ニ一挺持ニ爲仕度奉願候尤御關處通行之儀者最前御差圖相濟候相州詰家來

共同様家老證文又者附添之内重立候者より手形差出候様可仕候旅裝省略之儀御觸達之趣ニ付而者家中供連行裝等成文
手輕ニ仕道具等相減候得共鐵炮之儀之方今第一之要器ニ付御備場御用別段之譯を以願之趣御間濟被成下度此段申上候
様越中守申付越候以上

正月十三日

細川越中守家來
神谷矢柄

正月廿九日御用番代牧野備前守様方御呼出ニ付勾坂平右衛門參上之處左之通御付札御用以御用人御渡
可爲願之通

正月十六日日本藩主管猿島砲墩修理につき其守兵器の移轉に關する願末を幕府に申告す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

正月十六日御留守居助勤勾坂平右衛門持參差上候處被成御落手候段御取次を以被仰聞候由書拔帳達有之候事

牧野備前守様ニ

越中守相模國御備場之内猿島御臺場去年十月二日之夜地震ニ而處々破損仕候付御修復出來迄者守衛之者共並大炮附屬
之品々共大津陣屋に引取せ置申度奉願候所追而御達御座候迄之大炮共外大津陣屋に引取都而申立候通相心得尤異船
渡來之模様次第御固相立候儀と可相心得旨御差圖被下依之大炮及附屬之品々共追々大津陣屋に引取守衛之者共茂引取
相濟候段彼地詰役人共よ申越候此段御届申上候以上

細川越中守家來

神谷矢柄

正月十六日

一左之書付茂正月十六日被指出候事
浦賀御奉行御在府

安政三年

松平伊豫守様

右同斷引取せ置申度段牧野備前守様は奉願置候處其外同斷御差圖御座候依之大炮附屬之品々共追々大津陣屋に引取守衛之者共茂引取相濟候段彼地詰役人共よ申越候此段申上候以上

細川越中守内

正月十六日

神谷矢柄

正月十八日薩藩鮫島正助書を長岡監物に贈り天下の形勢を論して其自重を望む

〔先哲遺翰〕(子爵米田家藏)

時光如流奉拜別候而烏兔良押移候得共益御機嫌能遊御座恐悦之御儀奉存候大僕無異儀送光仕居候間會慮を被爲休可被下候擬天下之形勢次第ニ急迫仕舊秋之大變等歎息之至奉存候殊更水府之賢良横死之儀悲歎絶言話候非常之砌柱石早碎候而之實ニ一天下之精力を落申候事ニ而第一此義ニ付而大樹家之御徽運々奉存候まらし老公御英氣を御落しなく尙忠良を御撰任興復を御計被遊候御事感激餘ある事ニ奉存候元來生死禍福等之事ハ庸人之論せる處よして此誠心之一時一世之間ニ消没仕候ものニ無之命休もれハ暫休而神々成候ものニ奉存候間又願ハ生を受候而國家興復を計可申候之生死患難共只泰然として道ニ隨而精心を盡之外更ニ一事無之ニ奉存候併繼ニ數ある柱石右通ニ候へハ爲天下國家之悲泣幾度歎袖を絞り申候就而之殘候ものニ任重く相成候道理ニ候間何とぞ深尊體を被爲憂末長興復を御計被遊被下候處伏而奉希候尊藩ニも益々御興起之御模様之傳承雀躍事御座候弊憂愁之儀茂先安心之方ニ而御座候未十分ハ盡兼候へ共次第ニ東方之明を仰申候方ニ御座候間御安胸被遊可被下候今暫之處別而心遣罷在候譯ニ而只々神明ニ祈居申候事ニ御座候後來之處所置之微密縫心胸之中ニ包居計ニ而各大同小異も御座候へ之同盟ニさへ十分明兼候事も有之候へ之書中不能盡委曲候何事も御明察奉仰候此節同志之者罷登候間序なら御機嫌御伺迄如斯御座候尙後鴻ニ奉申上殘候恐惶謹言

正月十八日

鮫島正助

監物様

御左右

追啓僕ニ茂當時之何事も門を閉居候事ニ而只々方寸ニ養居候折柄ニ御坐候間出遊之期未相見不申若良縁不相盡候而奉拜會顔積る心事申上御明論を奉拜聞度奉存候何卒幸鴻も御座ハ、御教示且之御模様をも奉承知度奉仰候

二月十六日米國商船關乏品補充の爲め下田に來る

〔風説帳〕

一、下田御出入同心今西宏藏方左之通申來候事

吉田平之助様
野々口金左衛門様

今西宏藏

以幸便得御意候各様愈御安奉奉賀候然之當月十六日亥ノ中刻異船登艘下田港に入津碇泊ニ付早速船中へ罷越渡來次第相糺候處北亞墨利加州サンフランシスコ之商船ニ而シコ子造と申橋本建長サ百五フーウト巾二十四フーウト乗組人數拾貳人内女壹人小女壹人船頭レツチン商人貳人ケ子ン壹人ハ去卯年渡來いたし候バルメン其外マタロス也女ハ船頭之妻ニ而名ハエモレンケ子ン年貳十四才小女ハ貳才也卯年十一月四日サンフランシスコ出帆イスハンヤ持之無人島ニ滞留夫ハ長崎に參碇泊上陸ハ不致當二月十日長崎出帆同十六日當港に碇泊關乏品調之たえ渡來至而平穩御座候右之趣御含迄内々申上候已上

二月十八日
安政三年

二月十八日藩主齊護熊本を發して參府の途に就く

〔安政三年 江戸機密間日記〕

一筆致啓達候 太守様益御機嫌能先月十八日五半時之御供揃ニ而熊本被 遊御發駕段々 御旅行同月廿二日到小倉被 遊 御着翌廿三日同所可被遊 御發駕大里より直ニ 御乗船下關に被遊 御着船中國路 御旅行今二日備後判神邊驛 被遊 御着彌以御機嫌能御膳等御快被 召上奉恐悅候猶其御地 若殿様益御機嫌能被成御座御膳等御快可被 召上奉 恐悅候將又 上々様益御安泰可被成御座恐悅奉存候於御國 澄之助殿 寛五郎殿益御不安可致成御座珍重之御儀奉存 候隨而此表並御供中相替儀無之候履飛脚差立候付如是御座候恐々謹言

三月二日

大 木 舍 人

溝 口 藏 人 殿

木村 次郎 左衛門 殿

三月五日薩藩鮫島正助書を長岡監物に贈りて自藩の事情を告げ自己の精神を披瀝す

〔先哲遺翰〕(千野米田家藏)

再白私ニ之暫事情相隔候間何と茂形勢分り兼申候事而已御座候何とそ未發ニ御明斷可有之少々御もらし被下候ハ、 相心得心力を用申度奉存候再拜

再來暫相隔候得共益御機嫌克被遊御勤仕候由奉恐悅候段發足前ニ茂御懇書被仰付御訓戒之儀共深奉肝銘候私ニ之例之 早卒御報書茂不奉捧失敬之至御座候只今茂津田君拜肩仕候處御懇厚之儀共難有御禮奉申上候是迄形容心ニまらせざる 事而已御坐候而甚遲着仕候今日茂凡事情承申候處舊年來心志を碎申候事茂都而水の泡と消行世乃中行末思ひやられ實 ニ落涙歎息之事ニ御座候併々様之形勢ニ落入申候而茂手を束て取を取候儀臣子之道ニ無御座候間精心之一筋之盡試申

合ニ御座候よしや此一身車裂油鏡ニ望候とも一誠心全く通り披申候へハ實ニ惜ニ不足事御坐候得共又却而後難主君ニ 残り可申敷と又一度之顧殘心此事ニ御坐候乍不骨上天照し居候此一身一點之私心無之候間とし骨は朽申候而茂精魂豈 煙滅可仕哉尙社稷を保護可仕併今日ニ至り而之外大冠あり内痛疾あり是を防之者縱ニ一孤弱之身ニ御座候へハ實ニ生 之愛する事はたハさる之日ニ罷成既ニ故郷老母之事をも知己ニ托遺候事ニ而御座候心膽之如裂事御察可被下候さりと してハ悲哉才拙御座候間事之成哉否哉今日ニ至り申候而之病根藥功を奏し可申處千ニ一ツ茂六ヶ敷被存申候へ共一精心 之碎き試申考御座候事之委き之ケ様難申上若御明斷茂被為在候ハ、何卒御良策ニ隨而心力を盡可申候間被仰聞度御 座候何を書委曲を不盡只々良縁之時を奉期候末毫恐不少御座候得共何とそ貴公様ニ之被重尊體時運之來を被遊御待度 伏奉拜願候以上

彌生五日

鮫 島 正 助

監 物 様

御 侍 史

三月廿二日幕府新に講武所を設け劍槍砲其他の武術を教授すべき旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕

御同席觸

今般厚き御趣意を以劍術槍術砲術水泳等演習之たま講武所御創建被仰出築地講武所此節御成功相成候間諸役人始御旗 本御家人並伴厄介等ニ至迄有志之輩罷出眞實ニ修行可被致候尤當四月中より稽古相始候管候條委細之儀ハ久貝因幡守 池田甲斐守へ可被承合候且又後而者陪臣浪人等も修行之たま罷出候儀御差免可相成候得共此儀者追而可被相達候 右之趣向々々可被相觸候

三月廿二日

安 政 三 年

三月廿六日藩主齊護江戸に着し龍口邸に入る

〔安政三年江戸機密間日記〕(御用人より謄政)

三月廿六日

一 太守様益御機嫌能今朝五時之御供揃ニ而品川之驛被遊 御發駕白金御屋敷に 御立寄晝夕七時過龍口御屋敷に被遊 御着奉恐悅候事

(備考) 中國路美濃路此御供ヨリ切捧駕御用人等對之館止(本藩年表)

四月十七日幕府旗下の陪隸に至るまで西洋銃隊の練習を勵むへき旨を達す

〔安政三年風説書等〕

阿部伊勢守様御渡來ル十七日万石以下に左之通御觸之由御座候

大目付

御目付に

近年御旗本之面々西洋傳銃隊稽古出精之趣ニ相聞候處家來共稽古迄者未行届不申向茂有之哉ニ付猶此上主人々々厚世話致し家來共炮術足並爲心懸候様可致候 右之趣向々に可被相達候

四月

四月十九日日本藩品川東海寺中妙解院の梵鐘を砲器に改鑄の許可を幕府に申請す

〔安政三年機密間日記〕

寺社御奉行安藤長門守様に差出四月廿五日御留守居御呼出御付札御用御渡之書付寫

諸國寺院梵鐘之儀ニ付御觸達御座候處品川東海寺中妙解院之儀者越中守一手持之菩提所ニ而舊來致寄附置候梵鐘有之 右者相模國御備場御用付而越中守方に引取置候而砲器ニ鑄換候様仕度此段御聞濟可被下候以上

四月十九日

神谷矢柄

御付札 書面妙解院撞鐘之儀同寺に茂申渡置候間被申聞候通可被取計候

辰四月

〔全書〕

昨日安藤長門守殿被仰渡候請書左之通

拙寺所持之梵鐘此度大炮鑄換被 仰出候付可差上旨被仰渡御請書奉差上置候通寄附檀家方被申立候趣も有之仍而細川越中守殿に可差出旨猶又被 仰渡奉承知候仍而御請書如件

安政三辰年四月廿五日

東海寺塔頭 妙解院 山

寺社

御奉行所

右之通差上置候間此段御届申上候以上

四月廿六日

龍ノ口

御用人衆中

安政三年

四月廿日幕府新に蕃書調所の教授數員を置く

〔安政三年風説書等〕

一安政三辰四月廿日御下ケ之内

松平三河守家來

箕作 阮甫

酒井修理大夫家來

松田 成郷

右蕃書調所出役教授職被仰付候勤候内御手當三拾人扶持並壹ケ年金貳拾兩宛被下之

松平阿波守家來

高 島 五 郎

松平薩摩守家來

松 木 弘 安

松平大膳大夫家來

東 條 榮 庵

松平肥前守家來

伊東玄朴弟子

原 田 敬 策

堀田備中守殿家來

佐波銀次郎厄介

手 塚 律 藏

九鬼長門守家來

川 木 幸 民

板倉伊豫守家來

田 島 順 輔

右蕃書調所出役教授手傳被 仰付勤候内貳拾人扶持並壹ケ年金拾五兩充被下之

御書院番

土屋佐渡守組

小田切 庄三郎

御普請奉行

美作守三男

伊 澤 謹 吾

箱館奉行支配調役

右一通

蕃書調所頭取

古賀 謹 一 郎

同 組頭

山本庄右衛門

水野 正 之 助

同 勤番

眞下 專 之 丞

榑原 鍊 太 郎

雨宮 六 藏

齊藤 源 藏

右一通
之

四月廿一日在府本藩老臣大木舍人は藩政府に對し昨年十月震災の修復等に要する入費才覺に關し通議する所あり

〔安政三年自筆御用狀扣〕

以別紙申達候舊冬非常之地震付而當表處々御作事之御入目江戸大坂ニ而都合四萬兩御才覺ニ相成迎茂夫ニテハ納り申間敷此上何程計及不足可申哉と辛川孫之丞より明石三郎七に相尋候處大概壹萬兩計茂有之候ハ、可然由申出夫茂空鉢之見込ニ付今少手を詰候上御國に申向候様有之度と御作事所之見込も懸合ニ及せ候處此上四万又ハ五万も及可申段

安 政 三 年

八一

致返答候由ニ而御勘定所も大ニ驚右付而後々見込之趣取らへ此節態々雇飛御差立其御地に差出候由ニ御座候御出納之幅を掌り候御勘定方ニ候得者右様之事ハ初發より眼を附地震後少居合候上ハ御作事方杯精々疾ニも持出候ハ、藏人殿御存寄も可有之拙者着之上ハ早々御相談も可仕處御發足後右之次第相分り候而ハ猶更及當惑候事ニ御座候まら一跡事ハ可致様無之差寄四五万兩之金辻相調候手段無之候而ハ難相成前條御勘定方まらへハ於御地御披見可有之右之内諸間より出金ニ而相調候へハ此上茂無之儀ニ候得共植方小物成方等ハ御案内之通ニ而其餘之御間々々も衰微之ク所勝ニ候へハ連及各別之儀者有之間敷且又御國中一統ニ懸一人別何程と出銀被 仰付之儀並御家中手取米被減候儀も何程ニ可有之哉聊ニ而も人氣ニ係り候儀者隱微之間ニ害を醸候儀者古今其例不少候間願クハ如何躰ニも工面盡果候節之窮策ニ被殘置度尤弘化度白金御屋敷御類焼之砌ハ眼前相分候大造之御物入ニ付一統々上米上金等願出候得共此節之地震三百里隔候而ハ現實左迄之事ハ誰も存不申依之當衣九ヶ所之御屋敷々々並 御菩提所其外寺院等ニ至迄夥敷御作事ニ而御出方者白金御類焼之倍ニも及一昨々年本牧御堅引續相州御受持等莫太之御物入差渡候末右之次第ニ而御勝手向必至度差支候得共人別出銀且手取米減等者不被 仰付候乍然此砌ニ付相應々々御用途ニ差出度願出候ハ、可被召上と支配方杯より申聞其末御恩を奉酬候と夫自己と差出候分ニ被召上候而も子細有之間敷何様此節之御用途者於大阪御才覺と土豪を被定早々其手段有之候而右諸間銀且差上度願出候米錢も有之候ハ、夫を以御本方を致補助候様之都合ニ而者何程ニ可有之哉と此元ニ而之咄合候事御座候於其御地得斗被違御評議候様存候切御作事之儀當時取懸居候分ハ可致様無之其外ハ日白臺石小田平井新田田町御屋敷並寺院共如何躰ニも御手ニ難被及と申譯を以可成丈ケハ今暫御作事御疊置被 仰付追而之様次第新規建分ハ御國廻り杯ニも可被仰付哉と咄合候得共御要用之所柄迄ニ而過半之其儀も成り兼候條不得止事御才覺被差登外無之只々奉恐入當惑之事共御座候猶被存付も有之候ハ、急便を以御教示被下候様存候以上

四月廿一日

大木倉人

惣連名充

四月廿七日佛國軍艦琉球に来る

〔嘉永七年風説帳〕

以急便御届申上候書付

去月廿七日午ノ下刻琉球アシット海岸に追々異船入津ニ付彼地先詰之家來共並琉球國番士之者共早船を以追々乗寄り様子相尋候處フランス國之由其次第八去二月上旬朝鮮國譯官之者共是迄之約定書差戻し以來ハ内々よても賣買之儀ハ堅相斷且其上是迄彼國近海測量等いふし來候處是以不相成段彼國王カ旁申渡候趣嚴敷申來候付此方使節を以再三及論談候得共一切取り上不申候故相好不申候得共無餘儀次第ニ而軍艘貳拾八船小船九船を以朝鮮へ押寄候處其比雨天故少々日合見合居候處追々日數相立候事故本國より又々軍艦七船渡來候付右人數調合之上及上陸此節未タ合戰最中然處此琉球國之元朝鮮國より相聞候國故彼國同意ニ候哉尤朝鮮國カ差越候書面之内琉球國王之印臺も有之事故相違有之間敷と之被存候得共爲念承知致來候様我王命ニ付使節イシラウ渡來致候段申聞候尤渡來之船數ハ軍船八艘其外種々之船共拾三艘小船共貳拾六艘程致渡來候尤追々琉球國王へ申渡之上否相分り次第フランス使節に可申渡ト奉存候得共國王來共申越候付不取敢此段御届申上候以下

辰五月十四日 申上刻

松平隆摩守

四月下旬水戸藩結城寅壽及ひ其餘黨處罰せらる

〔嘉永七年風説帳、從弘化年間至文久二壬戌年尊攘録探索書〕

先年悖逆不道之所行有之御預被仰付置候結城寅壽意旨を受繼奸謀相企萬一其事成就難致節ハ奸謀之妨ニ相成候者可
 十 河 祐 元
 安 政 三 年
 八二三

除去含を以御大法も有之毒藥調劑陰ニ可相用手段相施候始末不恐上大膽之致方醫業之者ニ者別而不届至極ニ付斬罪中付者也

右之者實兄十河祐元此度御仕置被仰付候付右同人所持之御筆類取調早々相納候様可被相達候事

松 本 金 之 助
結 城 寅 壽

其方儀先年隠居被仰付候處不恐上所行有之而已ならま厚奉蒙御恩澤御重役をも相勤候身分ニ而前後表裏を構君臣之大儀を背キ不容易御國難を醸成候罪科不輕嚴重被仰付方有之といへとも一代御預一万丸に御扶持方をも被下置候處先罪を悔心得も無之御預中警固之者を欺キ金子を與へ密ニ同意者に及通路候始末悖逆不道之心底今以不相改候段重々不届至極ニ付御捨置難相成死罪申付者也

父寅壽儀松平采女に御預被仰付置候處先罪を慎心得茂無之御預中警固之者を欺キ金子を與へ密ニ同意之者に及通路候始末今以不相改不届至極ニ付死罪被仰付候間其方儀揚り屋入申付者也

揚り屋入	平 尾 右 近	同	加藤木左衛門
三百石御取上	藤 田 主 膳	同	藤 咲 傳 之 允
百石御取上	近 藤 民 太 夫	遠慮	櫻 村 民 之 允
二百石御取上隠居	小 山 小 四 郎	蟄居	機 原 八 郎 兵 衛
半知隠居	大 森 彌 三 左 衛 門	揚り屋入	大 森 金 八 郎
弟八五郎其方に御預	友 部 八 太 郎	隠居伴專吉に	根 本 新 八 郎
け御扶持方御取上	同 八 五 郎	千石被下之	太 田 丹 波 守
		四月廿八日	以上

〔神庫文書地廿二印密書輯録水戸家悖逆一件〕

安政三辰年四月廿九日

家老表勤

太 田 丹 波 守

其方儀先年御用方相勤候節上之御孝慈を奉離間輕慢不法之所行有之猶又御家政向之儀ニ付而茂追々從公邊御差圖又ハ御老中方心附之義申達候杯も有之處其時々彼是偽辯を以申掠メ旨意相曲或ハ押隠置候等の廉一端偽言雜説を取擧ケ黜涉賞罰を取行ひ賄路を貪り不正之始末等有之候而已ふらす御用方轉除之後も以前之通可致再勤旨との意念相含彼是手段相施之段不畏上御後聞き致方不束至極ニ候處家柄を被思召寛太之御仁惠を以隠居被仰付俸專吉へ千石被下置候條慎可有罷在者也

五月朔日水戸藩弊風一新の令を出す

〔神庫文書地廿二印密書輯録水戸家悖逆一件〕

安政三辰年五月朔日武田伊賀申渡し
但水戸江戸同日申渡し

父丹波守儀此度隠居慎被仰付其方に爲家督地方千石被下置候上々寄合ニ御入被遊候旨被仰出候旨也
去ル甲辰以來御老中一統者不及申領中末々至迄人心不穩儀畢竟其御前中納言様御隠居中納言様ニ御幼年に被爲入三御連枝方萬端御世話有之候得共結城寅壽其外同意之者奸謀を廻し候折柄故自然右等之事情ニも至り不得止事候得共其後癸丑ニ至り寅壽難有以御仁惠夫々輕典之御所置有之其他之者共以後致改心候得者是迄之處者御見捨可被遊振も有之

安 政 三 年

候得共尙奸謀之節風除穢致居日者不少様ニ浮説流言及自他之聞其迷し虚妄之儀相携へ第一御父子様を奉離間不容易儀
其相巧ミ累代之御厚恩其令忘却人臣之道不相濟義故相巧ミ一々及露顯此度寅壽始再御所置被仰付候ニ付而者去ル丑年
中相達置候通り相心得是迄之弊風相改御家中者一休之儀ニ候條五ニ無隔意信儀相守忠孝廉恥之風ニ趣文武相勵一統御
奉公致精勤兩君様奉安尊慮候段屹度相心得可申旨被仰出者也
右之趣相心得支配之末々迄可被相達候事
辰五月

五月十七日幕府は其所藏の洋書を都て蕃書調所の保管に移し追て之を翻譯せしむべきものある
を以て借用の分は一應之を返納すへき旨を達す

〔尊攘録皇武令〕

(五月十七日阿部伊勢守渡)

此度公義御所藏之蕃書類都而蕃書調所に御預替相成追々翻譯被仰付候品も有之候間是迄拜借之分一ト先返納候様可被
致候右之趣向々ニ可被達候事

五月

五月廿三日日本藩武相兩國の預地に於ける寺院の梵鐘を砲器に改鑄の許可を幕府に申請す

〔相州御備場一件〕

寺社御奉行安藤長門守様は差出候處御付札御用八月十四日御渡之書付寫

諸國寺院梵鐘砲器ニ鑄換候様尤萬石以上者領主に可被下との御觸達御座候處越中守相模國御備場御用付而同國并武藏
國之内御預所有之政事向私領同様被仰付置候付右預所之寺院梵鐘之儀茂私領同様取扱本末寺之鐘等相糺候上越中守方

は引取御備場御川之砲器ニ鑄換候様仕度此段御聞濟可被下候以上

細川越中守内
清田新兵衛

五月廿三日

下ニ御付札 書面之趣ニ承置候間私領同様取調可被申聞候

辰八月

六月十三日蕃書調所に於て洋書及び翻譯書の檢閲を開始す

〔尊攘録皇武令〕

大目 付に

諸向ニ而新刻開板可致蕃書并翻譯書類以來飯田町九段坂蕃書調所に差出改請候様可被致候
右之趣可被相觸候

六月

六月十六日蘭船長崎に入り蘭國王の特使近々渡來すへき由を報す

〔京都雜聞録〕

今般長崎表に蘭船着いたし候儀ニ付右表之者ハ江戸身寄之者に差越候文通寫

六月十六日阿蘭陀船例之通到着致し候右便船ニ同國之出張國ジャガタラ國代官より此地ニ住居罷在候かひたんに書翰
を以日本國に御爲筋之儀申上度阿蘭陀本國王より賣買船ニ無之軍船仕出し近々差越候旨かひたんより御奉行所に及言
上候ニ付其趣刻付早を以江戸表に申上ニ相成申候右ニ付當年沖兩御番松平肥前守様へ心得方御達ニ相成松平美濃守様
御非番年心得方被仰達其外近國之御大名様方一同御用意御奉行所より當地御用開役共御呼出被仰渡候此間後ハ江右ニ
戸留守居

付浦々警固之番船追々當港内外に乘込湊口之佐賀大村之人數番船押並へ御家々之船印を立兩番所内之大黒田之番船數艘夫々印立稻佐嶽之山根水之浦と申所に船懸りいたし夜中ハ數艘之船々に挑灯を付海上誠ニ賑々敷事ニ而浦々島々之近國御大名之大小之船押並へ浦々島々之遠見番所御臺場には相圖見張之御手當當地御奉行所附之地役船番町司定乘ハ御番船ニ晝夜海中ニ碇を卸出張御組同心與力ハ海上出入之船非常を防キ數ヶ所之石火矢大筒臺には御鉄炮方之御手配誠ニ賑々敷事ニ御座候何事もふた入船ニハ候得共非常之船殊ニ類船其外何事職用筋不相知故無油斷御手配ニ御座候右様夫々津々浦々島々迄無殘所御手當有之候上ハ中々容易ニ入津も相成申間敷狼藉船之有之候而も船人共ニみちんニ成り可申候長崎湊口ニ高鉢と申所御座候是ハ鍋島公御持場ニ御座候此島之四方海ニ而段々上りニ山有之此島之四方皆石火矢八貫目より三貫目迄大筒其外小筒數百挺押並へ有之候其外ニ今年御同家持之ガンカウ島へ三十歳より二十歳迄之勇士五十人被指置異國船乗入亂妨狼藉致し候船之勿論何舟入候共船ニテ異船ハ取卷乘廻り萬一不法之儀有之候ハ、早速乗付一同飛入一命を捨異國人共切捕可申候討死いたし候共家銘之建遣し可申間少も心遣ひふくいとよく働キ可申旨佐嘉公御直ニ被仰渡候由此五十人之諸士ハ御家中二男三男新規被召出候而々ニ御座候由ニ御座候此衆中日々大島より劍術柔術水稽古を勤め致し候由外ニ御奉公ハ無之候右様夫々に御手配有之候へ之御行届之事ニ候得共何やらん油斷のならぬ様ニ御座候參候ものなら早く着船致し候様存候

去冬天草島御代官所百姓其外同所大矢野郷初四十五ヶ村天草之内談合島に一二之相圖ニ而一同集衆人數壹萬三千人程徒黨致し候付御代官高木作右衛門様手附手代被差遣御陣屋富岡へ出張御奉行所より與力同心罷越召捕人數百三十五人の入牢ニ而追々御吟味漸靜ニ成候へ共今時阿蘭陀本國仕出軍船近々入津と申事ニ而當地何とふく人氣さまノ、いたし候何も別而あんし候程之事ハなく候へ共事珍敷數艘穩ニも無之様ニ御座候唐船之近々入津可致哉ニ候何レ來月節句比ニも相成可申と申事ニ御座候是ハ日本近キ國故何もあらんし候事ハ無之阿蘭陀ハ日本より壹萬三千里ジャガタラ迄日本が三千里唐土ハ三四百里も道法御座候

〔神庫文書人印密書輯錄四百五十印ノ内〕

〔袖書〕 阿蘭陀國王之使節

伊澤美作守様御家老石井平馬に承合申候次第左之通

一此節阿蘭陀國王之使節差立申候儀ニ付而咬啗吧表頭役が在留之るひたんに申越候五ヶ條之款同人より横文字を以差出申候由第一商賣船ニ無之使節乘渡申候軍船ニ付玉葉御取揚之儀と御斷仕度第二蘭國之禮儀ニ入津之節と其國を祝玉無之石火矢を打出申候ニ付夫を被請御臺場々々々同様ニ玉無之石火矢を打放着船を被祝被下候様商賣船ニ而茂右之手數是迄無之儀之年來相款居申候趣ニ申出候由第三劍を帶應對仕度奉存候由第四滯留中に出島蘭館ニ之勝手ニ出入仕度由第五ニ之人數御改之儀と御免ニ相成度左之人別名前かひたん書上可申都合五稜顯出申候得共御例無御座事而已ニ付難被爲叶御沙汰ニ相成申候得共再應顯出既ニ昨廿二日ニ之是非款顯之通ニ被差免候様御手限ニ之難被爲叶候ハ、早打を以江戸表御伺ニ相成御差圖被下候様申出候付其段御伺ニ相成爲申由ニ御座候

一かひたんよ之書面ニ之軍船を仕立と認メ申候得共餘りニ事々敷御座候付十七日御渡之御書付ニ之商賣船ニ無之船と御認メニ相成申候由乍然江戸表ニ之和解之書面ニ本書共ニ相添御勘定御奉行様を以御進達ニ相成爲申由全蘇西洋ニ而之大洋を乗申候ニ之軍船商船之唱之外船名之無御座候由

一六洋十八日比よ七月二日比迄之内着船と相認メ申候之使節船六月初日ニ咬啗吧表出船仕候間十八九日比ニ之日本着船可仕段頭役よ申越候付猶十月余りも懸日を仕申上候由乍然三十日内ニ而入津之格別風順宜敷節ふらてハ難叶誠ニ稀之事ニ而此程より之風之模様を相考申候ニ之何レニ七月初旬ニも着可仕見込申候由昨廿二日猶内々申上候由

一此節使節之趣意段々とかひたん手許ニ御探り御尋ニ相成申候處かひたん御請ニ之成ル程風説之少し承り申候事も御座候得共是之推量咄位之事ニ而此節之王使ニ相立申候之至而重キ官人之内本國より仕出ニ相成申候事ニ付自身共式ニ而之中々實事證據ニ可相成程ニ伺知申候譯ニ無御座然ルニ風説を承り申候儘ニ申上若問違候而之難相濟却而御迷ニ茂可

相成候間外説等之儀之態と不申上候段申出候付連茂入津之うへふらてハ難相知御座候得共何様不輕筋を申立候儀と御見込ニ相成居申候由

一使節乗組之船迄ニ而供船等之無御座候由武器之處御尋ニ相成申候ニ石火矢迄ニ御座候哉大小之筒取交ニ而御座候哉八十挺乗せ組置申候由尤乗組人數船之大小之相分り不申候由

一白帆船見出申候得之早速與力兩人其外御家來之内茂爲檢使被差出高鉾沖ニ而旗合ニ相成賣船ニ御座候得之神崎島沖手之方ニ船を懸サセ申候得共此節之願曰之神崎島之内手ニ御引入サセ被成候御含之由沖手之方ニ居申候ハ、模様ニ應し退出申候も難測御心遣被成候由其上ニ而人質を御取被成候思召之由ニ御座候

一玉藥御取揚之儀を神崎島内ニ懸り申候處ニ而被仰聞承知仕候得之子細茂無御座候得共かひたん申出候處ニ而之連茂玉藥之上申聞敷左候得之直ニ江府御伺ニ相成御差圖之上被 仰付方可有御座夫迄之如何様之事御座候共退出不申候様之御心配被成居候由何事茂荒立不申様緩カニ御取扱之思召之由御座候

一神崎島之内ニ一旦懸り申候うへ御法之通御掛合ニ相成玉藥上等警承知不仕候共使節船之事ニ付湊内ニ御引入サセ可被成美作守様ニ之思召ニ御座候得共段々衆説御座候而未タ御決議ニ相成兼申候由

一肥筑御兩家に別段御用人を以至密ニ被仰聞候趣之處之長崎御受持之事ニ付御非番方ニ而茂無御油斷模様ニ應し御人數早速被差出候様御當番方之猶更御番所御臺場等之御手當筋彌以御嚴重ニ被成置度其外此節之儀ニ付而御心付之儀も御座候ハ、被申聞候様との極密ニ御示談ニ相成申候由右ニハ候而職佐賀様よりハ昨今大分御番所詰茂相増申候由ニ御座候段々仕候右之外ニ別段之御含等之儀之無御座候段申聞候

一使節船着之上模様ニ應し候而之御打拂御乗取等之筋ニ茂至り可申左無之候共諸家様御人數御堅杯之御沙汰ニ相成候程之時宜ニ茂至り申候節御國許御人數万々一週着仕御用立不申候而之決而難相濟自然御手管迄ニ共相成申候得之一國之恥辱ニ無御座本朝之瑕瑾ニ茂相成申事ニ付一刻も御人數被差出御用ニ不相立候而之難叶然處海上相隔居申候事ニ付風

雨之心遣茂御座候付自然御人數之御差圖と申趣ニ茂相成申候ハ、警御決議ニ之不相成候共平馬限ニ知せ吳候様左候ハ、途中迄ニ而茂差越置少しも早夕御用ニ相立候様仕度市郎助相詰居申候上ニ私儀茂被差遣自然御手管迄ニ共相成候而之決而難相濟此所重疊相頼置申候段申聞候處委細承知仕美作守様ニも猶御内々申上追々御評議ニ相替申候儀も御座候ハ、極密ニ知せ可申段返答仕候

一肥筑之御兩家並大村様ニ茂御人數被差遣候趣之市郎助申上候通ニ御座候既ニ昨日筑前類役桐山市郎大夫と申候ニ應對仕候ニ御船之方ニ茂御人數乗組湊口迄少々被差越置候段只今御飛脚着仕候段申聞候付 此方様御請持之場所等之相定居不申候得共自然と少々位之御人數ニ而茂いつまへそ密ニ被差越置候様共ニ而之何分可有御座哉平馬見込之趣も御座候ハ、美作守様へも御内慮相伺候様内話仕候處其儀茂可然候得共左候而之市中人氣ニ茂障り可申候而万一之節之早速被仰越美作守様より御沙汰次第ニ急速ニ被差越候様之御手賦ニさへ相成居申候ハ、可然歟と見込申候由夫込ニ茂美作守様之内々申上兎角御國許御都合御宜敷様ニ心得可申段申聞候

一私儀早速ニ被差立 若殿様方之御口上之趣美作守様不怪忝思召御國許御手厚御仕成之處甚々御太慶被成候段平馬に茂早速ニ御噂ニ相成自身杯ニ至り候而茂別而難有心強奉存候段申聞候與力杯へも早速御噂ニ相成爲申由ニ御座候 右之通應對承取申候付則申上候以上

六月廿三日

小島權兵衛

六月十六日土浦藩大久保要書を本藩萩角兵衛に贈り大震災後江府の形勢をのべて水戸兩田の壓死を悼み御所の擴張を喜び摺甲操練に關し時勢の變をのべ彦根藩の狀況を説きて南部要人の努力を感じ小田文藏の獨爛錄につきて其卓見を稱し水藩の大日本史配布平塚飄齋の山陵調査等のことを報す

〔萩文書〕

奉復

去年十月廿八日御認之御別紙一冊齊藤氏が一同相違當夏拜誦仕候土旺前暑威日々加候所先以益御清健被成御勤誠珍重御義奉敬賀候次ニ小生無異罷在候間乍憚貴意安思召可被下候然者客冬十月二日江戸表大地震誠ニ稀成義ニ而奉恐入候大城御破損も不尠御老若様御始御危難御免被成候迄ニ而御登城ニも御差支被成候様之儀ニ而多分御下屋敷御住居御馬上ニ而御供御減略日々御旗本様御同様之御出仕今以御大破之所其儘有之西城此節御取繕之由萬端奉恐入候御儀奉存候水戸様御屋敷一棟も不殘倒を如仰兩田歴死御同前驚愕無涯不堪哀情悲痛事抑無他事交誼尙以浩嘆罷在申候右之人傑ハ實ニ天下之至寶萬々道立候基再難得人物ニ御座候只今以兩公二田罷在候ハ、と度々御涙ニむせハせられ候事有之候由扱二田之歴死青蓮院宮内々達寂聞或時關白家伺公之節水戸此度戸田藤田兩人之良臣被失嚙々可爲哀惜序ニ其段可申遣との

勅諭御坐候由鷹司家御内々被仰遣ニ相成兩公ニも殊之外難有思召候趣冥加之仕合死有榮と可申歎別而々々遺憾千萬奉存候扱又戸田弟安島彌次郎藤田存生中同勤被仰付出府間も無之右之仕合扱も々々浩嘆之至御座候安島氏も格別之人ニ候共迎も藤田之達觀卓識ニは誰迎も及不申實ニ一世之雄と奉存候先年越前守様御役中度々出府之節敝宅にも立寄徹夜物語感激候へき其頃方世の様移替候事萬々可驚事のミ多迎も筆ニは不盡義御座候

一京師 御移徒後は上下人心も穩ニ而先々恐悅無此上自然災異も薄キ候哉と奉存候此度者御普請尙も天明度ハ御念入候趣ニ御座候右ニ付而も水戸老公種々御心盡御築地御取廣ク之事も御配慮被成候へ共思召通ニ不相成漸と東西ノ角二ヶ所ハ四角ニ弘マリ申候扱又鷹司家御辭職之由不遠九條家に相廻り候由如何可有之哉人々戰兢東防城三條家ハ益良弼之由承り感心成事多御座候

一九州列侯岡久留米佐賀薩州福岡柳川等之模様委細御示し被下萬々難有拜承仕候以御蔭大略相分大慶奉存候右御請逸々可申上之所甚世話敷候間略義御答失敬御海恕可被下候御禮難盡奉存候尙自跡申上候

御所擴張

一四年前拜謁後ハ又々長岡監物様御手之御物主ニ被爲仰付同十一月越中守様御三藩御一同浦賀御請持被爲蒙仰監物様御御奉行ニ而蓮ニ御出府被成候ニ付貴君ニも逐々御出府可被成左様ニも御坐候ハ、乍暫時も又々拜類も可相成と私義も相樂罷在候處其後御城下諸御要害筋御請持ニ而大炮手御二組御城北士兵十八組之御支配頭被蒙仰御留守諸口御打廻り御政務御張皇御向々ニ而御練練等有之其後ニハ御城東小峰山と申處ニ而諸口一同之練練有之二段御備鉄士御同列首尾左右御策應相成候様御取調御十分御指揮御稽古被成候趣欣想此事ニ奉存候其後尙又春秋御定規之外御城北矢越山と申所ニ而御宿陣御狩御催し彼是御周旋御配慮之趣爲國可賀之至御盛成事奉欣羨候御大藩とハ乍申御同志様方積年之御丹誠と奉感候四年前拜謁之時者水府杯も甚御斟酌ニ而損甲御練練等も思召不被爲屆候由之處今年者大小炮御打拂御十分ニ御懸引も出來候由逐々申來候

一彦根藩禁外交諸藩之人一切入を不申制度ニ候所自然一種之古格は有之候其實ハ固陋ニ陥候處も可有之各家五ニ張門戸不屈之休は宜候へ共講武等之事も不見他之費も不尠候半と被察申候扱内々被藩一有志堀山造酒と申もの尋來効ニ慨嘆之義多數日及面會候處同人申候者神君三州より龍興被爲在候節井伊家之御勤勞第二ニあらす五万石宛之御加恩四度迄有之甲州之物主多御附屬有之萬世御先ニかけ候様ニと思召候處當時神祖御再來とも可奉申上水府老公之御立行等深不奉存候方欣慕之志も薄く所謂溜之間風ニ致浸潤一種之弊風陷溺ハし超然と被在候段誠ニ不相濟之義ニ而神祖之尊慮ニ相適可申哉深恐入候義夫と申も御席風不宜候故不堪杞憂乍去微賤之身の及所ニも無之候間藩ノ大夫當路之面々志を起奮發ハし候様ニ相成候半ニ輔翼不相違候事有之間敷敷依而ハ此際ニ志ある儒臣無之而之不行屆右藩中々多年出居候南部要人と申もの頗學術有志之者ニ候山近來此もの又改而御抱ニ相成當時學校大ニ盛成事之由是亦弘道館と申日々上堂之提徒不下三百人右南部大ニ言行を膏澤可下民之勢ニ而大夫有司に説入申候て頗開端緒可申と種々盡苦心候様子誠ニ感心成事ニ御座候當時堀山は水府に赴會澤翁に從候積最早半年計も罷在申候扱又彼藩萬事被秘候故記類も同斷他に出不申候處近來直孝様御代々之御代々御奉行御實記書立居候もの有之美濃紙六七十枚位之者六卷有之内々堀山方貳

卷借受寫取申候相攝候者御望候者呈覽可仕候扱内々堀山周旋ハハし越藩に説込吉田野村杯も右南部に致入製當時大ニ能鹽合ニ懸引ハハし申候吉田野村等不相替履書通此程野村來話委細打合遣し申候扱越藩ニも御聞及被成候半鈴木主稅病死是亦一藩之標的頼母敷事ニ候所可惜之至ニ御座候御同嘆々々何故ニ天不惠吉人候哉と扱も々々苦心之至ニ御座候

一近來安許地役御具足奉行小田文藏と中人被相登至而入懇ニ仕候大ニ識見有之學術も正敷至極頼母敷人ニ而戸藤二氏も來往入懇ニ被致候山内々被爲見候獨燭錄杯も餘程識見之有之事ニ而著述も多分有之様子御座候
獨燭錄序

無押賊之力、無衛民之道、悒々僅成此書、言而不聽於世、不無言、故此言泛取群言以爲說、分目收類、各若干條、可
以盡當世之論矣、毎遇眼目處、便加評詞、要使終其說耳、書名獨燭、凡九篇、虜情、防禦、守備、廟算、國氣、遠略、
火攻、陸戰、兵機、亦區々報國之微意云、嘉永三年庚戌春三月、

一老公一昨年琵琶一面御手製被成候而御進獻被成候所主上行宮ニ而深御珍愛被遊候山右表御銘御歌疾差上度と存候所
大延引最早一兩年前御拜見とは存候へ共尙又寫上申候

一地震之節 兩公後樂園中之御茶屋ニ被成御座候處右地震ニ而學校中ニ有之候大日本史之板餘程損し候山中上候處災は
不可計候儀夫故ニ急き爲措置之事ニ候又々災異も難計候間早々仕立可申旨被仰出右之御中ニ而御仕立御箱等被仰付大
部之日本史數十部御製本御出來京都齋藤家御家門様方に御贈被落にも全部貳百三十四冊貳箱ニ入御丁寧ニ被下候右
後來之御爲御假住居御艱難之御中萬々御厚き御義ニ御座候

一山陵荒廢之儀ハ誠ニ可申上様無之天下之欠典乍恐可愛之至ニ御座候處御承知之通逐々御脩築不獲様ニ御垣御印等も御
出來長久御粗末無之様ニ可被成之旨被仰出候處山城大和河内和泉攝津之内ニも難定山陵敷多誠ニ恐入候御義絶言話候
蒲君城慨然起志遙々至其地悲歎ハハし候義不世出之人傑ニ御座候併ふから關東を登り來盡公事候事故不行屆義ハ多端

成事は亦相察候事御座候當時京師ニ平塚御廟と申老人有之是は誠ニ稀成人物ニ而 山陵之義ハ無殘究其原古書引書悉
極探索尙疑きハ逐々相正し山城國計十五陵發輝と相分山城一ヶ國之調出來淨寫進呈ニ及申候東町與力故身分も卑名淺
置候義も六々敷當時淺野中務少輔殿上表ハハし應司家に進呈相成申候其餘國も不絶打巡ニ同志一同ニ骨折追々取調出
來申候様子飄齋懸意ニ而當時隱居之身 山陵之義ニのミ奔走ハハし居中候格別成人物ニ而誠感心仕候事御座候淺野侯
上表寫し差寄之處何分多端故自跡御廻可申候去年二月御達ニ相成候別紙之趣御承知とは存し候へ共寫懸御目中候當時
調出來之分ハ古書考證逸々相顯し至當時相傳候もの亦載之其跡に眞寫之畫圖折帖ニ仕立悉く行届候事ニ而不一通苦心
感心成事共蒲子泉下ニ歡喜可仕は勿論と奉存候當時京師ニ而月々兩三度宛同志之もの會有之彌以加訂正候事の由盛事
ニ御座候

卯二月廿九日所司代々奈良奉行に御達之寫

神武帝陵内職と相聞候場所見分之上取計振をも致勘辨申越候様被申越候付而之委細取調之上ニ無之而之難相極儀ニ
可有之候得共 神武帝ニ之格別之御儀ニ而別而 御會崇被爲在度然處年曆相立候儀往昔之御模様被爲復候儀之不容
易儀ニ可有之乍然何をも 御祠宮等之御造立被遊度尤古來御實素之御事共ニ候間白木造等ニ御取建有之候者可然哉
右之心得を以傳奏衆に内々示談之上取計方致勘辨委細申越候様年寄衆より申來則傳奏衆に内々及示談候處 御祠宮
御造立之儀往昔之御振合如何之御模様被察御事ニ候得共先御城外黒木御鳥居其内ニ茅葺丸木造或白木造土屋之拜
所御取立有之候様被遊度往々之假令不如木殿候共 陵戸も被充 陵守被差置從 禁中乍聊荷前之 思召ニ而御備進
物も御再興被爲在度累年之御志願ニ候猶又 御政務御事少之御時節ニ茂相成候者内談可被致儀も可有之哉此段被申
置候様關白殿被命候段傳奏衆被申聞候事

二月

神武帝陵鳥居御建物等之儀猶又取調之上御模様繪圖面を以申入候様被致度旨傳奏衆被申聞候事

安 政 三 年

二月

右 山陵取調之儀ニ付大意相認候もの夫々之來書等も御座候間一同可入御覽候所不相替取散置何分速ニ相分兼候間
大便ニ入御覽可申奉存候事

一 外夷之儀當年ハ先々出沒之沙汰不承候へ共琉球並北地杯に之度々來候而不相替手儘之義申候由傳聞未得其實候扱西
洋之魯細亞と及戰爭一勝一敗暗夷敗潰守自國不及航海杯申説も有之候へ共更ニ取留不申候先日長崎御詰御目付御歸府
懸之御話振杯ニ而一切相分り兼入津之唐船杯之商人故贈更ニ難分趣全亞墨利加商船乘組之者右様之説申候とやら確
説共難申由御座候扱又兩三日江戸表方申來箱館御届之寫御廻申候下輩之者まで如何ニも亂妨之所業可憎之至御座候御
賢察可被下候御異聞何卒御示諭奉祈候御地邊ニ而之定而御詳悉と奉存候當地御警衛向未御下知ニも相成兼度々御催促
被申候得共果敢取不申萬事御察可被下候

六月十六日

大 久 保 要
花 押

萩 角 兵 衛 様

尙以時候折角々々被成御座候様萬々申上度義御座候得共甚多忙大略失敬之段御海恕可被下候以上

六月廿一日幕府松平慶親松平慶政立花鑑寛の相房總沿海警備の任を解き更に松平頼胤外數名と
共に攝海防備其他各地の警衛を命す

〔神庫文書人印密書輯録百二十八印〕

〔卷込〕 堀田備中守様より六月廿一日御呼出ニ付清田 上總國富津御備場御用
新兵衛參上之處御取次を以御渡之御書付寫

抽ニ

細 川 越 中 守

細 川 越 中 守

上總國富津御備場御用立花飛彈守堀表海岸御警衛被 仰付右代丹羽左京大夫に被 仰付諸事嚴重申付候様相達候間得
共意可申合候且又松平大膳大夫松平内藏頭儀大坂并兵庫海岸御警衛被 仰付是迄之御備場ハ先ッ當分代ハ不被 仰付
候此段茂爲心得相達候

〔神庫文書人印密書輯録四百五十ノ内〕

〔抽書〕 松平讃岐守様京都御守衛右之外諸方様方所々御守衛

六月廿一日御沙汰書寫之内

松 平 讃 岐 守

京都表御警衛向之儀猶又御手厚ニ被成度旨被仰進候趣茂有之候ニ付其方儀茂御警衛被 仰付候松平出羽守松平越中守
茂被 仰付候間被申合是迄彼地御固之而々ニ茂諸事申談御守衛筋厚く可被心懸候依之大坂表御警衛之儀ハ 御免被成
候

武州神奈川横濱邊御警衛被 仰付諸事嚴重可被申付候尤松平隠岐守可被申合候

松 平 越 前 守
松 平 相 模 守

安 政 三 年

八二七

大坂表海岸御警衛被 仰付諸事嚴重可被申付候持場其外委細之儀ハ土屋采女正承合候様可被致候松平内藏頭松平土佐守茂被 仰付候條諸事可被申合候依之品川御殿山下御臺場御固之儀ハ 御免被成候

松平越中守

京都表御警衛向之儀猶又御手厚ニ被成度旨被仰進候趣茂有之候ニ付其方儀茂御警衛被 仰付松平讃岐守松平出羽守茂仰付候間被申合并是迄彼地御固之面々ニ茂諸事申談御守衛筋厚く可被心懸候

松平大膳大夫

攝州兵庫表海岸御警衛被 仰付候諸事嚴重可被申付候尤大坂堺表御固之面々并土屋采女正可被申合候依之相模國御備場之儀者 御免被成候

藤堂和泉守

京都表御警衛向之儀猶又手厚く被成度旨被 仰進候趣も有之候付此度松平讃岐守松平出羽守松平越中守儀増御警衛被仰付候間其方儀臨時出張之積を以京都口々之援兵可被心得候尤同所御固之面々可被申合候且又伊勢神宮御警衛之儀も是迄之通り相心得彌御手厚ニ可被申付候

丹羽左京大夫

名代丹羽越前守

上總國富津御備場御用被 仰付立花飛彈守相勤候通相心得諸事嚴重可被申付候尤細川越中守并浦賀奉行可被申合候

松平内藏頭

大阪表海岸御警衛被 仰付諸事嚴重可被申付候持場其外委細之儀ハ土屋采女正承合候様可被致候松平相模守松平土佐

守茂被 仰付候條諸事可被申合候依之安房上總國御備場之儀者御免被成候

松平出羽守

名代松平佐渡守

京都表警衛向之儀猶又御手厚ニ被成度旨被仰進候趣茂有之候付其方儀茂御警衛被 仰付候大坂表御警衛之儀者 御免被成候

松平土佐守

大坂表海岸御警衛被 仰付諸事嚴重可被申付候持場其外委細之儀ハ土屋采女正承合候様可被致候松平相模守松平内藏頭茂被 仰付候條諸事可被申合候

立花飛彈守

名代細川玄蕃頭

泉州堺表御警衛被 仰付諸事嚴重可被申付候持場其外委細之儀者土屋采女正承合候様可被致候松平相模守松平内藏頭茂被 仰付候條諸事可被申合候 右於御白書院縁類列座同前人申渡之

六月某日本藩長崎聞役は蘭國使節に關する吉見健之允の意見書を得て之を提出す

〔神庫文書人印密書輯録二百五十五印〕

下付紙 吉見健之允と申者先年 此方様に御預クニ相成候ものニ而當時之長崎御奉行様御側役加勢ニ參り居候而是ニ見聞之趣承合せ候處本所書付内々指遣申候

一本月廿日商船跡船指立候趣尤御政道筋御爲ニ相成候儀申上候由ニ而別段軍艦を仕立使節として重役之者此者御船手奉行位と申事ニ參候趣申出候隨而軍艦之儀之海路外國に之備之たま且之彼國法として大切之船其餘別而尊敬いたし候砌ニ無之候而之不相用國法ニ而此度之處茂昔々年々我 國之厚恩を受候儀ニ付無此上手重キ尊敬いたし候積ニ而軍艦を仕立候よし兵之凶器と可申候ニ無仁義之道蠻國ニ候得之我 神國なとハ岩壤之遠ニ御座候

一異國船之說近年紛々ニ御座候處右船渡來仕候處蘭船ニ之無之愈蘭船ニ候得之何歟分合茂可有之御爲筋申上候ト申趣ニ付而ハいる様之儀申上候も難計いつを魯西亞ニ而茂可攻寄ニ相違有間敷ふと俗説不大方候得共僕卑見一圓不得其意候其儀之當時阿蘭陀國王ト申者ハ至而英傑之由ニ而追々隣國之惡王共を盡ク打亡大ニ得民心夫ニ而下民ヲ尊而始而王號を付候由ニ付而之益行仁政國益其相考追々諸國に茂厚志を相通候由夫故我 國に茂幣禮を厚くし段々交易等手廣相願度之存心夫ニ付而之何歟御爲筋を茂不申上候而之其儀茂難相濟哉ニ付異國船之趣ニ而も申上氣味惡敷威懸ケ態ト軍艦本と仕立候儀ト被存候左もよくて實心御爲筋而已申上度儀ニ候得之外國之備迄之ふく商船之内に使節幾固乘組密ニ參り申上候而こそ御忠告トハ可申哉又愈異船參り候様子ニ御座候得之此度唐船入津ハ仕間敷右彼是相考候處先人氣を動爲致其上願筋をも可相辨との拙計夫も是迄之運臺ニ候得之利欲而已ニ耽り防禦之方ハ却而おふそふより候付右舩之拙策ニ而可動候得共於常奉行ハケ計之儀ニ而之動申間敷先常奉行在動中ニ御安心之方ト乍憚奉存候

一於軍艦餘程交易之品等茂内々持越候趣商船に差送り度候願出追々ハ公然と相願候儀茂難計右舩軍艦ニさへ商賣物を持參候位之儀ニ付萬事順此何等之儀仕出可申様無之ト奉愚察候

一茲ニ大絶倒之儀ハ使節其餘頭立候もの五六人計り早速出島に質ニ取置候處らびたん兼而呼入置候遊女罷出種々周旋仕候付使節其餘共頻ニ戀々之情を相催自分茂呼入度旨らびたんニ申聞候へとも自由ニ茂相成不申候付使節計に自分増遊女之積ニ而一人呼入候處寵愛不大方全體使節もかびたん同様巨物其上鬼鬚逆卷ゲニ三國之張飛もかくやと皆々申居候位之者が右遊女ニほださを五日滯留之内ニ鬼鬚不殘すり落し候由いゝゞ蠻夷聖教無之候とも餘り可憐之次第萬一之儀

御座候とも自是等之ん間を相用候得之不費干戈而足ぬへし

一市中ふとてハ魯西亞船杯と申追々跡船も可參ふと種々風説仕候へとも是等之街頭之邪説一切不取足儀ト奉存候
 一右等之始末ニ候へハ譬百萬之軍艦攻來候共少も可恐儀ニ無之候勿論小生ふとハ少年之節より厄災ニ懸り兼而格期之義ニ候へハ其節存命仕候儀之毛頭不存寄候處不圖莫太之以御情親親子とも無恙而已ニあらす結構之被 仰付候上厚く深々御仁德之段日々申出難有仕合ニ奉存候付而ハ萬一非常之儀茂御座候得之兼而以微軀奉報 國恩候外無之ト折茂宜候ニ付僻塞ニ罷下候江府出立之砌より茂愚父と申合置候儀ニ付誠ニ時節到來ト乍恐内心雀躍之至不堪欣喜存居候處先々此分ニ御座候へハ不及御儀安心とハ乍申僕内心空拳を握り殘懷之至ニ奉存候

一港入之儀之全ク頓臺一存高鉾邊ニ繫置候而之風波強候節ハ守船ニ難付添俄ニ大風指起り候へハ吹歸し候儀茂難計旁以江府 御沙汰を不待而被取計候儀之臨機應變之場合ニ奉存候右ニ而市街ハ不及申近村近國迄人氣靜候儀之計か難計候夫而已ふらす色々深意茂御座候様子全 御國威ニ茂相懸り候付嚴敷空炮を相禁嚴重ニ 國威を相示し候且港に被引入候儀茂奉行之骨と奉存候去ふら何事も此上ハ江府御沙汰次第ニ相寄可申儀ト奉存候

一右之條々誠ニ僕風聞而已ニ而決而取留候儀ニ之無之候得とも承候儀も有之候得之可申上との儀ニ付兼而御懇意ニ任せ愚意まで申上候御笑談可被成下候内々之儀ニおゐてハ私とも相預候儀ニ無之候付一切存不申候全街頭之風説ニ寄候耳夜前ニ茂相認置候得ハ宜敷候得共急ニ用向有之候付即刻相認候間色々顛倒重複之儀ハ幾度にも宜御推讀之程奉願候隨而街頭之風説トハ申ふら色々愚説とも申上候付而ハ御他見ハ決而御海恕之程偏ニ奉願候御使者相待候付何事も略文亂筆御叱捨可被成下候

六月廿三日幕府水藩擔當製造の大船落成につき追て内海に廻送すべき旨を達す

〔相州御備御用一件〕

御勘定奉行松平河内守様御目附岩瀬修理様御勘定吟味役村垣與三郎様より今日御城中之口には御呼出ニ付清田新兵衛罷出候處水戸様御引請御製造之大船御出来ニ付中黒之帆印日之丸幟相立風之模様ニ寄り内海に乘廻し有之筈ニ付爲心得可被成御達旨御勘定吟味方改役出役金子久三郎御徒目付新見蠅藏を以被仰渡候相州表に茂被仰向度此段相達申候以上

六月廿三日

御 留 守 居 中

藤本 津 志 馬 殿

六月廿六日幕府は各人所藏の洋書は其書目種類出版年月を記したる目錄を又其譯成りたるものは其譯書を一部つゝ蕃書調所に提出すべき旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕

(六月廿六日)

大 目 付に

此度蕃書調所御取建相成候間銘々所藏之蕃書原書之分ハ書目取調西洋紀年何年之著述ニ而何術又ハ何科之書と申儀相認差出且右之内翻譯出来之分ハ一部宛早々可被差出候尤伊勢守に差出候様可被致候
右之通向々に可被相達候

六月

六月某日幕府蕃書調所に於て廣く幕士の洋書を講究することを許す

〔尊攘錄皇武令〕

今度蕃書調所御取建ニ付御目見以上以下並惣領二男三男厄介ニ至迄經書辨書又ハ講釋等出来候者ハ勝手次第同所に罷越可被致修行候尤前以調所に可被申立候且又後而之陪臣等も修行之ため罷出候儀御差許可相成候得共此儀ハ追而可相

達候

右之通可被相觸候

六月

七月二日蘭國特使長崎に來着す

〔京都雜聞錄〕

長崎在留の者より江戸身寄の者への書翰寫

別紙を以申上候先便申進候阿蘭陀本國王より仕出渡來船去ル二日入津致し候付大通詞小通詞船番與力同心檢使之面々乗付御國法申達書翰相渡返翰差出人質も差出御定法近々相整申候得共國王より之書上書翰ハ未御受取ニ相成不申候へ共何も心痛之事も無之哉ニ御坐候右ニ付近國之諸御大名よりハ津々浦々山根岸々御領海に御堅人數御差出長崎洲先ニハ佐賀大村御料共入交り御領分御坐候得共湊内外ハ筑前佐賀之御預り之兩御番所ニ而當年ハ佐賀之御當番ニ而兩御番所並石火矢臺並御番所向にハ人數御手配り御陣代鍋島孫六郎一萬六千石 諫早豐前一萬三千石 を初番頭物頭家々之船印吹貫帆幟建岸々山々打堅メ幕張り武器押並へ夜ハ山々岸々船中ニ提灯を燈し海陸ニ籌を焚數百艘數千人之人數小具足陣羽織を着列を連子相堅外海ハ筑前之番船人數之同様相堅メ誠ニノ、珍ら敷有様ニ而夜ハ海上白晝の如く往通ふ番船交代注進之小船之晝夜之無差別高張を船に立押通ひ波戸場々々ニ之不殘高張挑灯海邊役所々々ハ右同斷ニ候兩御番所御定人數千人番所と唱候外ニ増人數佐賀家老諫早一手船手人數四百五人船數大小二十三艘同家老定持場鍋島孫六郎增人三百人諫早手千人鍋島紀伊守様御人數物頭以下三百人船手人數六百十人船大小合高三十九艘此外筑前外堅之御人數千七百廿五人船數合四十七艘此外大村領島々浦々佐賀領自堅人數ハ□之荒々右之通平戸五島島原熊本唐津領ハ自備之人數海陸ニ警固ニ而候得共具ニハ難申上候事ニ候此度渡來蘭船左之通

阿蘭陀船方差出候横文字書加解

安 政 三 年

一船号軍船フレカット

フランパンダ

船号

一船ノ主役 ハーハーエフコープス

右之通通調より申上候

一船大キサ 整三十貳間程 横八九間程

乗組人数三百八拾人程と申候事

右之船前後左右ニ番船武器相傍り警固西泊戸町兩御番所山之中央ニ幕張馬印鐵鑼鉄炮を飾り石火矢臺々ニハ開幕を張人数嚴重ニ相固メ誠ニ見ものニ御座候右ニ付而ハ當所ハ余程潤ひニ成り可申哉と存候右蘭船之事ニ付而ハ其御地ニ而ハ色々評判申候事と存候只一艘之船誠ニ兩御番所先迄乗入居候へ之袋之鼠ニ御座候何も格別評判之事も無之御安慮可被下候

七月五日朝

亂筆御用拾々々

〔神庫文書上丁三十八番水〕

稻津迄佐田より之内狀之内

國主言上之趣茂年來之御忠節ニ外寇之御覺悟筋ニ而も忠告仕候ニ而も可有之哉實意落着如何程之義可有之哉何分不安心之大義さし起り幕府之御讚談如何程之御決議ニ相成可申哉ツツマル處此節之使者ハ俗ニ稱スル飛車手王手之仕懸共ニ而ハ有之間敷哉左候へハ此節之御沙汰筋ハ治亂之境ニも係可申何卒至當之御沙汰筋奉祈候

（御奉行側役大鹽一列之内吉見健之尤是へも立山義作より先年之因と承也）

○面談承り候由

此節之使節船去ル七日之夕湊入被仰付其後ハ蘭館迄出入等も被指免聊意心等有之躰も相見不申在留のかひたんより日本料理之振廻等いたし酒肴ニ飽其末女色ニ溺レ俄罷ふともソリ落ふといたし候様子ニおゐてハ實ニ上官之貴人ニ而可有之哉不審成ノ由吉見内話等承り申候由

七月十日日本藩江戸藩邸より藩地及び大坂藩邸へ海運の武器番所前通過に關し猶一層の便法に依據せんことを浦賀奉行に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

浦賀御奉行土岐豐前守様ニ

越中守儀相州御備場御用被仰付候付大小炮器其外御定之目數を越候武器等江戸屋敷が國許に船路差廻候節浦賀御番所家老證文又之附添之内重立候家來之證文を以通船之儀一昨年六月伺相濟申候付其以來前條之品々之江戸詰家老證文を以度々通船被仰付候儀御座候然處家老並手附之者共儀之何を茂在番之者ニ而右様之儀是迄更ニ取扱不申一圓不案内ニ御座候上頻々交代茂仕被是ニ付一向馴合不申内輪甚以違却仕候而已ならず自然間違之筋出來仕候様御座候而之難相濟儀ニ付於重役共茂其心配仕候依之猶又奉願候之恐多御座候得共大阪藏屋敷が江戸表に武器馬具等船路差廻候節右御番所通船之儀乗組之内重立候者斷書差出候ハ、通船可被仰付旨去四月伺相濟申候右之御振合茂御座候事故前條家老證文を以通船仕來候品々之儀も以來之私共之證文を以通船被仰付候様被成下度奉願候左候得者第一至急之節辨利宜敷前條内輪困却之煩茂無御座被是ニ付何分御出格を以願之趣御聞濟被成下度此段奉願候以上（本文指令は同月十八日交附せられたり）

細川越中守内

七月十日

吉田平之助

安政三年

八三五

(浦賀奉行用人よりの通報)

吉田平之助様

深田茂左衛門

以手紙啓上仕候殘暑之御御座候處益御壯健被成御勤仕珍重御儀奉存候然者過日御談御座候江戸御屋敷御國許に御武具馬具等爲御差登之節御取計方之儀御書面御差出ニ付豊前守に申聞候處右之表向御差出之姿ニ而取扱附札を以被及御答候間御落手可被下候以後右之通ニ相成候ハ、御手数も無之御互ニ御都合宜御座候委細ハ其内拜顔可申上乍略儀以書中如是御座候以上

七月十八日

御書面之越者江戸表御國許大坂御屋敷に武具馬具等船路爲御差登之節御家老證文ニ不及各方證文被差出候ハ、浦賀御番所改方無差支通船爲致候様申渡置候此段及御挨拶候

辰七月

土岐豊前守

七月十八日幕府は大坂兩川口に四ヶ所の砲臺新築の件を規定し關係有司に通牒す

〔嘉永七年風説帳〕

安政三辰年七月十八日大飛脚ニ申遣趣

其地兩川口四ヶ所御臺場新築据附候大炮並御備船等之儀別紙之通西洋製被仰出候間可被得其意右御警衛御普請大炮竝立御船製造等其表町奉行共引請御取建之積り御入用等取調相伺候様可申渡候依之御臺場繪圖四枚差越候間委細之儀者松平河内守川路左衛門尉岩瀬修理大久保右近將監立田岩太郎村垣與三郎承合候様是亦可被申渡候尤御臺場御預之而々ハ追而可被仰付ニ而可有之候間可被得其意候以上

七月十八日

老中連名

土屋采女正殿

一安治川南目印山下御臺場壹ヶ所

一本津川南石波戸場上御臺場壹ヶ所

据附大炮

据附大炮

六貫目余

六貫目余

五貫目

五貫目余

貳貫五百目

貳貫目余

壹貫貳百五十目

壹貫貳百五十目余

合貳拾挺

合貳拾挺

一同所北附洲御臺場壹ヶ所

一同所北附洲御臺場壹ヶ所

据附大炮

据附大炮

右同斷

貫目並挺數等安治川口貳ヶ所御臺場共同斷

右四ヶ所御臺場並据附候大炮共西洋製被仰出候尤大炮之儀者御貯筒之内五貫目余貳挺貳貫五百目余貳挺壹貫貳百五十目余壹挺車臺共附屬御道具共當地可相廻候間其右御筒形ニ倣ひ於大坂鑄造致し臺場臺車臺附屬御道具共出來候様可被致候

御備船

但長拾間

蘭名バツテイラ形据附候大炮壹艘ニ付拾三貫七百目余壹挺蘭名六十ホントホンベカノン

百三十拾目余

同ダライハス

右西洋製ニ倣ひ製造被仰付候尤右之内壹艘者當地ニ而打立据附之大炮並附屬御道具共可相渡候間其右九艘者右御船形

安政三年

八三七

之通於其地製造致附屬御道具出來候様可被致候右御備船出來次第先兩川口御臺場御預ケ之向に拾艘相渡追々出來相成候得共兵庫邊御固之向に五艘灘目より西宮迄御固之向に壹艘堀浦御固之向に三艘御渡可相成候間可被得其意

別紙

其地兩川口に御臺場御築立被仰出候ハ、右最寄而已ニ而者土砂引足兼候哉之趣ニ付天保度振合を以川々臨時大渡被仰出候右土砂を以御臺場築立候様先達而相達置候得共其地事情假令御救渡被仰付候共多分所役可相勤者も右之間敷哉之趣相聞候上ハ近來諸般御事多之折柄打續キ天災等ニ而莫太之御用途差湊不容易御出高ニ者候得共御警衛向之儀可被差置筋ニ無之候間此度皆御入用を以御臺場御普請御備船等之儀別紙を以相達候通被仰出候事ニ候間可被得其意候兩川口之水利不宜滞筋淺く相成運漕不辨利ニ付諸物價ニ差響市中一舛之衰弊之基ニ茂相成候哉之趣ニ茂相聞候間何を臨時大渡不被仰付候而者相成間敷哉右ニ付御臺場新築之儀追而川々御救渡被仰出候節水行等之障ニ不相成様勘辨いたし御臺場之儀之御實備第一ニ築立候様町奉行に御申渡候様ニと存候以上

七月十八日

連名

土屋 采女 正殿

御船製造掛に
大筒 總立

同文言

川路左衛門尉 には
立田岩太郎

大久保右近將監

同文言

辰八月二日阿部伊勢守殿

紀州家老に御達書付寫

紀州加太浦淡州山良湊之儀ハ大坂湊之海門要所ニ付防禦筋之儀兼而被仰出有之臺場等御取建警衛向夫々御世話茂有之趣ニ候處友島之内沖之島々山良之湊六本松邊迄者海面場廣ニ而大砲玉利無之場所之由ニ茂相聞候間此度大坂表ニ而爲御備製造被仰付候蘭名ハツテイイラ形御船做ひ備船凡廿艘程茂製造被致大砲等据附被相備置候様可被成候尤御備船之内壹艘當地ニ而製造之上大砲等据付追而大坂表に相廻し其余ハ大御船形做ひ於彼地引受製造被仰付候事候間委細之儀ハ大坂町奉行に御承合被成候様可申上候松平阿波守に茂備船製造之儀相達候間可被得其意候

七月十九日長藩吉田寅次郎書を同藩久保清太郎に贈り反古書受領等のことを依頼し永島三平得罪逼塞のことに及ぶ

〔松蔭先生遺著所載書牘雜輯〕（久保清太郎に與ふ）

此書の達する比は秋氣益深かるへし向島の七草は如何又云尊大人不相替御壯榮文學甚御勉強爲道喜幸此事御座候併吾輩青年生恥へし畏へし「僕か反古類鳥山より御受取被下候由現々鳥山は不容易面倒事と致造察候御宜敷御禮申可被下候右の内にある書物は多分永島三平の分と覺え候併一先御取歸可被下候三平も先般藩にて罪を得候由國事を他に洩らしたる罪にて逼て最早赦免にや承らす候夫故一應僕所に預り置他日好便宜を得候節掛合候様可致候因に云僕輩行の節唐詩選掌故上下二冊鳥山より貰ひ幸にして捨りもせず御取上げにも逢はず今座右に置朝夕披閱致候然處當日甚た急遽にて中の冊を遺し候間何卒致完備度存念に付此趣を以て鳥山に御乞合被下間敷哉御頼仕置候事
五藏折には鳥山に共行候被歸參共出來候ハ、無此上妙也

安政三年七月十九日

七月廿一日米國總領事タウンセンド、ハリス伊豆の下田に來着す

〔維新日米外文の真相〕（タウンセンド、ハリス日記）

安政三年

千八百五十六年(安政三年) 八月二十一日 (木曜日)

昨夜下田港外に假泊したる我等は午前六時前方に陸地を望見したり是れ蓋し御前崎なるへし忽ち見る七十餘隻の漁船の拍子面白く海面に掃き出でしを其形状細小なるも清潔にして魁捷なること恰も日本人夫れ自身に酷似するものあり午前七時半拔錨港内に向ふ驟雨沛然として甲板を洗ひ夜來險惡ふりし天候未だ回復せざるが如し余は自室に於て下田奉行と江戸外國掛とに余の着任を報するの書を裁し特に外國掛に對しては本國の國務卿マーシーの公書を添へ孰れも翻譯官ヒュースケンをして蘭語に譯せしめたり

船港口に近くに及びて一隻の輕舸は船首に米國々旗を掲げ他の部分に二三の日本旗を翻へしつゝ我乗船に漕ぎ付け乗せ來れる水先案内をして我等を下田港内に導かしめたり余は先づ此港灣の狹窄なるに一驚を喫しぬ是れは港と云はんよりも寧ろ一小港と云ふの適切なるに如かず試みに我が乗船サン、ヂヤシント號の如き汽船三隻を同港に碇泊せしめよ港内は爲めに充塞せられて餘地なきに至らん内港は斯の如く狭小にして外港は何等港灣としての設備なき碇繫場たるに過ぎず

投錨と同時に日本の外交官三名と蘭語通譯二名(何れも日本人にして蘭語に巧なり)來訪下田奉行より我等の到着を賀し航海中の安否を慰問し且つ必要の物資を供給すべき旨を唱へ次に余が上陸の時期を問ふや彼れ曰く「是れ奉行と相談の上ふらては明言出來難きを以て後刻更に來りて打ち合す所あるべし」と云ひ附言して曰く「此下田港は見る影もなき一寒村にして外人の居住する家屋を得るに困難ならん蓋し昨年(安政二年)十月の大地震の爲めに下田港は全村覆没の慘狀を呈し巖かに傾潰を免かれし者十四名に過ぎず未だ回復せざればなり」と

午餐後二三船員は上陸して近傍を散歩し歸來盛んに風光の絶佳と日本人の温厚と家屋の何れも清新にして浦酒たるを稱揚し且つ海岸には我等に贈るべき二百噸許の石炭用意されたる旨を語れり

午後五時日本外交官再び來訪先刻余より交附したる文書は儘かに之を奉行に示し江戸へは特使を隨せて之を傳達した

るが如何に急行するも江戸着は五日の後なるべしと語り且つ奉行は明日午後余を引見すべきを傳ふ凡そ是等の問答中日本通譯等は戰々として内心恐るゝ所あるか如く玉ふす汗は其前額に滴々たりき而して會議は一語も漏らさず彼我兩國書記に依りて筆記されたり我提督アームストロング氏の病症面白からず

七月廿三日日本藩砲術範財津勝之助門人平野專右衛門上田政之進に同廿四日同師範渡邊作之允門人瀬川一郎助船津彌左衛門に同門三十名つゝを率ゐ警備地守兵交代として東行を命す

〔相州御備場御用一件〕

覺

旅詰之面々心得之儀付而之兼而別紙之通被仰付置候事ニ候處此節之儀ハ別段之御用付而被差越候事ニ付猶更何ぞ茂心を用風儀正敷有之度殊ニ此度之大勢之門弟代見等より引廻ニ而被差越候付相門中無隔意然和ニ申談諸事引廻之面々差圖を受聯違背無之様相心得道中筋を初詰内共別而謹慎を加油滑之風俗等不仕家來末々迄茂慎方之儀精々可被示置候事但道中筋成文簡易ニ通行有之道寄ハ可爲無用事

右之趣引廻之面々に申渡門弟中に茂精々可被中間置候以上

七月廿三日

一江戸に被差越候面々に被渡遺候書付寫

旅詰心得之儀付而別紙書付二通御用番被相渡可致通達旨ニ付則差遺候以上

同日

御奉行中

財津勝之助殿(備考七月廿四日渡邊作之允に宛てたる文書も同様なるを以て之を略す)

(財津勝之助門弟平野專右衛門上田政之進、渡邊作之允門弟瀬川一郎助船津彌左衛門同門各三十名宛引卒茲ニ一々其姓名を列擧せず)

七月廿五日日本藩管轄地人烟稀疎にして警備上の使役に充つるに足らざるを以て更に管轄地を増加せられんことを幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

七月廿四日云々清書出来翌廿五日朝阿部様は清田新兵衛御預所懸ニ付持參差上候處御落手
越中守相模國御備場御用付而同國並武藏國之内ニ而高堂万四千三百石餘御預所被仰付候右付而八國許より急連人數呼寄俄ニ大砲備船等數多製造申付其外武器糧米運送之手當を始自然之節水主人足浦船等致差配候者共御預所於村々多人數召拘夫々給扶持等も差遣被是莫太之入費を懸備向ハ大略相立候儀ニ御座候へ共越中守御預所之儀ハ相備之松平大膳大夫殿松平内藏頭様立花飛騨守様御預所等々村高少之貧村ニ而人數差出候節之夫役多分ニ及不足申候以前松平大和守様御領中追々異船渡來之節老幼男女を差加致勤夫候而も及不足川趣御城下附之村々を罷出助夫を以漸取賄ニ相成來其上數十日之間晝夜夫役ニ詰切候付農漁共肝要之時を失職と零落ニ陥候村方不少當時ニ至夫役申付候而も差支多殊ニ三浦郡ニ而村高並人別多御備場夫役第一ニ引當有之候櫻山村外四ヶ村先般受持替之節松平大膳大夫殿御預所ニ相成右代村ニハ以前井伊掃部頭様御預所鎌倉郡之内ニ而極零落之遠村を御入替ニ相成家數貳百軒餘相減從而人別多分減少故御備場御用第一之差支ニ相成當惑至極仕候尤領分々人夫差出候儀ハ山海數百里相隔候事ニ候へハ一切助夫等ハ相成不申御備場之儀ハ兼而被仰渡之御趣意も御座候付格別嚴重相心得手當人數ハ御先領より相増候間夫役人數多入用ニ御座候處自然之節差支候而ハ相濟不申於村々も人氣安養混々難澁之次第數願仕何分其儘難御候付前文櫻山村外四ヶ村元之通御引戻之上猶別途ニ貳拾九箇村程之加村を差奉願候處櫻山列御引戻之儀ハ如何様とも御沙汰無御座久良岐郡之内ニ而拾三箇村高貳千五百石餘被増下候へ共其内六ヶ村ハ古川床等之新田ニ而聊宛高迄を持人家一軒茂無之旁人別少ニ而矢張夫役及不足備人數ニハ應兼申候越中守受場之儀ハ別而異船船繫辨利之々所ニ而毎度野島沖夏島邊に數十日致碇泊條付始末備人數斥候番船ニ至迄差出置人數交代之節ニ水主人足茂様替仕方いたし不申候而ハ不相成右出張ニ付而ハ炮

器を始武具兵糧等ニ至迄相運候事故彼是人夫多分之及不足候付兼而養民之仕法を付甘を付遣置候外有御座間敷と御物成石壹兩之割を以上納引受之儀をも奉願候へ共難相整旨御差圖ニ相成當惑之次第ニ御座候差寄人夫相揃居不申候而ハ肝要之武具兵糧運送等差支夫故勝敗之境ニも係り候様成行候而ハ以之外之儀と唯々懸念仕候依之再應奉願候儀重疊恐多奉存候へ共御要地御軍備筋之儀其儘難押移御座候間何卒關八州御料所之内ニ而今壹万石程増御預所被仰付被下候様偏ニ奉願候尤最前増村ハ被仰付候へ共願高過半被減櫻山村外四ヶ村御引戻之御沙汰無御座候付未相備三家之御預所ニ比候へハ小高ニ而人夫引足不申其上異船碇泊之場所柄故脇並ハ出張人數も多且大和守様御受持之時よりハ陣屋詰惣人數等相増員候事ニ候へハ旁以夫役及不足候處遠國ニ而外ニ助夫等之取計も出來兼於村方茂困窮人氣ニ相係り就而ハ兼而之抑揚筋ニも差障役人共別而心配仕候體備向之儀ハ段々居合候へ共夫役不足之一條相整兼當惑難澁之次第御座候間右件々之譯を以此節願之通相應ニ辨利之村方無御減少被濟下候様有御座度左候へハ御軍備筋相整村方一同相競彌以差入出精仕往々村方茂引立被是御爲筋ニ茂相成可申と奉存候何分ニ茂別段之御評議被成下候様幾重ニ茂奉希候此段申上候様申付候以上〔本文指令は翌年七月六日交付せられたり〕

細川越中守家來

七月廿五日

清田新兵衛

七月廿六日下田奉行岡田忠養初めて米使ハリスに面接し次日下僚をして國情をのべ一旦歸國一年の後再び來るべしと説かしめしも彼聞かず

〔離新 日米外交の真相〕〔ハリス 日記〕

八月廿五日〔月曜日〕

午前八時日本官吏來艦奉行は午前十時余を引見すべく準備しつゝあるを通告せり即ち定刻に至り余は秘書官と共に提

安政三年

八四三

督のボートに乗り艦長ベル氏以下十名同行す而して先發隊は三隻のボートに分乘して余の上陸以前凡ての準備をふせり余のボートが本艦を離れて適當の距離に至りし時十三發の禮砲は本艦上に起り般々として下田港の靜寂ふる丘阜に轟き渡りたり體て海岸ニ達するや直ちに同港の中央ふる一新築家屋に導かれしか沿道余の一行を見る者堵を爲したり奉行及び副奉行は余等を引見し或は寒暄を叙し或は米國出發の日時等を問ひ應接極めて懇懇ふり次に彼等は先刻響きたる砲聲は何人に對する禮砲なるやを問ひ是れ總領事たる余に對する禮砲なるを説明するや彼等は猝に尊敬の態度を表したり奉行は曰く「本官は斯の如き巨砲の發射さるゝ狀況を實見したきものふり」と艦長ベル氏は目下各砲が塗り換申なるを以て其乾燥するを待ち次の土曜日に艦を訪問されたま旨を答へたり

少頃ありて日本料理の饗應あり余は夙に日本の料理法の進歩せるを豫期しつゝありしが其美味にして華麗なること豫想以上にあることを知りたり宴中余は奉行に向ひ何日頃會議を開くを得べきかを問ひしに奉行は唯今即時に之を始むるも妨げなきを答へたるも余は今日の如き儀式的の訪問席上に於て普通の用務を議すべきに非ざるを述へしに奉行は明日午前十時副奉行を彼の代理者として余と會見用務を議せしむべしと提議したり余等の會見は二時間に亘り大いに日本人の容貌舉止の優雅なるに感服したり余は茲に日本人が喜望峰以東最優等の國民なるを明記す

八月二十六日 (火曜日)

午前十時翻譯官フュースケン氏を拉して上陸副奉行及び特派されし大官余等を迎接す而して此大官は我等か下田に來航せる急報に接して特派されたるは明々白々の事實なり茲に於てか曩に日本官吏が余に向つて江戸迄は片道にて四日の行程を要すると云ひしも實際は五日にて往復するを得るを知れり日本官吏が如何にもして時日を遷延せんと苦心するの状を見るべし

此日の會見は極めて長時間に亘りしも到底余の希望に副ふを得ざりき副奉行及び江戸の大官等は曰く「我等は全く米國より領事を派遣さるべしとは夢想だもせざりき抑も領事は國際間に何等かの紛議を生じたる場合始めて派遣さるべ

き者なり然かも今や日米間に斯る問題の存在を認めす且つ夫れベルリの修好條約第十一條に依れば日米兩國政府に於て必要と認めたる場合米國政府は下田に領事若しくは代表者を駐紮せしむることを得とあれとも日本政府は未だ曾て領事派遣の必要を聲明したることなし故に今日貴官の來任はベルリ條約に違反せり假りに百歩を譲りて是等の問題を論議の外に置くも下田の如き貧弱なる小漁村に於て到底貴官の官舎を得る事能はざるべし故に貴官の爲めに計るに一旦歸國せられ一ケ年の後更に來任さるれば或は旅舎の新築も落成すべし然かも貴官にして強ひて當地に駐紮を主張せらるゝに於ては宿舎の落成する迄暫時柿崎の玉泉寺に宿泊せられんことを望む貴官若し之を肯んせずして江戸に赴かるゝことあるも昨年(安政二年)の大地震に於て江戸全市は戦慄すべき慘狀を呈し兩國回向院に埋葬したる震死者及び燒死者の數無慮十萬四千人に及へる程にて此慘劇ありしより未だ十ヶ月を経過したるに過ぎざれば貴官の満足すべき邸宅を得るは蓋し至難に屬せり」凡そ是等の議論は三時間に亘りて彼等か熱心主張したる處にして急言緩語余の感情を害せずして其主張を貫かんとしたるが如し然も余は不幸にして悉く彼等の提議を拒否せざるを得ざりき最後に彼等は敢て余を排斥せんとするものにあらず又敢てベルリの條約を廢棄せんとするにもあらずる旨を辯疏し明日午前十時更に會見せんことを求めて此日の會議を閉じたり

八月廿七日 (水曜日)

午前十時上陸下田奉行を訪問す奉行副奉行出でず江戸の大官以下十名許りの日本官吏我等を迎接して曰く「奉行は昨夜來激烈なる頭痛に悩み會議に臨むを得ず」と而して副奉行の不在に就きては言及する所ふし彼等難詰の語句を弄して曰く「ベルリ條約には下田領事を駐紮せしむとあるも總領事を駐紮せしむるの規定あらず且つ夫れ領事の駐紮に就きてはベルリ條約以外別に詳細なる條規を協定するの要あり故に米國は先づ全權大使を我國に派遣して是等の條規を協定したる後始めて貴官の來任を見るに至當の順序となす」と余曰く「副奉行は昨日の會議に於て本日更らに余と會見

を約し乍ら之を守らざるは背信の甚しきものにして余に對する敬意を缺けるものなり余は奉行若しくは副奉行以外何人とも余の任務に就て會商するを欲せず而して今乃ち此二人にして余との會見を拒否する以上は直ちに本艦に歸りてアームストロング提督と協議し江戸に直行して満足すべき會商を遂ぐべきのみと彼等は此一言を聽きて大に驚けるの態ありしが江戸の大官は曰く「余は特に幕府より派遣されし者にして其地位下田奉行の上により故に貴官は奉行若しくは副奉行よりも余と會商せらるゝを便とす」と余曰く「然らず余は下田にありては下田奉行を以て最も責任ある官吏と認むるが故に設令個人としては貴官に對する敬意を表すると雖も職務上の談判を外交上表面の責任者ならざる貴官と試むる事能はず」と彼等は到底余の意見の枉ぐべからざるを見るや遂に本日會見の模様を奉行に報告し且つ明日午前十時より副奉行自ら余と會見すべき旨を語れり然かも余は彼等を追窮して曰く「副奉行は既に一度約束を破りたり故に之に對する辯解及謝罪の意を表する迄は彼れと會見するを欲せず敢て望む奉行若しくは副奉行は之に返書を書き日中か明朝まで我が乗艦に送り且つ彼等が果して余と談判を進行するの意あるや否や余の館舎を選定するや否やを決答せられんことを」と彼等は余が江戸に直行せんとするを見て最も憂懼に堪へざるが如く是れが決行如何に就いて更に問ふ所ありしも余は是れ提督と協議の上にて決定せらるべきものなりと答へて歸艦したり

七月廿八日竹内下野守堀織部正村垣與三郎同時に箱館奉行に任せらる

〔安政三年 風説書等〕

一七月廿八日左之通之山

竹内下野守
堀織部正
村垣與三郎

蝦夷地御開之儀之不易御大業ニ有之殊更魯西亞ニ接境之地北門之鎖鑰御大切之邊陲ニ付此度箱館奉行三人役ニ被仰付候間登人之當地ニ罷在兩人之被地ニ在勤右之内申合登人宛蝦夷地に渡海暫時罷在御取締向取計其餘舉田を初産物取開方等一同申談十分ニ世話いたし御成功御携取御安心被遊候様可被心得候
右於新部屋前留伊勢守書付渡之

七月廿八日

八月五日英船三艘長崎に渡來す

〔本藩年表〕

八月五日長サキへ英船三艘渡來

〔昨夢紀事〕 (越藩中根 初負日記)

(八月廿八日附伊達宗城ヨリ松平慶永宛書翰ノ一節)

鎮西へも當月五日英奴船三艘渡來之處佐賀仕切船を乗破内港へ乗込上陸之儀嚴敷申張遂に士官已上はゆるし候由十日前後にハローリングも十餘艘にて渡來可致旨我方之不行届故にハ候得共猖狂輕蔑絶言語候佐賀仕切船守衛之者も波没怪我も有之由さすれハ此儘にハよもや被差置間敷と存候處於廟堂は此風雨(八月廿五日ノ大風雨ヲイフ)は狼藉候得共鎮西之儀は左程にも無御座候何もかも彼か如望開かれ候胸裡かと憤痛泣血之至御座候云々

八月六日ハリス柿崎玉泉寺に移り米艦下田を退く

〔維新 日米外交の真相〕 (ハリス 日記)

九月三日 (水曜日)

上陸して旗竿樹立の場所を撰定し歸つて國務卿マーシー氏に送るべき報告書を起草す大版十二頁を費したり

安政三年

八四七

余は本日玉泉寺に移轉するに決し殘餘の貨物を悉く陸揚し午後五時隨員二名と共に本艦を去る舸の本艦を去らんとするや艦員登舷禮を行ひて壯烈なるウラーを三唱す余の舸艇よりも之に應せしに艦上よりは再びウラーを連呼したり余は五ヶ月間寢食を共にしたるサン、ヂヤシント號の乗員より斯くも熱誠なる告別の情を表されて柿崎閑居の舞臺に第一歩を進めんとするに當り無量の感慨胸に溢れて涙滴々たるを禁する能はざりき玉泉寺に着すれば副奉行及び官吏等余を待ち受けて鄭重なる歡迎の辭を述べ且つ奉行よりの贈物なる鳥、卵、海老等を示さる(略中)半歳の久しき我命を托したるサン、ヂヤシント號は本日をして此地を去らんとす錨を抜いて港口に出でんとするに當り軍艦旗を下して余に告別の意を表し余は亦之に答禮するや菓女は「光榮ある孤立」を守らんとする余を殘して港外に出で去りたり時に午後五時殘煙夕陽に映じて地平線に消えたるあたりを望見して寂寞の情に堪へずされと余の哀情は永續せざりきそは荷物の整理蚊帳の新調等に忙殺されたるが故なり此夜八時就床熟睡直ちに日竿に至る

八月九日幕府蘭國王に物を贈りて汽船を獻せしに酬ゆ

〔異國船渡來一件〕

安政三丙辰八月蒸氣船獻上ニ付阿蘭陀國王に被遺候品々

- 一長刀 二振袋共 内 會振は太刀打青貝 銘 直勝 定一
- 一繪屏風 拾双 服紗共 内 一雙 雲積砂子泥引 加茂 豐馬 薰川
- 一雙 雲積砂子泥引 勝川 一雙 同左鎌倉五郎島海彌三郎 永徳
- 一雙 古鉢 鷹野 一雙 右平頼盛八丁次郎
- 一雙 同 富士巻袴 探厚 一雙 泥引 茶摘 桂舟
- 一雙 惣金 野馬 雲溪 一雙 雲積砂子泥引 村上查四郎 伊保秋山 内記

- 一雙 泥引 大和耕作 春舟
- 一雙 同 墨繪 休晴
- 一雙 惣金 老松若松 素川

- 一翠簾屏風 拾双 服紗共 内一青地 花色 一黃地 牡丹 鐵せん
- 一長柄傘 拾本 一赤地 花 桔梗 一黒地 柳 棒
- 一白地 櫻 紅葉 一黒地 柳 棒
- 何を茂二本宛
- 一古代製鏡 壹領 紫裾濃
- 一最上形具足 壹領 卯花
- 一大シツホク臺 箱酒宴之道具品々有之
- 一大和錦 百卷 一小柳織 一拾端
- 一上美濃紙 五百束 一紫 輪子 貳尺物 大服紗共
- 一扇子 千本 滑骨之外金銀泥引仕立取ませ
- 以上
- 船將カピタンへ被下
- 一時服 四十 製外目 紋 緋 加のこ入
- 上官に被下 其他
- 一時服 十

安政三年

以上

八月十六日ハリス下田奉行に對し兩換法の改正を要求す

〔最新日米外交の真相〕(ハリス日記)

九月十五日 (月曜日)

余は先週土曜日(九月十三日我ハ)日本官憲に對しヒュースケン氏より銀貨五百弗を提供するに付之と同量の日本銀貨を同氏に交附せられたき旨を要求し本日は奉行自ら之が答辯の爲めに來るへしと期待したり抑も從前の日米貨幣兩換標準は極めて不公平にして既記を經たるが如く彼等は米貨一弗に對して僅かに日貨一步を與ふるに過ぎず而して一步は一兩の四分の一なるが故に日貨一兩は米貨の一弗三十六仙に當り一步は米貨三十四仙に當れり茲に於てか余等は一弗を以て買物するに當り僅かに三十四仙の物を得へく其二十割なる七十仙は全く余等の損失に歸するなり我が政府は斯る不公平なる換算法を改正して實價に相當する兩換を行はしむべきを命令し來れり余は日本官憲が此要求を拒否すべしと信するも飽くまで争ふて我が主張を貫徹せんとす

八月廿一日日本藩警備地觀音崎砲臺の風波に破壊せられたる狀況を幕府に申告す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

海防御月番

内藤紀伊守様ニ

越中守相模國御備場之御臺場去冬地震ニ而及破損候段者其砌委細御届申上置候處觀音崎御臺場之儀者別而波當強場處ニ而御臺場外通之道筋當五月風雨高波ニ而三箇處猶又及破損候段彼地詰役人共よ申越候此段御届申上候以上

細川越中守家來

八月廿一日

吉田平之助

八月廿一日日本藩警備地砲臺破損調書を幕府に提出して速に修補を加へられんことを請ふ

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

御勘定奉行

松平河内守様ニ

越中守相模國御備場之御臺場去十月二日地震之節及破損候内烏ヶ崎龜ヶ崎觀音崎之損處其儘ニ被差置候而者兼而波當強場處ニ付此後強風雨等有之候得者彌以及破壞防禦筋差支候體ニ可相成哉茂難量其節ニ至候而者御修復大造ニ可相成候間早々御普請被仰付被下候様奉願候處當春御役方御見分者相濟申候然所當五月觀音崎御臺場外通之道筋最初破損之場處風雨高波ニ而別紙箇所附之通浪缺ニ相成申候最前申上候通此上及破壞候而者防禦筋ニ茂差障且御入用多相嵩可申候間早々御普請被仰付被下候様奉願候此段申上候以上

細川越中守家來

八月廿一日

吉田平之助

箇所附帳上書

觀音崎御臺場外道筋損所箇所附

細川越中守内

吉田平之助

觀音崎御臺場外

高岸道筋之内

安政三年

- 一長延 拾貳間 但此處 平均 高九尺
- 右同斷 新損
- 一長延 五間程 但此處 平均 高九尺程
- 右同斷 増損 平均 高六尺程
- 一長延 三間程 但右 平均 高五尺程
- 右同斷 同斷 平均 高三尺程

右者越中守相模國御備場觀音崎御臺場外通筋前書三箇處當五月浪缺ニ相成申候段彼地詰役人共よ申越候間早々御普請被仰付被下候様奉願候以上

細川越中守内

吉 田 平 之 助

八月廿四日幕府岩瀬修理を下田に遣し下田奉行と共に米國官吏駐在許可のことにつきハリスと交渉せしむ

〔安政三年風説書等〕

一辰八月廿四日大和守殿於新部屋前溜御波

岩 瀬 修 理

覺

亞墨利加官吏並上陸止宿之儀ニ付彼船渡來も候之此方ニ而指支之趣を以難相成段可及應接旨兼而下田奉行に申渡置候得共今般官吏之趣を以渡來之亞人に應對之上假ニも滞留爲致候上之今更引拂候儀も出來申間敷實ニ當今不得止時勢ニ付官吏指置候方ニ下田奉行に相達候間其方儀早々彼地に相越下田奉行相談取締向十分ニ可被取計候就而之魯西亞官吏之儀條約而之儀も有之猶英佛其外追々同様之儀可申立之必定ニ而實ニ不容易國家之御大事ニ有之候間邪教傳染ハ勿論

土地之愚民外異之風習不押移様得て下田奉行に申談最初ハ渡來迄之御取締筋厚ク勘辨之上家居其外も可成丈極々狭少ニ取計御國患不相成様下田奉行俱々踏込念入主法取調可被申聞候事
但相越候節之萬端手輕にいふし宿驛等費弊等不相成様相心得尤當地御用も多端之儀ニ付彼地取締方ニ見居も付候上ハ早々歸府候様可被致候事

八月廿五日江戸附近大風津浪あり本藩警備地の砲臺また破壊せらる

〔安政三年江戸機密間日記〕

八月廿五日

一今晚六時過より北風少々吹起五時過より東ニ廻り次第吹募四時比辰巳ニ直し風向共別而烈敷候付爲何御機嫌致出席候處折節四ヶ所出火芝通之段々及大火當御屋敷風下ニ而遠火ニ之候得共大風之折柄ニ付既ニ御前様 喜久姫様にて御立除之御用意ニ茂相成居候内漸九半時比西ニ廻風勢弱り曉七半時比風止火茂鎮り候事

〔維新日米外交の真相〕(ハリス)

九月二十三日(火曜日)

昨日午後四時より東南東の烈風吹き荒みしが午後八時に至りて颶風と變じ驟々たる風聲堂宇を動かし屋瓦を飛ばし沛然たる濛雨粒を漂はし床を浸し懺懺たる光景此の世の果の來れるかと思はれ風心我が宿舎に衝突して左右に撼搖せらるゝ時余は幾度か死を決せり幸にして夜半を過くる頃より風勢漸く衰へ西南西の軟風に變じて今朝に至れり此暴風雨の爲めに余の宿舎は割窓室の屋根を掀翻せられ巨大なる旗竿は六十五度の傾斜を生じたり若し夫れ海岸の儘狀に至りては名狀すべからざるものあり凡ての漁船は見事に破壊せられて海濱に打揚られ溺死したる者幾人なるを知らず柿崎全村に於ても全戸數の半以上は破壊せられ多くの死者を出し棧橋及び防波堤は悉く崩潰を見たり

十月一日 (水曜日)

和蘭巡洋艦メヂユサ號函館より長崎への途次下田に寄港す余は直ちに輕刺を驅つて同艦を訪問す艦長フアピヌ氏喜んで余を迎へ十一發の禮砲を發射す艦長の語る所に依れば今回函館に於て巨大なる石炭坑發見せられ其品質の純良なると産額の豊富なるとは大に石炭の價值を下落せしむるに足れりと其他艦長より余が聞き得たる所は曰く蘭國は日本の爲めに二隻の汽船を本國に於て建造しつゝあり曰く蘭國の造船技師數名は長崎に於て日本人に造船術を教授しつゝあり曰く和蘭國王は日本皇帝に向ひ開國通商に關する最も熱烈なる勸告書を贈りたり曰く和蘭は數年來日本輸入品に對して或る程度迄金貨及び金塊を本國に持ち歸りたり

十月四日 (土曜日)

(前略)

蘭國軍艦メヂユサ號は昨日長崎に向つて出帆したり

九月十日英船長崎に來る

〔嘉永七年風説帳〕

去月十日渡來之啖啖利船一艘同十四日致出帆候旨長崎に差置候家來に同所奉行より相達候旨承知仕候此段御届仕候以上

十月六日

松浦壹岐守

九月下旬本藩管轄地増加請願に關する追申を幕府に提出す

〔相模國御備場御用付諸御願御同等〕

九月下旬職十月初比ニ茂爲有之哉阿部様に入御内覽候處其儘御留置ニ相成候

越中守相模國御備場御用被仰付置候付及自力候丈ハ手を盡大略備向ハ相立候得共御預所村高少勤夫不足ニ付而非常之節肝要之武器兵糧運送等之手賦差支國許ハ遠境ニ而援夫之取扱も出來不申甚以當惑仕候不容易御軍備筋ニ係り候儀故何分其儘難押移御座候間今壹万石程増御預所被仰付被下候様當七月委細奉願置候右者陣屋最寄之村方を差奉願度候處左候而ハ東海道筋助郷ニ重役ニ相成差障之程茂難計關八州之内と申上置候得共若懸り遠之村方於所々被渡下候様ニ茂御座候而ハ自然之節人馬配當等殊之外不便利可有御座逆茂陣屋最寄ハ不被爲叶遠方之御調ニ共相成候ハ、清水御領御上知之内武州埼玉郡比企郡ニ村方壹万石餘御座候由ニ付可相成ハ夫を増御預所ニ被成下候様有御座度左候ハハ非常之時分夫役之手當相整江戸表よりも急速人數繰出候節之都合等彼は大ニ便利を得可申奉存候巨細前書ニ申上候通相備三家之向ニ比候得ハ越中守御預所ハ少高ニ而手當人數等ハ多分ニ差出候受場之譯旁を以何卒願之通出格之御評議被仰付候様幾重ニ差奉願候右勤夫不足之一條初發より深案勞仕居候處近來ハ又々異船追々渡來之様子ニ付陣屋詰之者共ハ猶更落着兼必多度歎訴仕候若此儘押移非常之期ニ臨勝敗之境ニ差係り候様御座候而ハ以之外之儀且ハ上下一統氣請ニも相響甚以心配仕候間彼是を以急ニ御沙汰被成下候様偏ニ奉希候此段申上候様申付候以上(本文申請に依り翌年七月六日管轄地増加せられたり)

細川越中守家來

月 日

清田新兵衛

十月九日本藩相州警備地詰の人員を調査す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

一御備場詰御人數等之事

一御中小姓頭

壹人

取調候儀有之十月九日政府並御預所役所等開合候處

一御物頭

四人

當時左之通之由爲後繼記之

一組附御中小姓

貳拾五人

安政三年

八五七

- | | | | |
|-------------|-----------|----------|---------------|
| 外ニ組脇 | 壹人 | 一御作事所御横目 | 壹人 |
| 一大筒手 | 百貳拾五人内三人欠 | 一御役所御物書 | 三人 |
| 外ニ引廻 | 拾人 | 一御勘定所物書 | 四人 |
| 一定府御物頭列 | 壹人 | 一御留守居方物書 | 貳人 |
| 一右同平士 | 拾貳人 | 一同所加人物書 | 貳人 |
| 内役等左之通 | | 一外使 | 壹人 |
| 一御奉行代御目附 | 壹人 | 一御作事所御役人 | 貳人 |
| 一御郡代御留守居兼 | 壹人 | 一御郡代間物書 | 壹人 |
| 一御留守居代勤副頭 | 壹人 | 一同所加入物書 | 貳人 |
| 一御役所根取 | 壹人 | 一内外御横目 | 四人 |
| 御作事所御用上聞 | 壹人 | 一役割支配役 | 壹人 |
| 一御勘定所根取 | 壹人 | 一御大工棟梁 | 貳人 |
| 一御醫師 | 四人 | 一惣代小頭 | 貳人 |
| 一御目附付御横目 | 貳人 | 一外様足輕 | 百拾人計此内加人等加ルハ留 |
| 一御郡横目 | 壹人 | 一定詰足輕 | 貳人 |
| 一御勝手方附所々御横目 | 壹人 | 一百人者 | 五拾七人 |
- 十月十二日露國提督ボシエツト通商條約締結の用務を帯び軍艦オリブツアに坐乗し幕府に贈呈の新造汽船を伴うて下田に來る
〔維新日米外交の真相〕(ハリス) (日記) (秘史)

十一月八日 (土曜日)

コルベツト型露國軍艦オリブツア號新造の兩桅船を伴ひて來着余は直ちに艦長と提督を兼ねたるボシエツト氏をオリブツア號に訪問して驛迎せらる兩桅船はアムール河の造船所に於て建造せられたる新造船にして特に日本政府に贈呈せんが爲めに來航せるなり而してボシエツト艦長は日露通商條約締結の用務を帯びて來り碇泊日數も四五週間に及ぶべく兩桅船の贈呈は蓋し其談判の進行に便宜を得べき一策あるが如し余はオリブツア號を辭せし後該兩桅船をも訪問せしが前者の廢艦に近き古朽艦なるに反し後者の構造精巧にして裝飾の華美なる目を驚かすに足るものありき船長をコラサコフと云ひ大に余を歡待されたり

十月十七日閣老堀田正篤外國事務及び海防事務擔任を命せらる

嘉永七年

〔風説帳〕

一安政三年辰十月江戸表々左之通書付差廻シ來候事

十月十七日

御座間

堀田備中守

外國御用取扱肝要之儀者一同申談之上心を用可相動候
右於御前被仰付之

同 人

當分之内月番御免海防月番者一手ニ引受御勝手月番者是迄之通可相動候
右於奥相濟

十月十八日幕吏ボシエツトと通商談判を續行す

安政三年

八五九

〔維新日米外交の真相〕(ハリス)

十一月十四日 (金曜日)

(前略)

今やボシエツト提督と日本官吏との間に連日會議を進めつゝあり蓋し露國は日本をして名實共に開國の實を擧げ一日も早く通商貿易を營むに至らしめんとするあり而して余の親友森山永之助氏の如きは盛んに此希望の實現すべきを確言し其時期は今後三年を出でざるべしと云へり若し此方面に於ける日露の交渉進行せんか余亦日米通商條約の締結を完うする點に於て一步も露國に後れざらんことを期す

十月廿日幕府大目付跡部甲斐守土岐丹波守勘定奉行松平河内守川路左衛門尉水野筑後守目付岩瀬修理大久保右近將監勘定吟味役塚越藤助に貿易許可に關する調査を命す

〔相州御備場一件〕

十月廿一日御城坊主と差越候書付寫

十月廿日

御留守居次席大目付

跡部 甲斐守

土岐 丹波守

御勘定奉行

松平 河内守

川路 左衛門尉

水野 筑後守

御目付

岩瀬 修理

大久保 右近將監

御勘定吟味役

塚越 藤助

御用被 仰付之

近來外國之事情茂有之此上貿易之儀御差許可相成儀も可有之候付右取調之御用被 仰付之
右於羽目間備中守申渡之

本多越中守侍座

右書付御留守居方に問合見合ニ茂可相成哉と記録いたし置候事

十月廿一日ハリス書を下田奉行に贈り通貨換算問題の解決を促す

〔維新日米外交の真相〕(ハリス)

(日記)

十一月十八日 (火曜日)

余は昨日下田奉行に一書を與へて通貨換算問題の解決を催促したり然るに本日副奉行某大官及び余の親友森山永之助來訪過般來露船との交渉事件ありしか爲め通貨換算問題を閑却したるを謝し奉行よりの贈物として六羽の美麗なる鳩を入れたる籠一個を披露したり彼等曰く斯の如き美しき鳩は日本に於ては珍種にして奉行は特に江戸の鳥飼に命じて調達せしめたるものなりと余は此の厚き贈物の裏面に何物かの潜在すべきを豫測したるに果然彼等は其眞意を發露したり曰く「昨日貴官より奉行に與へたる書面は急飛脚を以て江戸に差立てたれば日ならずして是れが決裁の返書に接すべく夫れ迄は數日の猶豫を與へられたし」と余答へて曰く「余は敢て此問題に就いて數日を寛假する能はざる程に焦慮

ふらされども斯る外交上の交渉事件に就ては一切公文書に依り口頭の應答を廢せんことを望む余の關知する所に依れば日本將軍は和蘭國王に對して少くも二回書信を發し幕府の大官等は最近二ヶ年間に於て露西亞人に三十回以上の手書を與へ過般和蘭軍艦メヂユサ號の當地に来るや奉行等は無數の外交文書を以て艦長フアピウス氏と交渉したり然るに獨り余の交渉案件に關しては只管證據とふるべき文書の交渉を避けて一切口頭の交渉に止めんとするは解すべからざることより爾今望むらくは貴我交渉事件は悉く文書に依りて交互の責任を明かにせん」と彼等唯々として退く

十一月六日水戸藩原田八兵衛書を長岡監物に贈りて從來景慕せし心事を陳へ又其藩内の狀情を報して監物が常に同藩の事情を憂慮せし厚意を謝す

〔先哲遺翰〕(子爵米田家藏)

鄙翰謹啓仕候時下千林黃落之節高堂御拙愈御清適被爲世道奉至賀候隨而弊庭依舊無異消光罷在候間乍憚御放懷可被成下候扱追々御英姿遙ニ拜聞尙津田氏等より承知仕深く景慕罷在候間長き内ハ拜顔も仕度と志願罷在候所不測一昨年中御出府御座候ニ付是非上堂仕候積リニ候處其折之小生儀罹篤疾既ニ生死之程も難測位ニ御座候ゆへ終ニ不接風肩御歸西ニ而素志空しく罷成遺憾至極奉存候尙欣慕之餘御發報前指かゝり以津田氏御揮筆之儀相願候所早速御染毫被成下重疊不堪感激之至奉存候將又弊藩國事ニ付而ハ段々深く御配慮被下置戸藤野後も津田氏迄御教示被下候而已ならず老父迄も御懇篤芳墨被成下種々御誠意御盡し被下候段御厚誼之程難盡筆紙感銘不齊奉深謝候扱國事も萬冬頃迄ハ爲差儀も無之候處震災ニて人心轉動致候上戸藤野死之虛ニ乘し群小會謀不容易企有之若其計策の如く相成候得ハ八九年前之如き險難之形勢ニ變し可申も紙一枚之間ニ候間誠ニ以日夜苦心焦思仕不安寢食罷在候所好策餘リニ過激ニ御座候ゆへか一朝暴露巨魁而已所置有之其餘ハ皆見消し候ニ付存外平穩ニ屬し當今ニ至り候てハ震災以前之通之形勢ニ御座候間一同少しく降心罷在候乍去ことノく寛大ニ宥赦被致候ニ付今以巨奸陰伏いたし居候間動もすれハ離間之策を施

し候而已ならず支封之内ニも高松等右と合併通謀いたし居候間此上如何なる禍變相發し可申も實ニ難測甚以寒心仕候儀ニ御座候實地事情萬々難盡紙上御推察奉希候初春ハ四五月頃迄至極險難其后至極無事此節之所ハ震災前よりハ一際泰卦之模様ニ御座候間何卒此順にて變革不致候様相祈候事に御座候大略先便津田氏迄内々申遣候間今程御聞取被下候義と奉存候尤他へ漏洩仕候てハ一藩之耻而已ならず幕吏杯へ聞へ候而ハ甚以不容易嫌疑ニ涉り候儀ニ御座候間直ニ御投火奉希候扱過日老寡君より老父迄執事へ御聞合申候様ニと被申付候儀左ニ相伺候
貴國本妙寺と申寺の所藏に宗尊親王御筆ニ而日本紀竟宴和歌右之よし右寫弊藩ニ所持有之候へ共本書引合せ見度存候處先年右本妙寺出府ニ而

後醍醐帝御笛等品々持來候處前文竟宴の御筆ハ持來り不申由若燒失ニも相成候哉又ハ尊藩ニ而御取入ニも相成候儀ニ候哉何レの道も右之有無執事へ御聞合せ申候様尙又

後醍醐帝御笛等今程如何相成候哉老父病中執筆六ヶ敷候ハ、小生ハ成共相伺候様ニと被申付候處如何之物ニ御座候哉乍御面倒御聞合せ被成下候様仕度奉願候尤右寫しハ弊藩ニ有之候付本書引合せ見度存意之よしニ御座候間右御品御借入ニ而御廻しニも相成候ハ、幸甚之至と奉存候前文之儀老父ハ相願候答ニ御座候處老父儀六月廿二日ハ俄ニ篤疾相受同廿六七日方ハ如何も危篤ニ相見精神不爽湯藥不下吶如何ともいたし方無之如此事四五日ニ御座候所兩寡君ニも殊之外配慮被致日々夜々使を以て良藥等賜り候得共更ニ效驗無之甚しきニ至り候てハ衆醫束手投じ候迄ニ候所天未棄老親候哉七月初ニ至り蘇息之姿ニて精神も少々つゝ相復し候様子ニ相見へ夫ハ順々快方ニ趣き此節ニ至り候而ハ座敷内位ハ手を添候得ハ漸々歩行も相成候様ニ至り候併至極大病之上六十六歳之老體之義急ニ本復ニハ相成兼候儀と奉存候右ニ付小生儀も日夜湯藥ニ侍し候迄ニて不暇外事前文之儀も八月末ニ被申付候處今日迄及遲延申候此書相連し候ハ、前文之義何卒御丹精奉願候當八月廿五日夜暴風雨當地大城を始め列藩屋敷等大破損川つきの場所へは水夥しく押あげ溺死人も數多のよし弊邸杯も餘程之大破損ニて潰家も有之候水戸表も同斷暴風雨ニて潰家七八百軒餘死人も數多樹

木抜け或ハ折れ候もの數萬本ニ御坐候天保巳年之大風雨ニ甲乙無之趣ニて御座候昨年ハ大震當年ハ大風雨實ニ此上如何成天災地妖有之も難計恐縮之至ニ奉存候貴地ハ如何御坐候哉七月廿三日南部大地震津浪之よし届出一覽仕候へき大阪ハ大雷之よし承及候

夷狄之禍日益々切迫之様子幕府ニ而も此度ハ至極御秘し被成候故委細ニ不相分候處此度ハ嘆夷も崎陽ニて何か不容易事申立候よしの處尙此上軍艦數艘ニて渡米願之筋長崎ニて申立取受不相成候ハ、伊豆下田へ廻り可申立同所ニても不取受候ハ、直ニ江戸海へ乗込申立可申夫ニても不相濟候ハ、日本より兵端を開くも同様の事ゆへ直ニ兵端を開き可申との申立のよし實ニ以不容易次第ニて御座候得共幕議大抵決し居候と相見至極無事ニ御坐候衰運とハ乍申扱々長嘆之事共ニ御座候先日崎陽より而嘆船舉動等ハ如何相伺度奉存候實地之様子此地へハ一切相分り不申候事ニ御坐候土岐丹波川路水野筑州岩瀬修理右四人崎陽へ嘆船渡來候ハ、一左右次第直ニ發足罷越候様筒井竹内下野守^{今一人}右ハ近海へ渡來候ハ、直に罷出應接候様被命候事ニ御坐候

種々相認度儀も相伺度儀も御坐候得共心緒萬端筆頭難盡前文之儀而已草略奉願候乍病中老父^{今一人}も宜敷申上候様くれノ、申付候儀ニ御座候追日向寒之節爲天下折角御自奮被爲成候様奉祈望候頓首再拜

十一月六日夜燈下

原田 八兵衛

長岡君執事

電覽後伏乞投火

十一月十一日幕府露國と協約を交換す

〔^{維新}日米外交の真相〕(ハリス) (日記)

十二月七日 (日曜日)

ボシエツト提督協約交換の爲め午前十一時を以て上陸せんとするや露艦は禮砲を發射して其行を盛んにし午後一時無事交換式を終るや露艦は更に廿一發の禮砲を放つて祝意を表し三本の檣樁には日米露の國旗を掲揚すること正午より日没に及び是れ實に日本の開國史に特筆すべき好記念日に非ずや

協約交換後提督と日本の委員等は沈没艦ヂヤナ號の大砲を置きたる現場に臨み森嚴なる儀式を以て之を日本政府に引渡し次で提督は日本委員を露艦に招待して祝宴を張り以て此日の一切の儀式を完了したり

十一月十六日水藩原田兵助答書を長岡監物に贈り府下の情况幕議の姑息等の事を通報す

〔小橋記録〕

芳翰謹誦仕候追日寒冷相増候處益々御清福被爲渡爲世道人心奉恭賀候拙老儀も先日申上候通り六月中より篤疾に纏り伏枕罷在候處此節追々快方以赴候得共未だ歩行も得とは相成兼申候尤此十四五日前より漸々庭杯を杖にすかり歩行仕候様相成申候來春にも相成候は、大概には快方相成候かと奉存候右故畢竟御疎濶に打過候事に御坐候何分不惡思召可被下候扱如貴論昨年來異船之取沙汰は更に無之候得共其實は却而切迫に相成候儀に可有之實に累卵之危に安し候事過憂至極に奉存候廟堂之儀も如何之御模様にも可有之哉も不相分候得共西洋流兵制御誘掖彌益々盛んに相見候交易も愈々御決定と相見過日右取調掛り出來候間愈以不容易右様神州之大禁を一朝廢毀致候上は紀綱も張り不申候半紀綱弛候得は士氣之不振は自然之道理に御座候愈々以醜虜の詐術に陥り國を誤候様之儀釀成候儀殘念至極に奉存候老寡君にも震災已來は一度も登營無之幕議如何之模様にも御座候半も一切相分り不申候いつれ一日之荷安を偷み姑息之策に出候事に可有之相察候扱又弊藩内情も追々御配慮被成下候處震災已來波瀾過激之所置之様にも可被思召候得共中々以情實左様の次第には無之委細は俾より先日内々津田氏迄吐露仕候儀も御座候よし故今程御承知と奉存候右以來は先づ平和に屬し候得共群小沈伏致し居且谷田部藤七郎儀亡命今以捕獲不相成何とそ一日も早く捕獲致度夫々探索仕候得共未だ探り

嘉永 六年

八六五

得不申候何分四國邊に潜匿之儀と奉存候

一 老寡君にも先日中より日々鷹を臂にして庭中逍遙身體をならし候ゆへ此節至極壯健に御坐候如貴論廟堂如此に候得は實に君子道消小人道長之勢に御坐候半越前の鈴木氏は忠良之人の由承り居候處震災后兩三度弊庭へも來訪被致候處拙老儀要務に罷在とう／＼寒暄を接候迄も無之空しく黄泉之客と相成候よし行々弊藩の力にも相成且は越藩の名望天下の御爲返す／＼もおしき事共に御座候拙老儀老體且は重病後氣力も昔には無之まして國家之大任を負ひ候所には無之候得共此上は孔明か所謂鞠躬盡瘁而後已候迄に御坐候

一 薩州の様子も近來如何成行候哉先は靜謐と相察候如教諭君公は英邁にて大志ある人之よし且國富み兵強殊に此度公邊へ御縁談御整此十一日に御引移に相成昨十五日御結納之よし愈々以盛大に相成候儀と奉存候何分此上天下世道之爲忠力を爲盡度祈り居候事に御坐候鮫島等爾後絶而書通も無之候得共定而壯健之義と奉存候

一 尾侯之御様子は如何に御坐候哉是又一同相分り不申候得共田宮杯は依然御用に相成候儀可有之列藩には伊豫之伊達侯安中之板倉豫州侯杯天下之御爲忠力を盡し候人に而弊藩一事に付而も一方盡力致候人に御坐候右之外にも可有之候得共承り及ひ不申候

一 弊藩にても去月廿七八日方より御守殿不一方御不例に御座候處當月に至り候ては至極之御大病 内實は此御右之儀に大切に及申候 付ても種々の浮説流言も有之甚以心配之事共に御座候大概此十八九日方廣めに相成廿四日方當地出棺にて水戸瑞龍山墓處へ送葬に相成候事に御坐候震災以來打續凶事而已心中御諒察可被成下候何も病床中執筆相成兼候に付以代筆前文拜復迄草略如此に御座候頓首謹言

十一月十六日夜認

原田成祐

再拜

長岡君執事

尙々會澤事御一封先日便りに差下候處儲に相達候儀に可有之候得共未だ返書は參り不申尙又先日申上候宗尊親王云々何分にも御周旋被成下候様奉希候乍末毫時下寒冷之節爲天下折角御自重被成候様奉存候草々

十一月廿三日薩藩鮫島正助書を長岡監物に贈り各地の状況を縷陳す

〔先哲遺翰〕(子爵米田家藏)

二月十四日御認之尊翰此節萩氏御送ニ相成謹而奉拜披候先以其御地御平安尊公様益々御勇健被遊御坐奉恐賀候次爰元無異儀小僕ニ茂碌々送光罷居候間尊慮安思召可被下候扱天下之勢日を追而衰落仕末何と成行可申哉近來之處水府杯之儀ハ一圓相聞得不申候定而老公彌増之御苦心歎々奉察候兩賢歿後引續越之鈴木氏ニも早碎ニ相成候由實ニ悲歎ニ沈候次第御坐候近來之西郷々も書音も不參當時殊之外取紛居候由ニ御坐候就而之廟堂之振合等も相知を不申候如何哉と案勞仕候決而相振ひ不申候事と存申候來陽之話晋東七拾艘之來船ニ而下田ハ一城を築申候之世説專ニ御座候彌其通ニ御座候哉琉球之先頃少々亂妨ニ及候趣も御坐候へ共漸取沈ニ相成候由其後暫之無事之様子ニ御座候譬之一時亂妨ニ及候共又多艘之來船相成候共將々無事ニ候共右位ニ相拘可申候儀ニ無之又可驚ニ茂無御坐候へ共只々可歎可悲之世上葉枝ニ走てケ様迄度々凶を示候而も徳を改申ニ至り不申候一天下之事皆一も根本相立不申候間連も今通居なりニ治候處ハ六ヶ敷被存申候有志之人ハ退之時ニ而却而障ニ相成候事多御座候されハとて決而事を捨て申ニ無御座只時を待候外無御座候尊藩君上公ニ茂當年之御參府中ニ而旁掛而御配慮奉察候弊藩ニも寡君來春下向之賦御坐候定而以前同様御親交被爲成候事ニ奉遙察候筑候ニ茂當八月五日御發駕ニ而九月十二日江戸御着ニ被相成翌々十四日直様弊邸に被相成御密話數刻ニ相及候由又其翌日寡君ニも彼邸へ被參終日御對話ニ相成候由右様ニ候へハ兼而相含候心事之益宜敷方ニ開立可申と存申候來陽共ハ下向之上東方之明無之候而ハ迎も人氣落果申候御紙表ニ而奉窺候得之尊藩ニも御振起り無之筋ニ而何事も御同然如何ニも根元を起立不申候而枝葉之小節ニ流を候而之殘念之至ニ御座候御互ニ太陽相昇之期を奉渴望候尙追便事情をも可奉申上尊答迄如此御坐候恐惶謹言

安政三年

八六七

十一月廿三日

鮫

島拜上

監物 様 御侍史

追啓奉申上迄も無御座候へ共寒中御座被遊被下度偏ニ奉祈候天縁相不盡奉拜調肝膽を開申候期相待居申候

態極密故別ニ相認御胸底ニ御認被下度奉申上候先比西郷方申遣候祕事之内ニ弊藩之儀兩賢同様武田氏其外に依頼仕候事ニ御坐候由然處彼藩森類及一變候後同様惡事を巧候者其不相止勢ニ而讃州等心外之儀ニ而此末若老公千歳之期ハ大變到來相違無御坐候右ニ付一橋公を西丸に建上候へハ大ニ回復可仕又憂も無之との事ニ而候へ共廟堂迎も承引六ヶ敷又此儀之外ニ人ありて事を成不申候而者老公自己ニ被爲出來候譯ニ無之候間深く西に被致依頼候由ニ御坐候西所存も御存通私同様兩太夫に身命之限相歎き來候事故於爰之又天下之爲道義之上ニ相掛身命を捨候而相働不申候而相濟不申候儀故一盃ニ申出候處寡君ニも十分と請込ニ相成候而其方ニ配慮有之候事と被存候左候へハ天下之大事成就可仕候併夫も何と賦姦人之災も相起廟堂一和之程合も無覺束候へ共如何ニも有道ニ就而事を成申候へハ未及變亂候而も本則を不失治安意之道理ニ而決而後來を慮候も却而事過候へハ術ニ相成可申譯合ニ而只々右之處神明ニ祈罷在候尤外ニ承合候へハ憶德院様御在世中御三家之御連子方被召集候而其機を御洞察被遊候而餘多之中ニ翌日命令相成一橋に御定ニ相成候由御坐候まかれハ若哉之折之爲御撰置相成候儀ハ相違無御座候左候へハ誰らいな可申哉併尾紀兩家如何思召有御座哉尾州之決而御他心有御座間敷一天下之見紀賦と被存可申候夫之水藩も寡君之見も右ニ可有之存有之候半右之四月ハ五月初方ニ掛候而之事ニ御坐候其後之處一圓西郷方書狀も參不申候西も其時分前ハ極密君前に被召呼時々一盃を盡居申候御同悅奉希候小弟事も時々難ニ逢あやしき場茂御坐候へ共上ニ明有之候故相逃申候西右式ニ候へハ向素志も通り可申前條共被御成就相成候へハ老公十分之思召も可被爲附何とそ根本を押候而正太明白之御善政被爲附廟堂人臣之職を被盡候而皇國大平之休明有之度奉念事ニ而御座候弊藩ニも當月十一日姫君引越相成候中々矢財等莫大之

様子ニ而何事も暫之打置相成是而已ニ被取掛候由御座候尙外ニ奉申上度儀當時日夜心力を盡し居候儀共御座候得共未此筋を申上ニ至り不申尙追々心事可奉申上候再拜

十一月廿三日

鮫

島拜

監物 様

二日前文奉申上迄も無御座候へ共御心中迄可被成下候大念ハ是方報申候故奉伏願候

十二月十六日藩主齊護左近衛權中將に任せらる

〔安政三年自筆御用狀扣〕

以別紙得御意申候今度 御任官被爲蒙仰候 公邊御趣意之御書取御用番様より御渡ニ相成候由右者御用人中ニ茂拜見者不被 仰付御同席迄拜見被 仰付方ニ而右之御寫被遊 御渡候付拜見仕差廻候間御席中限御拜見候様存候以上

十二月十九日

大 木 舍 人

御 家 老
御 中 老

張 札

寫

細 川 越 中 守 仁
細 川 越 中 守

其方儀此上昇進之御沙汰ニ者難被及筋ニ候得共動向年來精勤其上相模國御備場御用引請被 仰付防禦筋之儀萬端御委任被成候儀ニ付別段之 思召を以今般中將被 仰付候儀と被相心得防禦筋之儀彌入精相動候様可被致候 思召有之候ニ付左近衛權中將被仰付之旨

十二月廿三日閣老阿部正弘は本藩相州預所石壹兩の件に關する願書を却下す

安 政 三 年

八六九

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候相州御預所石壹兩等之儀ニ付而猶又御願別紙寫之通先月廿四日被差出置候處去ル廿三日阿部伊勢守様より御留守居御呼出ニ而當四月被差出置候御願書共難相整旨ニ而御下ケ相成申候此段爲可申達如是御座候以上

十二月廿八日

木村次郎左衛門
溝口藏人

御家老充

十二月廿七日日本藩管轄地増加の申請書を更に幕府に提出す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

阿部伊勢守様ニ

越中守相模國御備場御用被仰付同國並武藏國之内ニ而御預所被仰付置候處村高少人夫引足不申段々難澁之次第御坐候付而今壹萬石程増御預所被仰付被下候様當七月委細奉願置候得共未御沙汰筋無御座候右ハ第一御軍備筋ニ相係候儀ニ付陣屋詰之者共より頻ニ歎訴仕申候若當時之儘ニ而自然之期ニ至人夫依不足防禦筋之差支ニ相成候而ハ以之外之儀ニ付何分ニ茂奉願置候通増御預所之儀急ニ御沙汰被成下候様幾重ニ茂奉希候此段申上候様申付候以上（本文申請に依り翌年七月六日を以て管轄地増加せられたり）

細川越中守家來

清田新兵衛

十二月廿七日

安政四年正月某日幕府は老中連署の書翰を米使ハリスに贈り下田奉行に全權を附與して談判せしむべき旨を通告す

〔神庫文書入印密書輯録四百五十印ノ内〕

覺

下田在立之亞墨利加官吏より老中に面會之儀書翰を以申立候趣ハ一ト先下田奉行に引請取扱候様相達返翰差出候儀ニ候得共此上申立之次第ニ寄候而者當地に不被召呼候ハ、相成間敷哉ニ候右之手筈ニ凡取極候方可然就之官吏之儀ハ身柄宜敷者之由ニ候右取扱方之儀ハ是迄和蘭甲比丹之振合ニハ相成間敷候間諸般之禮節ハ勿論御扱旅宿應接場所共外共万端無手扱様廉々取調早々勘辨致し可被申聞候事

亞墨利加官吏之書翰

貴國日本之事務ニ關係せる重太之事件を自分共に直ニ可申立旨貴國大統領有命之趣其外之件々ニ而も去年九月中之書翰並十二月ニ至猶申立候書面夫々熟覽せしむる然處下田箱館開港以來兩國之諸件を辨せんため兩所ニ奉行差置委任せしむる上之假令重太之事といへとも申立候事共有ラハ其地奉行ニ被申聞ハ則自分共に直ニ申立候も同様なれハ隔意なく奉行に談話有へし此趣告知せしむる者也

安政四年巳正月

堀田備中守花押
阿部伊勢守花押
牧野備前守花押
久世大和守花押
内藤紀伊守花押

〔全書〕

下田奉行に相達候書取

安政四年

亞墨利加官吏に返翰差遣候間被相違右返翰之趣を以心力を盡し穩當ニ致説得候様可被取計候

一 欠乏品三割之冥加差免候儀先當分一割ニ致置候様可被取計候

一 官吏居所之勤番取之引拂切之積尤官吏之居所限り之積兼而設置候様可被致因而不取締無之様精々可被心得候

一 官吏共金銀錢引替相渡候儀却而少分之儀ハ相渡其餘ハ札ニ而相渡候様可被取計候

一 七里經道程之差別強而不致論判凡天城山邊に相越候共可差障人家も無之事故奉行手心ニ而差略致し置候様可被取計候

一 諸入用御出方相成候儀事實無據分ハ一兩年之間手限ニ而御任せ之儀も忽並少分之儀之不及伺取計不苦候

一 遊歩無據止宿致し候節ハ寺院ニ限り可被差免寺之儀奉行限り承届置候様可被致候

一 諸事伺ニ不及奉行に御任せ不相成候而之機會も失ひ亦權威も無之取扱向差支候との趣下田限り之儀ハ奉行之權ニ可有

之候間向後ハ御任せ置ニ相成候間精々入念御國躰ニ不拘御爲宜様可被取計候

三月廿二日日本藩警備地沿海防禦に要する人夫不足を告るを以て急に管轄地を増加せられんことを更に幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

阿部伊勢守様ニ

越中守相模國御備場御用被仰付同國並武藏國之内ニ而御預所被仰付置候所村高少人夫引足不中段々難澁之次第御坐候付今壹萬石程増御預處被仰付被下候様去七月委細奉願置候右ハ第一御軍備筋ニ相係候儀ニ付陣屋詰之者共別而落着兼頻ニ歎訴仕候間何卒急ニ御評議被成下願之通被仰付被下候ハ、家來共村方一同相鼓彌以出精仕越中守國許に發足仕り候ニ甚相安候譯彼是を以何分發足前迄ニ者御沙汰筋之儀重疊奉願候此段申上候様申付候以上（本文申請は既に再三に及七たり）

細川越中守家來

三月廿二日

清田新兵衛

四月五日米國總領事ハリス其本國政府に對する報告書を作り本邦着任以來幕吏と交渉努力の結果を列擧す

〔（新）日米外交の真相〕（ハリス日記）

四月二十八日（火曜日）

總領事としての報告書を製作するか爲めに終日多忙を極めしが總て彪然たる文書を完成したり余は此報告書が本國政府の満足を得べきを確信す今余が着任以來努力したる結果を列擧すれば左の如し

一、今は通貨問題に關して屢日本政府と力争しペルリ提督が閉却したる不當の換算歩合を改良し従前米貨一弗に對し日貨一步ふなりしを約三步に増額せしめたり

二、余は米國艦船の爲めに長崎港を開放せしめ必要の物資を同港に於て供給せらるべきを規定したり

三、日本在留の米人にして犯罪行為ありし者は米國總領事に於て之を審問するの權利を獲得したり

四、米國艦船日本沿岸に於て遭難し必要の物資を買ひ入るべき貨幣を有せざる時は積載せる貨物を以て之が代償と爲すことを約したり

以上は余が日本官吏と談判を試みて成功したる箇條あるが此外米人の爲めに專管居留地を設定するの件及び領事の管轄權を擴張するの件は未だ協定を経ざること既記の如し

四月廿一日藩主齊護江戸を發して歸國の途に就く

〔本藩年表〕

大守様四月廿一日江戸御發駕五月廿六日熊本御着

安政四年

八七三

五月六日閣老堀田正篤は下田奉行に對し米國商人在住拒絶の件米國官吏並に其從者に限り日用品直買許可の件及び米人の旅行區域制限のことにつき心力を盡して談判を遂ぐべき旨を訓令す

〔神庫文書 人印 密書輯録 四百五十印ノ内〕

已五月六日堀田備中守様を下田奉行に御達書

下田箱館に亞國商人可引移との儀ハ全條約ニも無之廉ニ而既ニ和蘭ニ而も館内ニ商ひ致し候もの差置候儀ハ無之候間何ニも條約ニケ條之文意ニ基き辯論を盡し相斷候様可被致候

一官吏並隨從之者ニ限り通用金銀錢引替相渡置直買御免之儀ハ一時來船之者と違ひ在住致し候上ハ日用之品ニ直買之儀ハ無據筋ニ而官吏ニ限り日用之品調候丈ハ金銀錢引替相渡候儀之伺之通相心得隨從之者共而已ニ而ハ詞廣く追々辭權ニ致可申哉も難計候間官吏並同人隨從下田住居之者ニ限り御差免之積且日用外之品迄も買込置渡來船に差送り候儀無之様取計金高人數等も厚勘辨を加不取締を生し不申際限ニ不至様規則を定置候様可被致候

一官吏之下田箱館共七里五里之境並不拘との儀全其日遊歩迄之儀ニ候ハ、たとひ境外に出候とも致方無之候得共止宿茂差免候上之御用中何地ニ不限自在ニ旅行致し際限も無之不容易筋ニ而七里外に出候儀不相成趣心力を盡し幾應も穩ニ申論候様可致候尤官吏應接之節申立候難破船有之候節七里外ハ難相越様ニてハ差支も可有之候間右等非常之節之時ニ臨取締致し應變之取計も有之候共不苦候間右之趣を談判致候様可被心得候

右之趣相心得亞國商人引移候儀七里五里之境辨相守候儀何ニ而も不容易筋ニ候處官吏必至之情願ニ相聞候間一通ニ而ハ承諾も致間敷候得共國家之御爲心力を盡し何ニも條約面を押相斷候趣相貫候様精々談判可被致候事

五月廿五日横井平四郎書を柳川藩池邊藤左衛門に贈り越藩より招聘の件につき示す所あり

〔小楠遺稿〕〔横井平四郎柳藩池邊藤左衛門へ與ふる書〕

一書拜呈仕候先以頃日者御來臨被成下久振に拜話を得大慶至極に奉存候御歸り御氣削被成と奉存候扱彼一條種々思量仕候處さして異存も無御座候御咄合通りに先安着仕候村田歸り候へ者定て江戸之様に参り候事に被存候左候へ者直様御懸合にも可相成哉又は秋にも至り可申哉夫はとふとも支へ不申唯御懸合之仕方方家老に直に被仰聞候者餘りをつこふ歟と被存先越之御家老より此方家老に直に懸合相談いたし候義當然と奉存候扱又越前守様より寡君に御直書に而被仰越候事可宜奉存候左候へ者家老より御直書並に越前御家老懸合之趣申遺候熊本に而詮議相成候筋に参り可申其先きは又其先之治法にて先右之通之御懸合當然と奉存候村田歸りに罷出可申候間此段得斗御咄合被成度奉存候(略)

五月廿五日

五月廿六日下田奉行井上信濃守直中村出羽守等米使ハリスに迫られ規定書に調印す

〔夷事輯録〕

安政四年六月長崎港に亞墨利加船入津御免許規定書

帝國日本ニ於て亞墨利加合衆國人民之交を猶所置せん爲ニ全權下田奉行井上信濃守中村出羽守と合衆國之コンシユルセネラール、エキセルレンシー、トウセント、ハルリスとにて各政府之全權を持て可否評議之約定する條左之如し

第一ケ條 日本國肥前長崎之港を亞墨利加船の爲開き其地ニ於て其船の破損を繕ひ薪水食料或ハ欠乏之品々給し石炭等らハ又夫をも渡スヘシ

第二ケ條 下田並箱館之港ニ來り亞墨利加船必用之品日本ニ於て得らたきを辨せん爲ニ亞墨利加士人を右の兩港ニ置且合衆國之下官吏を箱館の港ニ置事を免許す

但此ケ條之日本安政五年六月中旬合衆國千八百五十八年七月四日ヲ施すヘシ

第三ケ條 亞墨利加人持參ル處の貨幣及計算する時之日本金壹歩或は銀壹歩を日本分銅の正しきを以て金ハ金銀ハ銀

之秤を以亞墨利加幣の量目を以定メ然して後吹替入費の爲メ六歩の餘分を日本に渡スルし

第四ヶ條 日本人亞墨利加ニ對し法を犯す時ハ日本の法度を以日本商人罰し亞墨利加人日本人ニ對し法を犯す時ハ亞墨利加の法度を以コンシユル罰すルし

第五ヶ條 長崎下田箱館湊ニ於て亞墨利加船の破損を繕ひ又買ふ處の諸欠乏品代ハ金或ハ銀の貨幣を以て償ふへし若

金銀共ニ所持セざる時ハ品物を用て辨すへし

第六ヶ條 合衆國のエキセルレンシー、コンシユル、セネラールは七里堺外ニ出るべき權ある事を日本政府ニ於て辨せ

り然りとてハ共雜船等切迫の場合ニ非まハ其權を用る共延する事を奉行望まり此ニ於てコンシユル、セネ

ラール承諾せり

第七ヶ條 商人ハ品物を直買ニモる事ハエキセルレンシー、コンシユル、セネラール若くは館内ニある者ニ限り差免

し尤用辨の爲メ銀或は銅鉄を渡すへし

第八ヶ條 下田奉行はイギリス語を知らず合衆國のエキセルレンシー、コンシユルセネラールは日本語を知らず故ニ

眞儀ハ條々の蘭語譯文を用るへし

第九ヶ條 前のヶ條之内第二ヶ條ハ記す處の日より其餘ハ各約定せる日より行ふへし

右之條々日本安政巳年五月廿六日亞墨利加合衆國千八百五十七年六月十七日下田御用所ニ於て兩國之全權調印せしむ

るもの也

井 上 信 濃 守
中 村 出 羽 守

〔維新日米外交の真相〕 (ハリス)

〔秘史〕

六月十七日 (水曜日)

過般來奉行との間に協定せられたる條項を外交文書に作成して本日無事相互の調印を了したり此際最も困難を感じたるは日本通譯官の蘭語知識未熟なるか爲めに文書の蘭譯に煩雜なる論議を生じた事ありき抑も彼等の蘭語は單に來航せる蘭國船長乃至商人等より不完全なる傳習を受けたるに過ぎずして其用語は少くも二百五十年前の蘭語に限られ近世制定せられたる國際公法上の術語は一切之を知らず故にフュースケン氏の作成せる蘭譯文書を見るも其意義を解する能はず猜疑の念従つて起れるが如く遂に日本の原文を一字毎に蘭譯して其順序を日本文のまゝに排列したり然も日蘭文法の差異を無視したる結果何等の意義を爲さざる蘭譯文を作成するに至れり余は此誤解を釋くに非常の苦心を要したりき

〔福地源一郎著 幕府衰亡論〕

下田奉行井上信濃守中村出羽守は安政四年五月二十六日を以て亞國官吏ハリスに迫られて規定書八箇條に調印したり此規定書は前年の條約に對しては更に一步を進め即ち安政五年調印の現行條約の爲に實に其權榮を成せしものにして彼の他日の一弊源たりし金銀貨量目交換の件及び今日までも我が外交上の大問題たる治外法權の件も此約を以て議定せられたり而して此規定書は同年六月四日を以て閣老より布告したるに由て外交の事は益々世論を喚起して幕閣を論撃するの材料とはふりにき尤も其頃の論趣は外夷は禮義を知らず利慾にのみ着目して我神州を覬覦する者あり須く之を拒絶すべし決して交際を通す可からざるふりと云へる單純なる理論にて眞正に利害得失を識るの説には非ざりしと雖も其論勢を以て政府の當路に障礙を與へたるの實に於ては敢て今日に讓る所ふかりき

閏五月二日米使ハリス兩館駐紮米國貿易事務官イー、ライス着任の報に接す

〔維新日米外交の真相〕 (ハリス)

〔秘史〕

六月二十三日 (火曜日)

安 政 四 年

本日突然函館駐紮米國貿易事務官イー、ライス氏の書信に接したり氏は今回上記の任務を受けて函館に着任し米國々旗を掲揚したる旨を報し次に二隻の米國商船氏の着任と前後して香港より函館に入港し荷主ルードルフ氏は同所に於て貿易を試みんとし且つル氏は余に對して若干の贈品を持參せるか故に不日之を下田に轉送すべしと報じ來れり
閏五月十一日幕府は築地講武所内に軍艦教授所を設け追て蘭國寄贈の汽船を以て練習を始めんとする旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕

阿部様御渡

大目付に

海軍御取立ニ付而者今般築地講武所御構内おゐて御軍艦教授所御開阿蘭陀より獻上之蒸氣船ニ而操練相始候間御旗木御家人並伴厄介等ニ至迄有志之輩罷出眞實ニ修行可被致候委細之儀ハ御目付永井玄蕃頭に可被承合候且又萬石以上已下陪臣之儀も主人々々格別見込之者之稽古御差許可相成候間是又永井玄蕃頭に申立候様可被致候
右之趣向々に可被相觸候

閏五月十四日幕府勘定奉行松平河内守直の用人西倉務は武州多摩郡の内一萬五千石餘の増預地評決の由を松井典禮に報じ且つ我藩士の新錢座調練所入門を懇憚す

〔相模國御備場御用一件〕

御勘定奉行松平河内守様御用人西倉敷より松井典禮に之内狀

一輪拜呈仕候追日向暑罷成候得共被爲捕倍御機嫌能成御起居奉恐賀候扱此程之御道中無御異御着被爲在候義と奉恐悅候陳之追々御内咄御座候一條之内御預増愈評決多摩郡之内ニ而一萬五千石餘御預相成候趣評義濟近達も相成候付多

分當月中ニハ御下知ニ相成候義と奉存候且御袂宮一條も其手寄相求當時調之模様御願意相立候有無一刻も早く相濟候様其筋々に申込少々ニ而も模様相譯り候ハ、私迄爲知候様約請仕置候參動懸り御右筆杯ハ御願通り候敷之尊御座候間無油斷筋々内密責付置候模様相譯り次第速ニ可奉申上候

一御請持御備場御据付之御筒古物之和流炮ニ而御用途も無覺束趣御内咄ニ御座候事故其段中間候處御書面を以御中間御座候ハ、早速御引替取扱可申旨被申聞就夫御家臣衆西洋法操練御稽古厚薄被相尋候末新錢坐調練所ハ時々御老中様方海防役々見置見分等も有之候事故一隊ニ而茂御門入御差出御座候ハ御家之御武備厚薄茂相貫キ自然と御警衛筋御内願之儀夫是談し方都合も宜趣野儀に内咄被申候間其段吉田殿に御内咄仕候趣御承知茂被爲在候上得と御勘考可被成下候何茂御着後御左右相親旁用事取束荒々申上候書外追々可奉申上候恐々不宣

壬五月十四日

西倉務

松井典禮様

尊下

猶以時候折角被爲厭候様奉存候且御一覽之儀ハ御燒捨可被下候以上

閏五月十五日在府本藩老臣溝口藏人書を副奉行藤本津志馬に與へて池部啓太の出府を促し且つ同人に對する高島喜平の讃辭を傳ふ

〔相州御備場一件〕

内狀を以申進候彌御無異可爲御旅行珍重存候御發足後一日茂雨無之時候ニ之無類之御仕合究而御早着と相考申候左候へ之段々御託申置候御用筋早々御取出被是御心配可有之何様得斗被仰談無波風相調候様御妙策禱申候右之内池部啓太列被差登之一件之委細御咄合申置候通候處其後海軍操練之儀 公邊被仰出且河内守様御内沙汰等追加之條茂有

安政四年

八七九

之吉田平之助が別紙内意之書付相違候處土豪御聞懸之事ニ付御手元迄差遣候條御同僚中之御參談を以御持出致急増候様御心配頼入候昨日之不斗いたし候事ニ而高島喜平に致出會色々雜話之内啓太事ニ及同人が追々文通いたし既ニ去秋當春あたり之罷登候含之由申來候付大ニ相樂相待候へとも今以其儀無之何程之儀ニ可有之哉申候付同人儀國許ニ而指南方ニ寄頼着いたし且之已前御手元が御傳授を受候も當時ニ至候而之古法之様ニ相成ふまゝ罷越候而も面目失候様ニ之有之間敷哉其恐茂有之候申候處且以左様之譯ニ無之罷越さへいたし候へハ直様咄合はる様ニも相成可申第一西洋法彈道之一條ニおろて之啓太儀日本ニ比類無之屹々公邊之御爲ニ相成可申且又模様次第ニ此節御取起ニ相成候海軍操練之方ニ御差出茂可然旁何卒罷登候條有之度之儀之直々咄茂承り其上公義之御簡御居替之時ニ茂相成候へハ御筒之大小ニ因差寄裝變之分量が相分り不申如何様之儀致出來候も難計彼是此元之時情之御熟知之事ニ付其處を以御取扱有之度候尤此元ニ而之見込ハ勿論啓太登人ニ而之逆茂六ヶ敷同人門弟之内庄村助右衛門庄林曾太郎何ぞ一人外ニ海軍操練之方ニ之太田黒惟和太長崎ニ而蒸氣船ニも追々乗込居候付是を被召仕候而之何程ニ可有之哉其餘可然御工面茂有之候ハ、如何様共不苦何様都合能御咄合候様存候已上

閏五月十五日

溝口藏人

藤本津志馬様

猶々別紙平之助書付之内ニ之品ニより忌諱ニ觸候向茂可有之哉御見込次第ニ之御手元限ニて被差置候方ニも可有之兎角相調候儀事一之事ニ候以上(吉田平之助内意之覺は之を略す)

閏五月十七日長岡監物書を水藩原田八兵衛に贈り薩の西郷越の村田の來訪によりて天下の大勢水越兩藩の近況を知るを得たるを告げ水藩の安泰を祈り越藩鈴木主税の遠逝を哀み佐賀藩主の人物を品騰し尾越薩三藩主の倚頼すべきをのべ天下の興廢一に西城の決定に係るを以て尾越の忠誠をこゝに盡さんことを懇望し且つ附するに矢護山鹿狩の圖を以てし其主齊昭の覽に供せん

ことを請ふ

〔坂本文書〕(坂本左近)

一輪拜呈仕候愈御安健敬賀仕候野生劣々消光罷在御放慮可被下候御老父様御異例其後如何御入被成候哉爲天下深く奉案勞候事ニ御座候何歟御配慮之程奉察候先月中旬薩之西郷歸郷之由ニ而弊藩罷通拙宅に立寄暫話承申候大概天下之光景且尊藩之御事情承知只々長大息之事而已御座候併尊藩之御儀ハ最早谷田邊兄弟も疾く御仕置相濟諸事泰卦ニ趣キ候儀と奉察候今日ニ至而天下之事ハ不可云偏ニ尊藩之泰卦を神明ニ祈迄之事ニ御座候越前之村田巳三郎西國遊歴仕是又先月拙宅に尋申候間電話仕候彼藩ハ方今天下第一之順境ニ而上一致治教日進之勢と相聞申候扱も可惜ハ鈴木ニ而御座候才力等有之者ハ外も可有之候へ共鈴木程事躰ニ達たる熟練之士ハ有之間敷兩田君ニ次で之此人之遠逝天下之不幸と奉存候尾州も益御賢明之噂相聞田宮も不相變御用ヒニ相成候由今日天下之大藩ニ而可頼ハ右之二藩ニ薩と合せ只三藩之外ハ有御座間敷候肥前頼英明之君ニ候得共一國外寇之筋ニ力を盡され候迄ニ候天下ニ忠誠之實薄相見殘念至極ニ御座候何様神州之衰運ハ兎角と雖申候へ共御親藩ニ尾越之賢君被爲在西國第一之大藩ニ薩侯之如御座被成候へハ又何と心強も被思候事ニ而此上稟祈仕候處ハ西城之御議定ニ御座候此一條ハ尊藩ニハ彼是と可申上筋ニ無之先日西郷村田ニも右之儀而已を話合申候儀ニ御座候外夷の驕傲も不足怖士氣之不振も不足憂西城之根本其君を得と不得とニ有之天下の興廢此一舉ニ係り候間御親藩之尾越此處ニ御忠誠を不被盡してハ難相濟餘ハ皆枝葉之事ニ而論するニ足らず然共此義ハ誠ニ難事ニて一朝一夕之儀ニ無之此處ニ力を盡し候人ハ實ニ忠誠日月を貫き思ハ風雲變態之内ニ入と申程ニ無之而ハ必事を誤可申候尾ニハ田宮右申候越ニ鈴木を失候義吳々遺憾之事共ニ御座候

直ニ御投火

一夷賊之模様如何ニ候哉當年ハ未々長崎も穩靜ニ而何之取沙汰も不承下田箱館如何哉何様東國ハ如何ニ候哉西國の形勢

ニ而ハ逐日太平を唱愈以武備廢弛ニ至可申不堪杞憂候

一老君上益御勇健ニ被爲入候御模様追々具サニ被仰下誠以爲天下恐悅無申計候乍恐愈御自重南山之壽を被爲保候様奉祈候今日ニ至候而ハ有志之者も眼識無之輩ハ兎角老君上を奉疑候哉ニも相聞盲人而已之世界不堪切齒候相成儀ニ候ハ今一度東行宣旨を得心事を盡し積鬱を散度候へ共最早其期無之紙上ニ心情を述んとまれハ文筆ニ拙く獨り西海之てニ慷慨忠憤むふしく日月を送候胸中御察可被下候

一弊藩之士元田傳之允と申者作之詩會澤君に御目ニ懸置申候まきりニ同人も御返翰相待居申候御老翁之儀強而ハ願兼候へ共御序ニ右之次第宜敷奉願候
得貴意度儀ハ多端ニ候へ共先ハ御安否迄相伺度如此ニ御座候爲天下國家何そ心得ニ可相成筋御心付之節も御座候ハ、御示教被下候様偏ニ希申候頓首謹言

後五月十七日

長岡再拜

原田兄

猶々當年ハ春以來雨續きニ而御座候處淋雨中ニ至却而雨少く田植等難儀仕候程ニ御座候甚不順之季候可恐事ニ御座候爲世道御自愛專一ニ奉存候

原田氏註記

安政丁巳閏五月所發六月晦夜到着白杵彦作齋來ル七月二日老公へ入御覽八日御下ニ相成矢ゴ山狩ノ圖ニ枚記事一老公御手許御留

〔田尻文書〕(田尻佐氏所贈)

別啓先便略得貴意置候通り追々御懇命を蒙候ニ付而恐多事ニ御座候へ共御禮之あるしに奉獻度品有之此節御手元迄差出候筈ニ御座候處少し間違之儀有之今度迄ハ差出申候右ハ外之品ニも無之定而御案内ニも可有御座菊池家之千本鐘

と申物今ニ弊藩ニハ段々残り居申候短刀ニ用候而至極宜ク名家之遺物ニ而御座候間是を献上之含ニ居後便迄ニハ差出申候間宜敷御取成奉願候擬又當四月上旬弊藩城下之東北ニ當り矢護山と申深山御座候城下ハ八里と申候此處ニ騎馬之狩を催野生先達ニ而出陣申候其節之圖を畫工ニ申付認サセ申候を差出申候不苦候ハ、被入尊覽被下候ハ、別而難有奉存候右狩之記を家來久野勘太郎と申者認申候文面茂不都東ニ候へ共是ハ不差出候而ハ模様分兼候間御手元迄差出申候右之記ハ尊覽ニ入られ候儀之恐多候間書面之趣を以委しく被仰上可被下候圖面ニ鹿數多出候様ニ相見候へ共騎馬射手ニハ一ツ出申候夫を所々にて射申候處を認申候間幾らしらも出候様ニ相見申候其所ハ左様御含可被下候將亦昨年御老父様より御國産之佳紙御惠投被成下別而、御品柄奉深謝候其後及貴答候節殊之外取紛候而右御禮失念仕候誠ニ失敬之至御仁恕可被下候此節右御禮且御老親様御見舞之あるし迄ニ甚輕微之至ニ候得共國産之品ニ御座候間進呈仕候御老父様ハ御病中相憐り態サト書翰拜呈不仕候間尊兄より吳々宜敷希申候不具

同時

長岡

原田君

尙々竹田君安島君杯未得拜晤候得共既得拜顔たる心地仕まきりニ御ゆるしく存やり候事ニ御座候御序ニ宜奉願候西郷歸郷之折ハ竹田君より御書通も可被下御尊も御座候之處西郷發足前ニ竹田君ハ不得拜顔よしニ而貴翰も持參不致との事ニ而甚残念ニ存申候此段も宜敷奉願候以上

上封

原田八兵衛様

長岡監物

(原田明善書添)

安政丁巳閏五月所發六月晦夜到白杵彦作齋來 七月二日老公へ呈覽八日御下ケ 矢護山鹿狩圖ニ枚同記一綴

安政四年

老公御手元へ御留メニナル

明 善識

閏五月廿二日高島喜平書を本藩吏員大岩又左衛門に贈り幕府の西洋砲術獎勵の状況を報じ池部啓太の出府を促す〔相州御備場一件〕

御内意之覺

一私儀砲術稽古池部啓太門人ニ而御座候手續より御當地ニ而之高島喜平に入門仕御用之透々稽古ニ罷越居申候處當時之御國製造之雷擊銃右同人より拜領一件ニ付而茂頻々罷越申候儀ニ御座候處同人兼而御國風を奉慕候人物ニ而此節別帝之通中越候御國政ニ係り候儀ニ付容易ニ可申上筋ニ無御座候得共折角申越候儀を其儘ニ差置候儀茂殘念之儀ニ御座候間御差支茂不被爲在御座候ハ、御案老衆に御差出被下候儀之被爲叶間敷哉奉願候以上

閏五月

大岩 又 左衛門

原田 康 藏 様

愈御萬福并舞仕候頃日者御來訪被成下寛々拜晤之積ニ御座候處他出中遺憾至極ニ奉存候然者先日相願候後又々十挺拜領いゝし度段申出候處御登せ込ニ相成居候ハ、早々御渡被下候御手筈如何ニ御座候哉御模様承知仕度御國製も追々結構ニ出来且廉ニも相當候ニ付其筋ニも追々吹聴も仕置候儀ニ御座候間先達も申上候通御付銃ニ御仕立之方可然公邊ニ而も御付で専ら御用ニ相成候儀ニ而是も議論相決候上之儀ニ而此譯拜接可申上候右ニ付而者尊國追々御取聞ニ之相成居候様子ニ者相伺候得共 公邊之如ク一致之御開ケとも不奉察候御序愚意申述候儀も如何ニ御座候へとも和蘭並米利堅其他ロシヤ等本ととも色々申上候筋茂有之候哉別而和蘭之儀ハ御國恩を蒙り居候儀ニ而國家之御爲ニハ種々獻白仕候儀も可有之由是又初度ハ迂遠之儀を申上候様ニ御思召上候得とも追々其微も有之候ニ付而ハ西洋砲術專ら御世話有之候儀も一朝一夕之儀ニ之無之哉と被存候事ニ御座候公邊ニ御仕法聊之御變革も天下盛衰ニも相抱り候儀ニ付時の流行

位之事ニ而武備之儀を聊も御改被成候儀ハ無之事ニ御座候處公邊ニも數万之御人才武備得失等之儀ニ付さまで御暗キ御方而已有之譯ニも無之異國事迄御探索御聞繕等之儀も有之候末御警衛筋者専ら御世話も有之候儀ニ而是又不容易御筋ノ有之御決定相成候衆應議相決御明斷之儀と奉存候此儀之中上候迄も無之深ク御察有之度奉存候御心得ニ可相成候間近來の模様荒々左ニ申上候無用之長文ニ相成候へとも是亦國家之爲と存付候間申上候事ニ御座候愚老申述候儀御疑も有之儀ニ候ハ、御留守居を以御尋被成候ハ、晴然と相分り候儀ニ御座候間尊大夫ニも被仰上御國之儀右ニ准し候様有之度心付候儀ニ御座候

- 一講武所御開已來西洋砲專ら御世話ニ而専ら修行被仰付銃藥とも被下置一同ニハ莫太之御失費ニ御座候
- 一新御番と申候之御旗本方壹組廿人計ツ、八組有之由之處當勤之勿論次男末子厄介ニ至迄講武所ニ而稽古可致尤九十日之内ニ稽古仕上り候様被仰渡稽古場別段ニ引分ケ稽古被仰付候處御達之通熟達ニ相成候儀ニ御座候
- 一引續御書院番御小姓是又同様被仰渡御承知之通番頭ふとハ御旗本中ニも御大身ニ御座候處大番頭とも稽古方被仰付候而是迄御學無之御方も有之候處此節ニ而ハ司令役等専ら御稽古右之執銃之儀ハ勿論之事ニ御座候兩御番ニ而ハ二千石以上御旗本ニ而御書院之付與力同心之勿論之儀ニ御座候
- 一御勘定方之筋御祐筆之筋等ハ是迄砲術等ニ携候向更ニ無之由之處いつとも西洋砲心掛候様被仰付御用際皆々修行有之候儀ニ御座候其他末々迄砲術稽古被仰付候
- 一鎌倉並徳丸原火矢打ハ年々之儀ニ而御入用も出候間打方被仰付置候儀ニ御座候處大矢打等ハ誠ニ無用之御評決ニ候哉御差止ニ相成申候
- 一御旗本方御番人ニ付而ハ武術御見分有之候儀御承知之通ニ御座候昨今被仰渡候ニハ火繩打鉄砲角前之御見分無之西洋砲打方いゝし候者而已御見分被成候段被仰出候
- 一是迄御貯之大炮年々井上家ニ而御鑄造ニ相成來候處御差止ニ相成申候

一大森御備付之和流諸流之大炮有之御貯大炮も同様之儀ニ御座候然ル處去冬被仰渡和法之大炮悉ク不便ニ有之御用ニも難相立候間御貯大炮も御鑄直し諸向御渡大炮も西洋製炮之通鑄直し可申段被仰渡櫻之馬場之儀も永式大小炮製造場ニ被仰付候右様被仰渡候儀ニも御老若様方御自身大炮玉製とも御打方御熟練之上右様被仰付候事ニ御座候凡右様銃炮之得失も御取糺之上被仰渡候儀ニ御座候御軍制御革改之儀被仰渡夫々御人撰ニ而御取調も有之居候處御大造之儀ニ而急速被仰出候儀ニも至ル間敷候へとも上御旗本より末々ニ至迄西洋法銃陣等御用ヒ稽古被仰付候儀ニ候得者定而御趣意も可有之哉と推察仕候

一兵法之儀ニおのては愚論も有之候事ニ御座候只本邦之古法而已を固守いふし候儀小兒之了簡之如キ事ニ候いらも日本之愚を他ニまらせ候様相成ル事ニ而汗顔申候事ニ御座候此儀ニ之色々譯合も有之事ニ御座候追而可申上候

一池部氏昨秋當春ニかけ候而之出府之趣等來書も有之候處今以出府無之御噂ニ而ハ當年之儀も無覺束様御噂ニ御座候處ハラヘル彼彈道之事ニハ御府内ニ而追々穿鑿いふし度申候向有之候間當春迄ニ懸候而ハ池部啓太と申者有之肥後藩ニ而此者出府いたし候ハ、至極功者ニ付御學被成度申置候處追々催促を受候事ニ御座候實ニ御府内ニ而ハ同人の如く會得候仁も無之事ニ御座候然ル處御承知も有之候哉永井氏船艦惣裁ニ而講武所ニ而軍艦操練相始り長崎傳習いふし來候者ともへも夫々教授方被仰付諸向藩中有志之者へも傳習被仰付候儀被仰觸定而御承知も奉存候依之相考候處本邦ハ四面之海岸ニ而専ラ船艦之儀御世話有之候儀ニ御座候貴國ニも海濱之儀ニ付是非御世話無之而不相叶儀ニ御座候然ルニ航海之儀ハ池部氏ニ候へとも直ニ會得も出來候儀ニ而是又往々御國之御爲ニも可相成と被存候ニ付同人親長十郎長崎に被罷出蘭法算術等修行被致候所より啓太ニ至り候而之大ニ發明いふし親ニもまさり候程ニ至り候儀御學之見込肝要之事ニ御座候御府内當時之御盛一見いたし候而も隨分固陋ヲ開候端も有之候事ニ御座候處池部氏一ヶ年位ニ而も出府ニ相成講武所之模様一見被致候儀又御國諸事之御含ニも相成候儀ニ御座候間旁出府ニ相成候様致度是等之趣會大夫ニ被仰上被下度猶御承知之通愚老ニハ天下之大罪人ニ御座候處いふる事敷近々結講ニ被仰付難有事ニ御座候池部

氏ニも國家を思ひ愚老門人ニも被相成候處愚老之連累ニ而御役も御免ニ相成候由いらも歎息いたし候儀ニ御座候隨而右申上候通愚老ニも結講被仰付候ニ付而之池部氏ニも同様之儀ニ而猶又冤罪之儀ニ御座候得之同人儀も御國ニ而之創業之人ニ御座候間出格之御引立ニも被成下候ハ、於愚老重疊難有奉存候序右之段茂申上候間御世話會大夫ニ茂被仰上宜敷御工夫も御座候様御執成奉願候色々愚意申上度儀も有之候得共餘り長文ニ相成不計ヤリハナシ任筆申上候得とも國家之爲と存候處方當時 公邊之御趣意も察候處を申上候事ニ御座候於御家ハ公邊ニ之格別之御因縁も有之候儀ニ付何卒公邊之御趣意ニ御戻りふく御國之炮術御世話御座候様序愚考申述候事ニ御座候御用多ニも可有御座候へとも御換合次第御光臨可被下候萬々其節而啓

呈五月廿二日

高

島

(ヨノ三本朱書) 喜平也

大岩 君 (本朱書) 御勘定所物書ニ而炮術功者ニ有之當時 大地鑄直等付而暫之間御武器方引除詰

(本朱書) 向以前條之大意會大夫にも宜敷被仰上被下度候序愚意申述候事ニ御座候以上

(本朱書) 高島喜平ハ重疊御國最負ニ而一刻も西洋法相開ケ候様との一念よゝ如是申越候と相見右之一件ハ去ル八日御奉行藤本津志馬出立之節委細相含罷越候付同人手元まで荒木甚四郎より自筆添紙面を以本文來る閏五月廿六日之御飛脚ニ遣候事

閏五月某日部池啓太は世運の進歩に鑑み新式砲術研究の爲め上京を命せられんことを藩政府に請願す

〔相州御備場御用一件〕

御内意之覺

私流儀西洋法炮術之儀日新之法ニ而以前於長崎傳を受候後相開ケ候稜不少依之一昨年已來追々奉願長崎に罷越蘭人よ

安政四年

八八七

り直傳を受候得共一昨年迄ハ船軍之法迄ニ而陸軍之稽古者出來兼候處一昨冬江戸表より爲傳習御役々々被差下候以後陸軍練度相始追々傳習を得江戸表に歸府之向御座候付御同所講武所ニおいても日に増相開盛ニ相成候趣ニ御座候右之通日新之儀ニ付當時之趣研究不仕候而者門弟中に教示茂届兼候付江戸表に罷登修行仕度奉存候得共小身之私自勘ニ而任心底不申押移居申候然處當年ハ門弟人數も凡相揃候見込ニ御座候間門人之内相州詰被仰付被下度奉願候外々師範家者代見高弟之内引廻ニ而被差登候得共前文之譯合を以代見引廻之場ニ而私茂被差登被下候様奉願候左候ハ、於相州者大炮打方も切々被仰付候付研究出來仕且又御備場間合宜敷時分ハ江戸表に茂罷出師家高島喜平を始下曾根様江川様に就而研究仕度此段御内意申上候間宜敷爲及御參談可被下候様奉願候以上

閏五月

池邊啓太

閏五月某日本藩相州に於ける受持臺場備付の砲器を總て西洋流のものと据替へられんことを幕府に申請す

〔相州御備場一件〕

細川越中守受持御臺場々々に御居付之大炮總而和流古法之御筒迄ニ而臺茂右ニ准當時ニ而者一切取扱様相辨居候者茂無之其上御筒之内ニ茂痛損居候分茂有之旁以御引渡以來試打等一度茂不仕空敷押移申候尤自然之節之爲且平常稽古打等者奉伺御名自勘製造之大炮御筒之間々ニ居付打方仕來候儀ニ御座候處當節者大小筒とも專西洋流御筒ニ付而者右自勘居付之筒茂總而西洋法を取用置仕手方之者共茂專同法稽古相倡申候事ニ御座候得共乍恐 公邊御渡之御筒前文之通ニ而全鉢試打等茂出來兼候付而之先者御道具一廉之様ニ相心得兎角實致ニ其兼候氣味有之内輪ニおゐて御主意論方等役人共茂大ニ心痛仕候其上心得不申御筒等區々ニ有之候而之自然之節諸手配筋等紛雜手練ニ相成候之必然ニ而却而實用ニ相立中間敷哉ト掛念仕候間御時節御出方筋之恐多奉存候得共鳥ヶ崎龜ヶ崎觀音崎都合三ヶ所之御臺場ニ而十五挺御居付ニ相成居候御筒何卒臺共ニ西洋法御筒ニ總而御居替被成下候様備ニ奉願候左候得之自勘筒とも一鉢一對ニ相

成兼而一致之稽古茂充分相整就而之御威光を以御倡之御主意論方等茂相貫キ一際相勘候様仕置候ハ、自然之節之不及申役人共抑揚之一助ニ茂相成別而難有奉存候此段憚を不願御内慮奉伺候事

閏五月

細川越中守内

鳥ヶ崎

吉田平之助

- | | | | |
|--------------------|-----|------------|-----|
| 一 貳貫目唐銅御筒 | 一 挺 | 一 五貫目狼煙鉄御筒 | 一 挺 |
| 一 壹貫目唐銅御筒 | 一 挺 | 一 貳貫目唐銅御筒 | 一 挺 |
| 一 壹貫目唐銅御筒 | 一 挺 | 一 壹貫目唐銅御筒 | 一 挺 |
| 一 壹貫目唐銅御筒 | 一 挺 | 一 壹貫目唐銅御筒 | 一 挺 |
| 一 貳貫目唐銅御筒 | 一 挺 | 一 壹貫目唐銅御筒 | 一 挺 |
| 一 貳貫目唐銅御筒 | 一 挺 | 一 三貫目唐銅御筒 | 一 挺 |
| 一 貳貫目唐銅御筒 | 一 挺 | 一 壹貫目唐銅御筒 | 一 挺 |
| 一 壹貫目唐銅御筒 | 一 挺 | 一 壹貫目唐銅御筒 | 一 挺 |
| 一 壹貫目唐銅御筒 | 一 挺 | 一 壹貫目唐銅御筒 | 一 挺 |
| 右之通 公邊方御居附ニ相成居申候以上 | | | |

閏五月

六月十三日本藩江戸木挽町の邸内に於て歩兵練練を行ひ發火演習を爲さむことを幕府に稟請す
〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

一本掘町御屋敷ニ而西洋流步兵練練稽古空砲玉目打方伺濟之事

安政四年

木挽町於御屋敷西洋法步練稽古有之管ニ付其節玉目八匁雷擊銃空炮打方差支不申様 公邊伺之儀取計可申旨溝口藏
人江戸詰より達有之候付左之通伺書出來六月十三日御用番久世大和守様差出置候處可爲伺之通旨御付札御用同廿五
日御用人を以被成御渡候由ニ而同廿八日仕出之宿次飛脚ニ差上七月十四日御國に相達候

越中守木挽町下屋敷内明地ニ而家來共ニ西洋流步兵練稽古爲仕共節空炮玉目八匁筒打方を差爲仕度此段奉伺候以
上
細川越中守家來

六月十三日

吉 田 平 之 助

付札、可爲伺之通候

〔溝口孤雲編旅中勤勞稜書〕

一西洋步練之儀初發江戸表土井ヶ窪と申處ニ而薩より拾五六人二拾人計其餘有志之面々二三人或四五人宛諸藩之寄合稽
古有之取集一小隊有る無_レて至而未熟ニ相見候へとも何様軍國有用之仕法ニ相違無之と孤雲儀毎度見物ニ罷越候處追
而之江戸詰ニは莫大之人數ニ相成□山_ニて練廻有之其節ハ氏家甚左衛門田中八郎兵衛吉田平之助杯も追々同道見物ニ
罷越如何様卒いたし我藩邸へも取起度始末唱合既ニ孤雲嫡子及び家來之内茂公義御師範下曾根金三郎方に入門致せ邸
内外様足輕等倡立之儀種々致工而候へとも御國之方一切寒_レり就而ハ邸内茂倡ニ應不申候ニ付無餘儀閑老より 世子へ
直と共邊御噂之儀内分奉願候程之事ニ而漸相州御備場之儀公義御趣意通ニ無之候而ハ難相成と申丈ケ相運ひ候間夫を
幸池邊啓太を俄ニ呼登相州江戸に懸頻ニ致誘掖候處より漸々相整後々者神錢坐定日之稽古ニも御人數被差出候様相成
其勢御國許へも移り來り終ニ東西共一般ニ相聞け候様相成たる儀ニ候處當時ニ至候而ハ右之次第知るもの至而稀なり

六月十七日關老阿部正弘病て卒す

〔昨夢紀事〕

一尼公(松榮) 失せ給ひし後伊勢守殿の御病氣輕からぬ筋に聞えしかハ公(松平) 覺東ふく思召問五月廿四日御ヒ醫師半井
仲庵を參らせられて御病狀を診察せさせ給ひしに仲庵も以の外ある御病氣にて御藥の事もいたく事後れたれハ癒させ
給ふへくも伺ひ侍らねハ侍ふ御醫師共にかたらひ見るに彼御方にてハ漢法の醫流をのみ好み給ひて蘭家の説は用ひ給
はぬ御事本れハ是迄も漢家者の説にて一と渡りの筋におもひとりて御藥も調し來れるが蘭家より見ればあらぬ筋にも
て扱ひ奉る本れハ中庵か思ふ旨を彼方さまの御近臣の長ある藤田與一兵衛に告たりけれハ御病の深きにハ痛く驚きた
る狀本から蘭法の治療ハ用ゆへくもあらぬ面持よりけるよしを罷歸りて申上たりけれハ公殊に驚き憂ひ給ひ當將軍家
御代知しめして幾程もあらせ給はす何事も彼人の御後見まつりこち給ふるあるに萬一不諱の事あらんにハ天下の形勢
もいかに遷り變り行んも計り難かり彼人の命ハ天下の命あるものとて與一兵衛召て蘭家の御藥勸め參らすへきよし
本とをも仰付られ猶久世大和守殿ハ親き御眷族ふるうへに同し御職にも坐せハ此御方へもかれこれとおほせ入られ其
外にもいせ守殿のしたしき方々將事受給ふへき限りに御自らも人しても語らひこしらへ給ひていせ守殿へ勸め給ひし
かととやかくと云ひのかれ給ひて遂にうけひき給はさりけり後に聞ハ近年蘭法の醫流大にひらけ來にける折此候まで
も信用し給ひふハ下一般に蘭家にもふりふん勢本れハさては又其弊害あらん事を深く慮り給ひて蘭家の長所ハ心
得給ひにけれとも余ハよしあしにもよらず天下の爲に蘭法の藥ハ服し難しとの給ひけるとふんかくて六月十七日辰刻
ふりきいせ守殿の御様子昨日よりあしく見え給ふよしなれハ師置にまゐりて伺ひ來るへき旨仰ありけれハ首に辰の口
の邸へまゐりて横井吉十郎老女花井等にうけ給るに昨日の朝剛に行かせ給ふ廊下にて不圖打倒れ給ひしより俄に様子
かはり給ひ御動氣御發熱御手足厥冷御噎逆等の惡症一時に暴發し御顔のさまをはしめ日比に似す俄におとろへ給ひて
現し心も坐せず御脈もしはしは絶えはて給ひし計りありけれハ内外の人々足を空らに騒き惑ひて御藥ふと種々奉りて
やう_ノ人心つき給ひてこのかたすこしつゝよろしき方に坐するよしと御藥も是迄は御手醫師の井澤瑠庵奉りしかと
今日より松平駿河守殿の醫師青木春岱へ御轉藥にてたゞ今藥合せ奉るふり春岱も不圖かゝる事發り給ひにけれと漸々
安 政 四 年

に治りて本に復らせ給ふへき御藥調し奉るふれハやかて其驗し見え侍るへけれふと申上たる山花井は語りぬ罷歸りて其よし申上たるは已刻過るほとりきさて午の半比にもあるべしいせ守殿御様子以之外にわたらせ給ふよし花井より申上たりしかハ急き参るべき旨師賢へ仰ありけれハ直に参りたりしに花井申けるハ先に師賢参りたりし折春信か奉りし御藥煎しものして御側にもて参りたりしに御息遣ひふにとよく替らせ給ふやうありけれハ御醫師共もいそき参りて診ひ奉るに御うけ答の御言葉もなくてやかて事切れさせ給ひしハ午過る比ふりきと泣ノゝかたりぬ此君またいと若き御程よりして執權の職に登り給ひ前代にも例生まれる多事多難の天下を政ち給ひけるに克く人を容るゝの度量坐しけれハ諸有志も赤心をひらきて何事も論らひ沙汰し申せしかハ常ふらぬ世の中も穩ふりしか此後ハ如何に成行らんと世の中ゆすりて歎き惜み参らする事限りふし

〔幕府衰亡論〕

〔前略〕此時に當り阿部閣老は自ら此難局に當り内外の時勢に應じて事を處理せんと欲したるか故に亞國官吏を江戸に出府せしむるは尙早として之を背せず水戸藩摩とも熟議を盡したる上にて徐々と計畫せんと思はれしに惜ひかハ阿部は此年六月十七日を以て逝去せられたり享年三十九歳と聞えし抑も阿部閣老の可否に對しては當時よりして頗る其説を本すものありて毀譽交々其身に集り甚しきは和議を主唱して國を誤るの大罪人ふりと迄に罵られたる人ふりと雖も余〔福地源一〕が觀る所を以てすれば兎も角も水野越前守以後の閣老ふり若し此人にして存せば幕府の御養君も年長賢明の人に定まり攘夷論も烈しくは起らず京都の内勅も降らず戊午の大獄も起らざりしふらんと思はるゝふり然らば則ち阿部閣老の逝去は幕府をして其衰亡を促さしめたるの一因ふりと論定して不可ふかるべきか

〔維新日米外交の真相〕〔ハリス日記〕

七月二十七日 (月曜日) (七月廿七日ハ陰曆六月七日ニ當ル蓋阿部ノ計ヲ誤リ傳ヘタルモノカ)

老中阿部伊勢守の計に接して余は痛嘆の涙滂沱たるを禁する能はざりき彼れ一たび閣老の榮位に就き次で堀田備中守の才幹を認むるや之を閣老に進めて自ら其次位に居り以て幕府の爲めに國際問題を解決せんとしたり余の心に映じたる阿部伊勢守は非常に行政の才幹に秀でし人にして其上克く米國其他歐洲列強の勢力を認識して之を尊重するの念あり飽く迄鎖國主義を貫徹せんと欲せば日本は世界共通の敵とふり終に亡國の悲境に沈淪すべきを遠觀したるが如し彼の如き進歩主義の偉大なる政治家を失へるは徳川幕府の大損失と云ふべく併せて日本の開國進歩の爲めに勇將を失へるの憾ふき能はず余は思ふて茲に至り悵然たること久しかりき

六月廿四日本藩主管砲壘中會て幕府の架設したる大砲は大抵舊式和砲にして堅艦を貫く能はざるの虞あるを以て西洋式新砲に交換せられんことを更に幕府に稟申す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

海岸御願り

堀田備中守様に

越中守相模國御備場所々御臺場に御居附之大砲都而和流古法之御筒並臺茂同様ニ而當時者取扱方手馴不申其上右御筒之内損居候茂有之旁以御引渡以來試打差控平常積古打者奉伺越中守自分製造之大砲御筒之間々ニ居附打方仕來候常節ハ大小砲共專西洋流御筒ニ相成候付而者右自分居附之大砲茂都而西洋法を取用鐵炮手之者共茂專同法積古仕せ候事ニ御座候然處前文之通御居附ニ相成居候御筒試打等茂出來兼自勘居付之筒而已取扱候様御座候而ハ自然と戴茂薄倡方之差障ニ茂相成其上和流西洋法と炮器區々有之候而者自然之節諸手配筋等紛雜ニ相成候哉茂難計左候而ハ第一御場所稱甚以懸念仕候儀ニ御座候依之奉願候儀恐多奉存候得共鳥ヶ崎觀音崎龜ヶ崎三ヶ所之御臺場に御居附ニ相成居候大砲十五挺臺共西洋流之御筒ニ御居替被成下候様備ニ奉願候左候時者公義御筒自分製造之筒一對ニ相成鐵炮手之者共兼而

安政四年

一致之積古相整御倡之御主意論方等茂相貫き孰茂一際相勸申ニ而可有御座候右者立花飛騨守様御引請之御臺場に御居附之御筒茂御願ニ依而御居替ニ相成候由承知仕候間旁御備場御用別段之譯を以何卒願之通御聞濟被成下候様奉願候以上

細川越中守家來

吉 田 平 之 助

六月廿四日

堀田様七月十三日夕御呼出ニ付平之助參上之處本文願書ニ如左御付札御用御用人を以被成御渡候

願之通追々西洋炮ニ御引替可有之候先當時關名二十四ポンド五貫目餘御筒ニ挺御引替可相成候尤御留守居相談候様可仕候

六月廿五日越藩中根親負書を橋本左内に贈り横井平四郎招聘の件につき應酬する所あり

〔橋本左内全集〕

御内狀披見殘暑之候君上益御機嫌能奉恐悅候隨而愈御清泰御盛務珍重に存候陳者本月六日夜村田已三郎熊本より指出五月十九日認の書狀到來御開封之處意外之故障は有之候得共第一掛念之老母之一件等無之當人も應微之意志は充分之様子何分其處は重疊之儀長岡（細川家執政）との確執は如何にも兩雄之持論各得失可有之事と存候夫に付ては熊本之周旋は可託人無之に付表向之手續に可相成事如論是は度外に附置候處にて違算の様に候得共村田生書面にて考察致候而も致進斷候程之荊棘も無之様子に候へは何分於此表正面之御頼より外は無之候溝口藏人の儀探索甚六ヶ敷有志の塾生杯より承候得は可然候得共肥後より出居候書生は何方にも無之哉ニ相聞へ申候尤成丈けは考思致見候得共猶又於其表村田歸北の上御聞調べに相成候はゞ造作もなく相分り候儀も可有之又分らぬ處が今一往返有之愈御頼と相決候得は正面に熊藩の士人へ相尋候ても宜敷候其上にて不可然候得は御直書計可然は藏人へも御頼廻からさる様と存候故今便も強而探索には及び不申候

○御直書の文は此度執政より被相廻候村田氏實見之意味にて増損も可有之歟との尊慮にて候藏人へも御頼之事と相成候はゞ族裝其外の義も可然取計に相成候様御頼も可然歟と存候事來論内廷より御懇望と申候着眼不能愚考候今一應御細示相請候其上にて猶又推蔽致度と存候實にこれほと解兼候儀逆は是迄にも無之候處迂遠之質老耄に近く相成候歟と我ながら合點行き不申候くれん御再諭可被下候○此飛脚着之比は大方村田も歸着に可相成候得ば猶又實況條問之上御申達に相成候得は於此表夫々表向御頼みの手續に可相成儀に存候 上にも甚御悦喜何分御借り課ふせの御積にて候○學校教官へ御内調之御諭書も今便執政まで御渡に相成申候是も發表は其表の時機次第之事に可相成儀と存候○漏泄之一路此度は恐らく過絶致候得共懸念成儀は伴圭左衛門立花登岐方へ罷越候節右之囁有之候由圭左衛門より内達致候に付即座に口留は致候得共計まては片端相囁候様子左候へは是より半井桑山等へ漏泄甚た氣遣はしく候乍併伴の承候處も甚た疎漏にて實ならざる處も有之候得はさしたる妨害には相成中間敷と存候

六月廿五日

景 岳 老 兄

雪

江

七月二日日本藩義に管轄地増加の請願を閣老阿部正弘に提出したりしも同人卒去したるを以て更に之を閣老堀田正篤に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

一増御預所被仰付被下候様との儀ニ付而之書付阿部様に差出置候處先達而阿部様御死去ニ相成候付猶左之書付七月二日海岸御懸り堀田備中守様に吉田平之助持參差上候

安 政 四 年

越中守相模國御備場御用被仰付同國並武藏國之内ニ而御預所被仰付置候處村高少人夫引足不申段々難澁之次第御座候付今壹萬石程増御預所被仰付被下候様追々委細奉願置候右者第一御軍備筋ニ相係候儀ニ付陣屋詰之者共別而落着兼頻ニ歎訴仕候付急ニ御評議被成下願之通被仰付被下候者家來之者共村方一同相競彌以出精仕越中守國許ニ發足仕候ニ茂相安候譯ニ付發足前御沙汰筋之儀奉願置候處今以御沙汰無御座候ニ付重疊恐多奉存候得共何分急ニ御沙汰之儀奉願候以上

細川越中守家來

七月二日

吉田平之助

七月六日幕府海軍教授所規則を發布す

〔相模國御備場御用一件〕

以廻狀致啓上候昨日御目付永井玄蕃頭様より御城中之口御呼出ニ付邦之助罷出候處今般海軍教授所御開ニ付有志之者は罷出修行可致趣を以御別紙數冊御渡ニ相成御同席様方ニ致通達候様被仰渡候依之御渡之御別紙差廻申候間一冊つゝ御落手可被成候且又御承知之上從御銘々様御請之儀邦之助問合候處不及其儀旨被仰聞候此段各様迄宜得御意旨飛驒守被申付廻狀數通相認持廻り申付候以上

立花飛驒守内

七月七日

宮崎邦之助
高島義作

松平越前守様

御留守居中様

細川越中守様

御留守居中様

松平相模守様

御留守居中様

松平内藏頭様

御留守居中様

海軍教授所規則

一 測量

一 算術

一 船具運用

一 蒸氣機關

右稽古之儀者朝四ツ時より九ツ時迄晝後九ツ半時より八ツ半時迄日々有之候事

但正月十二日より相始十二月十八日相納候事

一 五節旬朔望七月十三日より十六日迄並ニ増上寺御參詣濱御成之節者稽古休之事

一 當所ニ於て稽古相願候ものハ名前書教授所に持參可致候且松平河内守永井玄蕃頭並ニ頭取宅に最寄次第差出候ても不苦候事

但諸家々來者主人より使者を以差出可申事

右案左の如し

安政四年

何術	何役敷
宿所何所何勤何之誰地面借地敷	何御番敷
右海軍教授所に罷出稽古仕度奉願候	小普請敷
支月日	何之誰組敷
	何之誰配敷
	何
	之
	支何歳
	誰

何術	何役敷
同上	何御番敷
同上	小普請敷
同上	何之誰配敷組敷
	誰惣領敷俸敷次男敷厄介敷
	何
	之
	支何歳
	誰

何術	誰家來
同上	何
同上	之
同上	支何歳
	誰

右二枚宛差出聞届之挨拶承り其後勝手次第罷出可申候

但初而罷出候節ハ時之服麻上下着用朝四ツ時前迄に罷出可申事

一着服之儀ハ稽古始之日ハ麻上下平日ハ略服且伊賀袴相用候而も不苦候事

一當所に出席致し候得者記録所に銘々之名札差出し退散之節者其段相届可申事

但不參之節者斷差出ニ不及産穢忌中等ハ右明け候而罷出候節記録所に相達可申事

七月六日幕府本藩に武藏國の内高一萬石餘の管轄地を増加す

〔相模國御備御用付而諸御願御同等〕

細川越中守

相模國御備場御用被相勤候ニ付武藏國之内高壹萬石餘増御預處被仰付候間政事向私領同様ニ可被取計候委細之儀者御勘定奉行可被談候

(朱之書込)

本文御書付之趣於御國許被遊御承知御答御使者を以被仰達旨被仰付越九月三日堀田様に助勤吉弘嘉左衛門相勤

安政四年

八九九

〔全書〕

一七月十四日宿次飛脚ニ言上左之通

一堀田備中守様方去ル六日夕御呼出ニ付平之助參上之處相模國御備場御用御勤ニ付武藏國之内高堂万石餘増御預所被仰付候間御政事向御私領御同様ニ可被遊御取計旨之御書付一通以御用人被成御渡候
右御書付差上申候御答を初御禮等之儀ハ可被 仰付越々奉存候(以下ハ八日ノ條ニ出ツ)

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候相州御備場御預所之儀付而之昨年來 公義に御内意被 仰立置候得共寸斗御増無之ニ付御留守居方段々承辨候處 此方様御内意已前越前様より御同様之御内意ニ相成居御同方様之御妹阿部様之御後室様ニて彼是之御取持茂宜敷 此方様と御引合ニ相成居候由ニ相聞候間御備場御取扱兼而御手厚之次第且詰込之面々義氣張立居候模様等松平河内守様は吉田平之助方委細申上何卒御内意濟之儀段々稜を立申上御心配被下候様致款願候處至極御聞通相成 此方様ハ御各別と申譯を以御同方様方御義論有之積り御落札ニ相成此節武藏國之内高堂万石余御内意高よゞ茂余計ニ御預相成候事ニ御坐候右付而者自然之節相州表之出夫ハ申ニ不及御府中五六里位之村々茂有之由候へハ江戸表之寄夫茂夫を以取賄第一口米口永其余种々之御取扱茂有之此砌後年懸逸稜之御爲合ニ相成申候右之趣一ト通り爲可申達如此御座候以上

七月十三日

溝 口 藏 人

御 家 老 老 充
御 中 老 充

被仰越通致承知石増一件書面之通候得之後年逸稜之御爲合相成申候右付而之彼是御心配爲被成と遠察仕候増分之村等

相分候ハ、可被仰越々存候以上

八月十日

七月八日幕府勘定組頭小高登一郎は増管轄地高帳を本藩留守居吉田平之助に交附す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

一同(月)八日大手御番所後御勘定所に御呼出ニ付平之助罷出候處右増御預所御高帳一冊御勘定組頭小高登一郎様方御渡ニ相成申候尤御印形揃兼候付御連印之御本書ハ追而御渡可有之候間今日御渡之振ニ相心得候様との趣御勘定組頭五味與五兵衛様被仰聞候

右寫一冊差上申候追而御渡之御本書ハ溝口藏人に差出追々御渡ニ相成候御高帳一所に納置ニ相成候様相違可申候上所

〔全書〕

武藏國多摩郡

一高八千九百九拾七石五外七勺	長沼村	平山新田	豊田新田	上田村	大谷村	福島新田	宮澤村	中神新田	大神村	上河原村	小川村	新井村	石田村貳組
		平村新田	川邊堀ノ内村	大谷村	郷地新田	筑地村	田中新田	大塚村	万願寺村				

石川新田	高幡新田	百草村	廻リ田村	芋窪新田	芋窪村	奈良橋村三組	後ヶ谷村	清水新田	高木村	高木村新田	廻リ田新田貳組	中河原村	四ッ谷村貳組	大丸村新田	坂濱村新田	蓮光寺村	關戸村新田	一ノ宮村新田	熊ヶ谷村	廣袴村	長沼新田	野口村貳組	野口新田貳組	小川新田	野鹽村貳組	土方新田	宅部村	久米川村	南秋津村	日比田村	九〇一
------	------	-----	------	------	-----	--------	------	------	-----	-------	---------	------	--------	-------	-------	------	-------	--------	------	-----	------	-------	--------	------	-------	------	-----	------	------	------	-----

安 政 四 年

南秋津新田 大沼田新田 平山村新田
是者江川太郎左衛門御代官所之内より可請取分
同國同郡

一高千五百拾五石七斗七升貳合

上清戸村 上清戸新田 下里村

下里新田 前澤新田 柳窪村

柳窪新田 中清戸村 中清戸新田

是者右同人當分御預所之内より可請取分

高合壹萬五百拾貳石八斗貳升貳合七勺

右者此度増御預所被仰付候付書面之通相渡候間得共意

江川太郎左衛門に相達從當已年物成郷村請取之御仕置

可被申付候存寄之儀於有之者重而可被相伺候以上

安政四巳年七月

高	平	作
五	與	五兵衛印
小	登	一郎
福	八郎	右衛門印
設	八	三郎印
勝	次	郎印
塚	藤	助
立	岩	太郎印
石	因	幡守
水	筑	後守
川	左	衛門尉印
本	加	賀守印
松	河	内守印

細川越中守殿

御預所役人中

宮 菅 太郎印
鈴 大 之 進印
菊 大 助印

七月九日幕府は來ル十九日を以て軍艦操練の教授を開始する旨を達す

〔相模國御備場御用一件、尊攘錄皇武令〕

堀田様御渡

大 目 付に

築地講武所内御軍艦操練教授所來ル十九日御開相成候間諸事先達而相觸候通心得稽古罷出候様可被致候
右之趣向々に可被相觸候

七月九日

御同席觸寫

海軍教授所規則(本月六日の條に掲げた
るを以て茲に之を略す)

七月十三日幕府本藩に相州警備地臺場据付の古砲を西洋流新式のものとの交換することを許す

〔相州御備場御用一件〕

以別紙申達候相州御臺場島ヶ崎龜ヶ崎觀音崎に御居付ニ相成居候段公義之御筒都合拾五挺悉く御用ニ相立不申候付西
洋流御筒ニ御居替之儀御願書先月被差出置候處昨十三日御願之通追々御居替可被仰付先二十四斤度御筒貳挺御引替ニ
可相成段御沙汰有之則別紙御用狀之通ニ御座候當時觀音崎御筒貳挺相損いまた跡御筒貳挺相整不申折柄大ニ都合宜敷第
一殘拾三挺茂御居替之上者猶更平素之稽古之右之御筒而已相用若損候節之猶又御引替相願候筈ニ而夫丈ヶ 御自分方
之御筒者損薄被是逸稜之御強ミ之不及申御筒覆等榮御紋ニ而茂致出來候ハ、自他之戴茂大ニ違可申々咄合候事ニ御座
候右之趣爲可申達如是御座候以上

七月十四日

御 家 老 宛
御 中 老 宛

溝 口 藏 人

七月廿四日幕府土岐頼旨筒井政憲川路聖謨鶴殿長鑑等に米國官吏接待事務取調を命ず

安 政 四 年

九〇三

〔異國船渡來一件〕

嘉永六年以後

土岐丹後守 筒井肥前守 川路左衛門尉
一七月廿四日 船殿民部少輔 永井玄蕃 塚越藤助

亞墨利加官吏江戸參上之儀御指許ニ相成候ニ付而ハ出府並登城御日見並老中御應對等之手續等迄申談萬端引受取調候
様可被致候此段内意相達候右於新部屋備中守申渡之

宿之東本願寺應對所傳奏屋敷之由

〔原本朱書〕 此通評判之處近日様子變り天文臺に宿致候様相成候由十月比に至り評判

七月廿四日池部啓太砲術研究の命を受け門人庄村助右衛門太田黒亥和太を隨へ熊本を發して江戸に赴く

〔相模國御備場御用一件〕

一池部啓太出府之事

池部啓太御居ニ而江戸に被差越候様等之儀ニ付松平河内守様御勅定奉行ニ而吉田平之助に被仰聞候趣同人書上御書
方より取傳候品ニ無之處西洋流砲術之儀御家老衆之内熱心無之人も有之御役所より申向ニ相成乍然中途致停滯平之助
申立之通被行兼可申哉及難量との懸念ニ而段々平之助を溝口藏人江戸詰に談合之筋有之御用人に相談有之財満市兵
衛より栗原伊左衛門藤本彌三郎に差越候全五月十五日也御用狀尤右書取機密間に差差廻相成山松井典禮に之平之助より
別段内狀仕出候由右を合宜取計候様市兵衛より内意申越候
一右平之助書上奥ニ記御臺場御筒御居替願之内伺卷込共御居替願別段在是ハ河内守様ニ増御預所之儀ニ付御掛り御役方
之密狀並別紙寫是ハ増御預所御爲御別右一同六月廿二日伊左衛門より典禮に差出候處啓太出府之儀見込何程ニ候哉右

付而ハ河内守様御用人西倉務々茂密狀來候由ニ而爲見被申候伊左衛門存候ニハ江川様はハ財津志賀大島何れもと致
御門入大島ハ皆傳及相濟罷下候山然ニ其後御積古場に御家中より一人茂致顔出不申候而者如何可有之歟夫とて未熟之
人而已罷越候而も詮及無之啓太ハ高島相談相手と頼候人物之様子ニ付習熟之門弟兩三人差差添出府被 仰付御積古場
に罷越候ハ、西洋砲術御國に聞ケ居候唱日本ニおよび可申何卒出府被 仰付度然し御國之御評議何程ニ可有之哉と申
候處同意ニ被存先被奉達 御内聽其上ニ而御家老に可被差出との事ニ付左候て務より之密狀一同被差出度旨致申置
候處同廿九日書付類被差返 御内意被奉伺候處爲致出府候方可宜と御沙汰被爲在候由御家老方ニ而ハ御奉行ハ一通
申來候得共藏人より何とも申越無之とふした物やらと被存居候山然し務より密狀之趣も有之猶參談ニ相成候歟七月朔
日ニ御家老より書付類取出候様被申候由ニ付典禮に差出置候處同十一日ニ猶被差返候此御啓太出府被仰付門人庄村助
右衛門一御助 大田黒亥和太治兵衛 同道七月廿四日職ニ熊本致出立候由

〔相州御備場一件〕

以別紙申達候於 公邊御軍備筋御取締之内ニ者河内守様献上之蒸氣船ニ而操練被 仰付候付而者池部啓太儀先年長崎表
傳習等之譯も有之其御地に被差登候ハ、公邊之問も可宜哉と内々松井典禮迄申越候候も有之等之趣御用人方申上候
儀と相見啓太並門弟四五人も可被差越旨 御内沙汰之趣被爲在且御備場御居付之大地此節西洋流之筒ニ居替被 仰付
候付而ハ差寄取扱等之傳授も有之旁以啓太儀被差登候ハ、彼是都合可宜と囑合出府之及達庄村助右衛門太田黒惟和太
儀啓太に被差濟來ル廿四日頃出立いたし候由御座候着府之上勤方等之儀者詰合之御奉行承合候様及合せ置候間宜敷御
差圖可被下候尤四五人可被差登との御沙汰候得共藤市崎子山代萬喜儀も啓太門弟ニ而蘭學修行として其御許へ越居候
付若人數不足ニ及候節ハ啓太方申出候筋も可有之候間諸事宜敷御取計候様存候已上

七月十九日

御 中 老

安 政 四 年

御 家 老

溝 口 藏 人 殿

(木尖書)

被仰越通致承知此節諸家様方講武所訓練御拜見等も右之右等之稽古一統起り立候折柄 此方様に度啓太列着府いたし江川太郎左衛門様を初諸方に懸致研究候ハ、公邊之御聞も究而可宜且之相州御備場大筒手不遠致交代候へは新着之面々指南方も有之彼は大ニ都合宜勤方之儀ハ御奉行にも得斗唯合可申存候已上

八月十五日

八月四日本藩新に増加を得たる管轄地は新田畑地多きに居り産米寡少人烟稀疎にして有事の日に臨み人夫糧米を徴發するに足らざるを以て更に其交換を幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

堀田備中守様に

今般依頼於武藏國之内高堂萬五百石餘越中守に増御預所被仰付難有仕合奉存候依之村所之模様等國許に申越度一通承繕候處多摩郡之内輕免畑勝之村多惣村數三ヶ一程者新地ニ而人家無之御誨本業御知行所等より懸作仕夫役相勤候者登人茂無之由殊更畑勝永上納專之村方ニ而現米納無多事候而第一備手人數並夫役共糧米自然之節ニ至及不足國許者遠隔兼而貯置候様之手當茂出来兼若事ニ臨肝要之糧物引足不申候而者縱令人夫ニ者事缺不申様相成候而如何様之不覺を取御爲筋ニ拘候様之儀有之哉茂難計於此處深懸念之次第奉存候畢竟初發願書差出候節右等之文意を加候儀役人共手元ニおゐて屬兼重疊奉恐入候不容易願筋御下知即下猶又奉願候儀甚以恐多奉存候得共肝要之備向ニ拘り候糧物之手當調兼候而ハ此儘國許に申越候儀役人共ニおゐても當惑至極奉存候其上御引渡等相濟候上奉願候而ハ猶更御手数數茂相應り候儀ニ付何卒現米納專之村方ニ何方ニ而そ御練特之御取扱被成下候様偏ニ奉願候願之通被仰付被下候ハ、相州御預所

之例を以石代金納御張紙直段三兩増納ニ奉願候現米ハ陣屋許に取入貯置候様仕度既ニ當年下田表之儀ニ付而之段々風説茂有之山旁若萬一之節糧物人夫相備居候得者安心仕一入難有奉存候大切之御用柄此上相勵出精相勤申ニ而可有御座何分備向肝要之場を御取扱被下御急埒之程幾重ニ西奉願候此段御内意申上候以上(本文申請珠聽せられ十二月十一日管轄地之内高五千石交換せられたり)

細川越中守家來

八月四日

吉 田 平 之 助

八月八日下田奉行米使ハリスに將軍謁見の願意を聽されたる旨を傳達す

〔筆新日米外交の真相〕(ハリス日記)

九月二十五日 (金曜日)

大統領の國書を徳川將軍に捧呈するの順序に就ては昨年十月以來數次下田奉行と交渉するも容易に決定せず彼等は奉行に於て一旦之を受取り江戸に傳達すべしと主張し余は將軍に謁見して直接に之を捧呈し同時に大統領の意見を言上せんと論じ在舊今日に至りしが此日正午十二時御用所に兩奉行に會するや意外にも彼等は余が將軍謁見の願意聽許せられ最も莊重なる儀式を以て余を江戸に送り千代田城に於て將軍に拜謁の上親しく國書捧呈の任を果すべき様江戸幕府より命令達したりと云へり余は斯る豫想外の好意の背後には必ず何等か實行すべからざる條件附帯せられ以て此恩命を有名無實たらしむへしと思惟したるも是れ余の邪推にして彼等は誠實に余の成功を祝するありき奉行等は余が將軍に謁見の際叩頭の禮を行はんことを求めしも余は斯る卑屈なる儀式を守ること能はず歐洲の宮廷にて行はるゝ如き三拜の儀式に従はんことを主張したり彼等又曰く「今般前下田奉行井上信濃守が江戸に歸任するに至りたるは専ら余の將軍謁見の儀式に關して準備する所あらんが爲めあり而して余の一行は江戸に進發するに當り道中の宿舎警衛及び道路の修繕等一切の準備を完成する爲め出發の時日は今より二ヶ月の後なるを要す」と

安 政 四 年

九〇七

八月十一日米使ハリス豫め江戸旅行の隨從者を定む

〔秘史 日米外交の真相〕(ハリス)

九月二十八日 (月曜日)

日本人は支那人を輕蔑し之を見るを厭ふの風あり依て余は此行に支那人を伴はざるに決し即ち余の家族中よりヒュー
ステン氏と二人の日本下僕とのみを拉することとなり然も余の荷物臺所道具寢具其他一切の用度品を運搬する人
夫のみに四十餘名を要し其他我が米國の武具を着けたる從者四五十名を要するが故に余の行列は百名に乘んとす日本
官吏にして余に隨行すべく決定したるは下田副奉行柿崎代官御用所の官吏奉行の秘書役等にして彼等の率ゆる行列は
二百五十名に上り之に余の從者を加ふれば一行總員數三百五十名に達せんとす

八月十二日越前藩主松平慶永書を我藩主齊護に贈り横井平四郎を藩學教授として招聘したき希
望をのぶ

〔神庫文書人印密書輯錄 三百八十二印〕

一翰致啓上候漸秋爽相催候處先以愈々御清安被成御起居奉并賀候爾來大ニ契調打過背木意候條御海宍被下度候陳者近
年於弊國學問所取建家中子弟之者教訓之節世話爲致候處元來教官乏敷雖ニ生日茂増加仕候ニ付老中之教官共動向之繁
劇ニ堪兼候趣有之且又壯年之者ニ之相應見込御坐候而茂今暫之處之取立兼候意味合も有之旁以當感仕候事ニ御坐候右
ニ付其御家來横井平四郎儀者先年諸國游歴之序ニ弊國に罷越候節家來共之内に致面會相談等仕候族も有之候而兼而人
柄間及居候依之近比粗忽恐縮之至御坐候得共於會藩格別御指支之儀も無御坐候者右平四郎儀當分御借受申弊國子弟教
訓之世話相頼申度奉存候間何卒御難題來冬迄 小子に御貸置被下候様奉頼上候左候ハ、平四郎儀ハ於弊國知ル人ニ御
座候故老年教官之者共夫より力を得其内ニ之壯年之者も取立候様相運可申旁以都合宜御座候間何分懇願之次第御聞届被

下候様吳々奉仰望候事ニ御座候右御頼可得貴意如斯御坐候恐惶謹言

八月十二日

細 越 中 守 様

松 越 前 守

慶 永 判

二白隨時御自愛奉祈候本文之趣御許容被下候へハ爲御借受家來共之内會藩迄可指出事ニ候得共當節諸端省略之折
柄ニ御坐候得之乍自由別段使者等今差出申候間此邊も不惡御承知被下候様奉頼候且又當人儀も可成丈早々罷越吳
候様被仰付被下候ハ、本懐ニ奉存候此品乍危末當季御見舞之印迄進呈御笑存被下候ハ、幸甚奉存候已上

八月十五日溝口藏人は横井招聘につき越藩と交渉の状況を藩政府に報告す

〔自筆狀扣〕

安政四年

内狀を以得御意申候去ル十二日松平越前守様爲御滯坐龍口に御出ニ相成拙者に御逢被成度旨御沙汰有之候由候得共折
惡敷早朝より漁ニ罷越居候付其趣御用人方申上置候處翌十三日被方様御用人中根親負 太守様之御直書(十二日ノ
並御音物持參御小屋に罷越申候之福井表に學問所御取建ニ相成候處致教導候可然人物無之候付御國許より而横井平四郎
儀學問熟達之儀御承知ニ相成居候間同人を暫之間御借受被成度其旨被仰進候間手元方も御席中迄吳々頼遣候様御沙汰
有之候段申達候付一ト通取合置跡達而得斗致勘考候へハ其儘御借被進候も何程ニ可有之哉珍敷事柄ニ而御間柄被是
上に茂御配慮可被遊願口此元限ニ而取留も出來候ハ、大ニ都合可宜ト囁合右之御沙汰御受旁昨日常盤橋に罷出候節親
負に面會いたし平四郎學問ハ先づ一部流ニ候へ共年來之執心ニ付相應ニ可有之然處人物之儀いゝも致懸念此儀ハ御
承知ニ相成居候哉尋候處夫者一向存し不申由返答いたし候付荒方申聞々様之事柄不申上追而御双方御迷惑ニも相成
候而ハ奉恐入候間含ニ得御意置候申達候處頗而越前守様被成御逢平四郎事親負を以御頼被成候儀之吳々茂宜敷取扱候

安 政 四 年

九〇九

様御懇ニ御沙汰有之左候而只今稗負迄咄之趣も具ニ御承知被成重疊念之入候旨被仰聞且又平四郎儀一辯有之候儀之兼而委敷御存有之來年ハ御下國ニ相成決而其辯を出し不申様御仕イ可被成世話懸候様ニハ不被爲成其儀者必懸念ニ不
及近年學問所御取建ニ相成候得とも微々たる事ニ而致教導管轄へハ宜敷御沙汰有之候而此上取留之仕法も無之奉畏
何様同列共に委敷可申遣御受申上置候事ニ御坐候右者 尊慮之趣も可被爲在段々御咄合も可有之御奉行於手元精々
參談いたし候様可被仰聞存候右御直書等者他筆之御用狀を以差進候通候已上

八月十五日

(朱込書)

溝口藏人

御家老宛

平四郎儀願曰不被差越方可然と差寄咄合候得とも未取究候時ニ至り不申候決着

御中老宛

次第可得御意と外之事一紙ニ九月十一日日付にて申來ル

猶々平四郎儀福井に先年罷出候事茂有之様子ニ候得とも其後年久敷遠境相隔如何様之手續ニ而同人様子委敷相分居候哉と稗負に相尋候處土臺知音之族茂有之且福井表方昨年今年も御國許に遊學ニ罷越夫等之手續方承知ニ相成候との儀も中間候事ニ御座候已上

八月十六日日本藩義に管轄地の交換を請ひたりと雖も不便の地に變更せられんことを慮り更に希望の地を指定して其交換を幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

堀田備中守様

越中守儀御備場御用之譯ニ付於武藏國相模國之内高壹萬六千石餘御預所被仰付置自然之節夫役並糧物之儀共夫々手當仕候處相備御三家ニ比候得者元來小高ニ而幅合不申依願武州多摩郡之内ニ而猶壹萬五百石餘今般增御預所被仰付御蔭を以夫役之儀者先兎哉角取合此上人夫不足之處ハ如何様卒手許限手當之都合茂出來可申哉と於其所之難有仕合奉存候

然ニ右増御預所之儀未御引渡茂無御座候得共高御目錄御渡之村名を以一通承繕委細先書ニ御内意申上置候通如勝永上納專之村々ニ而米納至而無多事差寄夫役者事缺不申様相成候而も糧米之手當出來兼國許ハ遠隔運送之辨利不宜萬一之節肝要之品柄相整不申候而者大ニ差支折角奉願候詮茂無御座於役人共茂當感仕候處より再應奉願儀重疊奉恐入候得共此儘ニ而之何分國許に難申遣不得止米納專之村所に御差替之儀不關奉再願候通ニ御座候然處相州陣屋詰人數之内一昨年奉伺御當地に茂引付置自然之節者從此方も人數繰出時宜次第ニ之國許方茂急速呼寄候管ニ付召仕候夫役之者共打混候而者彼是大造之人數ニ相成其期ニ臨候而者糧米之貯第一之事ニ御座候處當時之形チニ而之地下小高ニ而糧米之備引足不申心配罷在折角御開濟被成下候増御預所之儀茂人數而已ニ而食料之辨利付不申其上相備之内ニ之越中守高より小高ニ而御預高相増居候御方茂御座候付旁人數ニ應兼自然之節ハ不及申平素異船渡來警衛一篇之事ニ仕候而茂越中守持場之儀之相備御三家之向と違ひ野島表船繫辨利之場處之由ニ而毎數日碇泊いたし始末警衛人數差出候儀ニ御座候へハ夫役之者迄茂相贈相備とハ類外別途之手當茂仕候事ニ而萬一之節ニ至候而之猶更不足仕片時茂なくて難相濟肝要之品柄何方茂差向入用之折柄俄ニ才覺相整候様も無御座此處深懸念之次第ニ御座候間何卒右小高並警衛向別段之場所肝要之糧米難澁之譯等妙是御汲取被成下先書奉願置候通村替被仰付儀ニ御座候ハ、何分御出格之御評議を被爲以埼玉郡之内米納專之村々ニ而川添運送之辨利宜所柄に急ニ御差替被仰付被下候様幾重ニ茂奉願候左候ハ、御蔭を以夫役並肝要之糧米茂相應相整越中守初家中孰茂安着仕大切之御用柄彌以差入出精相勤可申と別而難有奉存候此段恐を不願無據再應御内意申上候以上

細川越中守家來

吉田平之助

八月十六日

八月某日在府本藩老臣は砲器交換申請の指令に基き受領證を提供して砲器及び附屬品を受領す〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

請取申御筒並附屬品々之事

一 二十四ボンドカナン御筒貳挺

一 附屬之品十壹銘

内譯

櫓見當打銅共貳箱

臺貳組

擲杖貳本

掃除棒貳本

玉藥拔貳本

匕貳本

巢口蓋貳ツ

手子棒四本

替くさび貳本

跡車銚廻シ貳本

銅銚廻シ貳本

右者越中守相模國御備場處々御臺場に御居附之和流大砲西洋流之御筒ニ御居替奉願候所願之通追々西洋炮ニ御引替可

被下先當時蘭名二十四ボンド御筒ニ挺御引替被下候旨被仰渡候付御筒並附屬之品々共書面之通請取申候處仍如件

細川越中守家來

溝口藏人

安政四巳年八月

木村 董 平 殿

中川 市 助 殿

右證文清書並寫共八月十七日荒木甚四郎に添手紙を以差出下書及返却候

八月某日本藩本年度異船手當の兵數小荷駄船數等を制定す

〔神庫文書密書七百十二印〕

當年異船御手當一番手ニ番手ニ々御備分之御人數此節御船賦在中連人等之まらへ迄夫々御手數出來ニ付去年ニ立合左

之通

當年ニ々御備方

合

御人數九千三百六拾壹人

小荷駄貳百四拾四疋

船數六百貳拾艘

去年ニ々御備方

御人數壹萬四千六百六拾六人

小荷駄七百四拾六疋

船數七百拾六艘

御人數五千三百五人

小荷駄五百貳疋

船數九拾六艘

當年減

○付紙
合印

差引

右者當年御手當筋下地之御定法之御定法ニして別段簡易之御仕法を以大頭衆以下連人等格別ニ手を詰御番方之伍列一
ト組合相小屋催合ニ陣具等持寄之仕法ニ相成候ニ付小荷駄無ニ而連人も格別ニ相減其外御天守方御道具並大筒手御勘
定手之諸品持夫等別段減方相成候ニ付被是戰を不持人數莫太之減方相成夫たけ往々土臺之御備引締り有用ニ實茂入候
而一稜之儀と奉存候此節稜々立合申候處別帳まらる之通ニ付此段御達申上候以上

巳八月

御手當方

○付紙 本行小荷駄馬之減方分之全ク人夫之減方同様ニ付壹疋壹人宛ニ仕候而後五百貳疋分五百貳人ニ相當り其分人數
之減ニ加候得之惣高五千八百七人之減方ニ相當り此分一日之御扶持方米壹人壹升宛ニ仕候得之米高五拾八石宛相減十
日分ニ而之五百八拾石三十日分ニ仕候へハ米高千七百四拾石余三斗貳升俵五千四百三拾俵余之御手當相減其外諸色一
切之減方夥敷儀と相見申候事

八月廿八日幕府は米國官吏の引見皆寛永以前の先例に準すべき旨を布告す

〔尊攘錄皇武令〕

御同席編

豆州下田表在留之亞墨利加官吏儀國書持參江戸參上之儀相願候處右者寛永以前英吉利人等度々御目見被仰付候御先蹤
茂有之且條約爲取替相濟候國之使節者都府に罷越之儀國普通常例之趣ニ付近々當地に被召寄登城拜禮可被仰付との

安政四年

九二三

御沙汰ニ候此段爲心得相違候

八月

八月晦日米使ハリス幕府へ献上品の準備に勤む

〔維新日米外交の真相〕(ハリス)

十月十七日 (土曜日)

余は頃日將軍家への献上品及各老中への贈呈品調製の爲めに忙殺せられつゝあり今其重なるものを擧げんに三鞭酒、シエリー酒、葡萄酒、コーヂアル(甜酒)、ブランドー、精巧なる挿畫數十葉を有する博物書、望遠鏡、晴雨計、切子洋燈、美麗なる彫刻を施したる注酒器、及び各種の雜詰果實等なり余は是等の物資を荷造するに當り日本人の手先の器用なるに感歎したり

余の將軍家謁見事件は今や野火の如く日本の各方面に傳唱せられ米國大使の謁見行列を見んが爲めに江戸に上るもの數百万人に達すべしとの風説行はれ居れり加之余が謁見の状況は日本特有の美麗なる錦畫となりて發行せられ其賣高非常の巨額に上りつゝありといへり日本に於ては未だ新聞の發行ふきを以て社會の出來事を報導する機關として此本版錦畫が各階級の人民に珍重せらるゝふり

九月朔日日本藩池部啓太太田黒亥和太庄村助右衛門に江戸詰中西洋砲術指南役並に世話役を命ず

〔相州御備場一件〕

覺

荒木甚四郎に

池部啓太

右者當詰中西洋流砲術廣致研究御備場並江戸表御家中之面々右之藝術指南候様被 仰付候

治兵衛三男

太田黒亥和太

右同斷廣致研究御備場並江戸表御家中之面々右之藝術稽古池部啓太に差添專致世話候様被 仰付江戸詰御奉行假支配被 仰付候

一兩人儀自然被遊 御出馬候節重士として被差出候

右之通可被達候以上

九月朔日

其方共支配庄村一郎助嫡子庄村助右衛門儀右同斷假支配被 仰付候

一助右衛門儀自然被遊 御出馬候節重士として被指出候

右之通可被達候以上

月 日

溝 口 藏 人

楯岡慎之助殿

郡 夷 則 殿

九月二日池部啓太太田黒亥和太等江川太郎左衛門に入門を命せらる

〔相州御備場一件〕

各儀西洋流砲術之儀江川太郎左衛門に入門被 仰付旨候間左様御心得委細之儀ハ御武器方可被承合候以上

九月二日

荒木甚四郎

池部啓太殿

太田黒亥和太殿

安政四年

九月某日幕府は米使登營の際沿道の取締に關する諭達を發す

〔尊攘錄皇武令〕

大 目 付に

近々亞墨利加使節出府ニ付通行道筋屋敷々々取締ニ不及假板圍等其儘差置不苦候持場々々掃除致し可申候

一屋敷前勝手桶立番等差出ニ不及往來之者も平常之通ニ通行可爲致候尤江番等に見計ひ固々之者差出置往來混雜之儀も

有之候ハ、取締役之者より申達次第制し方致し乞食等通行道筋爲立拂可申候

一途中に見物として罷出候儀棧敷取設又ハ長屋窓等へ大勢立出見物等致し候儀ハ堅無用たるへく候

一乗切之騎馬ハ成丈途中行違不申様可致候

一途中行違候節かさつケ間敷混雜之儀等有之候而ハ不宜候間家來末々迄心得違無之様急度可被申付置候

右之通向々可被相觸候

九月

九月十二日越藩橋本左内書を同藩村田己三郎に寄せて横井招聘に關し其主慶永と溝口藏人との問答の模様を報す

〔橋本左内全集〕(安政四年九月十二日在府橋本左内)

過日小拙前溝口藏人(橋本藩家老)御屋形へ被見前日中根氏御依頼の平(橋本藩士橋井)義は拙子も以前折々面會致候人

物にて隨分小氣象も有之候へとも兎角僻物故頭に他人と取合絶交等仕甚以困入申候此節も長監(長岡)と異論相始居候

由右様之者御承知なく御請待に相成後日不都合の事抔出来候ては御大切の御先柄様故甚以當惑に奉存候固より御借受

之御妨申上候。存にては聊かも無之と申上候處 御意には平(橋井)之辭は兼々承及居中候段々存付之處は懇厚感入

共何分當時其教官乏少手支に候間是非々々御借受申度後日不都合等の事御手前には少しも御心配無之と被仰候處其迄の尊慮ニ御坐候は、却て安心の仕合と申歸り居候由右藏人は有毒の語氣にては無之眞に御案申上候鹽梅の由中參(根中政) 抔も被申居候(本文中の括弧)

九月十四日日本藩管轄地變吏願の件遷延決せざるを以て糧食の窮乏を幕府に訴ふ

堀田備中守様

於武州多摩郡之内高一萬石餘今般越中守依願増御預所被仰付難有奉存候然處右郡村之儀は委細先書ニ申上置候通畑勝永上納專ニ付人數而已ニ而自然之節糧物之儀相調兼畢竟御預所之儀ハ備人數差出候節夫役並糧物之手當不差支様御備場に被附置候儀と奉存候處越中守御預所之儀相備四家之内ニ而ハ第一高少ニ有之其上身代高ニ應人數ハ多旁以人足並糧物之備共多分及不足則御取米高別紙之通ニ而外御三家ニ比候ハハ莫太之不足ニ而國許ハ遠隔自力を以相調候儀如何體ニも仕法付兼不得止増御預所之儀尙御取米多分之村方に御差替奉願置候儀ニ御座候處若相備之内隣村之事ニ而松平大膳太夫殿御預所之高ニ向合候様御調ニも相成候而ハ乍恐初發御備場受持被仰付候節松平大和守様御領分ハ全越中守御預所ニ被仰付井伊掃部頭様御預所分ハ悉皆松平大膳太夫殿御受持ニ可被仰付儀ニ相心得居中候處如何之御模様ニ御座候哉松平大和守様御領知之内ニ而極上村ニ而陣屋最寄之櫻山村外四ヶ村松平大膳大夫殿御預所ニ相成右代村ニハ以前井伊掃部頭様御預所鎌倉郡之内ニ而至而零落之遠村と御入替ニ相成家數貳百軒餘人數も多分相減候而已ならず御取米且遠近之不辨利等被是右ニ準以之外不幸を得元組合村々を始陣屋詰之者共ニ至迄自然之節無心元内輪甚安し兼候處より右村々双方御引戻被渡下候様追々奉願候得共不被爲叶無難増御預所之儀再應奉願候儀ニ御座候處御底を以願之通被仰付人足ハ兎哉角取賄候様相成難有安心仕候得共肝要之糧物及不足其上陣屋許並御當地方數里相隔居候村方ニ而急速呼出候都合も不宜數日往復之手間も相懸り一人之能之三人ニ而も陣屋最寄之村方ニ比候ハハ對兼候譯ニ相成申

候處松平大膳大夫殿御預所之儀ハ能村勝ニ而人數も澤山殊ニ陣屋最寄一圓ニ御座候ヘハ萬端辨利ニ相見越中守御預所之儀ハ右之通ニ而下地不幸を得候上此節増御預所相加り候而も遠境殊ニ御取米も無之旁以釣合兼加之高笠ニ而詰人數も多夫ニ准し糧物之貯も潤澤ニ無之而之第一氣配を碎且要務を缺候ハ勿論之儀ニ御座候處受場之儀も異船内海に乘入候節ハ每從泊辨利之夕所ニ而外相備之向と違堅メ人數等も別段多分ニ差出隨而糧米も餘計ニ貯置不申候而ハ平常も甚手薄ニ御座候間此上ハ御取扱筋御差障も難奉計村所遠近辨不辨之儀ハ奉願間敷候間何卒御取米高之儀ハ肝要之備向ニ拘り候品ニ付松平内藏頭様御預所御取米ニ向合候様之郡村何方ニ而そ急ニ御差替被仰付被下度偏ニ奉願候畢竟御備場多人數相詰候ニ付て八年々莫太之入費も相懸り約ル處國力及疲弊大切之御用難相動成行候哉も難計候間肝要之品々不足仕候而ハ却而不覺之基ニも有之御預所現實之用辨相調候丈ニ人數省減之説も追々差起候得共左候而ハ大切之御用柄自然手薄之沙汰ニも相成候而ハ格別御高恩を蒙り候家筋之儀尙更難相濟國力及候丈之儀ハ精々手を盡相動候覺悟ニ御座候得共右一條ハ遠國を隔何分不任心底不得止打返奉願候儀ニ而全體御預所増之儀ハ兼而心得不申嚴密之御格合多端ニ亘り候事ニ付不案内之役人共別而當惑罷在候別段人數及相懸り取扱せ候付而ハ夫ニ付余計之入費も有之乍恐所務方之儀ハ米壹俵ニ付擬登舛宛之口米未登貫文ニ付三十文宛之口米外不被渡下候儀ニ御座候得ハ中々右ニ拘り候役人共之雜費十ヶ一程之儀も出來不申其餘者總而越中守自勤を以取賄居候儀ニ而兼而ハ手元辨利ニ相成候儀聊も無御座却而入費且世話筋共相増候事ニ御座候ヘハ曾以相好儀ニハ無御座候ヘ共自然等閑ニ押移萬一之節差支申候而ハ公邊御爲筋ニ係り候様之儀有之哉も難計誠ニ以不容易受場之儀ニ付旁實用ニ基兼候而ハ平素詰方之者共抑揚筋ニも差障武事側方ハ勿論萬端手を置於役人共も大ニ心痛安シ兼候處より村替之儀も不容易御儀と奉恐察候ヘ共第一糧米之儀ハ自然之節之覺悟ニ係り何分差控難罷在無據内輪之情態共不願憚猶又申上候間幾重ニも御没取被成下前文不幸之稜ニ而松平大膳大夫殿に對兼候儀ハ責而糧物之備各別被増下候譯を以一統安着仕せ度奉存候間何分ニも松平内藏頭様に向合高人數ニ應候様別段御斟酌之御取扱伏而奉願候以上(本文申請に依り十二月十日一日村替の令達を想たり)

九月十四日

細川越中守家來 吉田平之助

本文添附之別紙

- 一五千八百八拾石餘 松平大膳大夫殿御預所御取米高
 - 一七千九百四拾石餘 松平内藏頭様右同斷
 - 一六千八百貳拾石餘 立花飛騨守様右同斷
 - 一三千五百四拾石餘 越中守右同斷
- 右之通凡ニ御座候

九月十八日本藩池部啓太江川塾の學頭となる

〔相州御備御用一件〕

以別紙申建候池部啓太儀炮術師範江川太郎左衛門殿に入門被 仰付答ニ付其趣高島喜平を以申入候處最前同人方皆傳免許相濟居候付御逢有之候までニ而別段入門之手數者無之其後一昨十八日罷出候節學頭被申付候由啓太方相建申候委細之儀者荒木甚四郎方御奉行に申向候由ニ付此段爲可申建如是御座候以上

九月廿日

溝口藏人

御家老宛
御中老宛

十月七日来使ハリス下田を發して江戸に向ふ

安政四年

〔維新日交の米外真相〕(ハリス日記)

十一月二十三日 (月曜日)

午前七時余等は江戸發向の途に就く此朝天氣晴朗にして响々たる朝暉寒林を照し一時廓然として神氣飄爽たるを覺ゆ余は馬上にありて四邊の風光を指顧しつゝ進む米國國旗は余の馬前に掲げられて朝風に翻るあはれ僻遠の地に鎖されたりし此星條旗よ今や堂々として將軍の城下に向ひつゝあり旗若し靈あらば今日の首途を如何に見るらむ
柿崎の總領事館を去ること約一哩にして中村に達す茲には騎馬の一隊余を待ち受けて列に參して進む余の先驅は陸軍大尉の階級に居れる木村氏にして余と同じく馬上に跨り別に一挺の乗物と數名の擔夫及び侍臣從ふ氏の馬前に三人の若者あり各竹竿を携へ其先端に紙旗を附着し之を打振りつゝ代る／＼と居る／＼と叫ぶ「下に居ろ」とは「坐せよ」といふ義にして余の前面約四百ヤードの距離に於て之を聞くに其呼聲一種の節調を帯び全く音樂的なり「木村氏に次ぎて米國國旗は二人の護衛兵に護衛せられて進む次に余は六人の警士に圍繞せられて進む次に余の乗物は十二人の擔夫によりて運搬せられ彼等の頭目は余の靴を捧げたり次にヒュースケン氏は同しく馬上にありて二人の警士に護衛せられ其乗物又若干の擔夫によりて昇かれつゝ續きたり是より以下余の寢具椅子食料品トランク及び總べての物資を納めたる荷物を運搬する者幾十人蜿蜒として山路を進むの狀又一奇觀なり
下田副奉行は其長大なる行列を卒て余の一行に續き柿崎代官奉行の秘書役等亦之に續きたり日本の蘭語通譯官は籠に乗りてヒュースケン氏の馬側に從ひたり前記の行列は總數三百五十名に上り堂々たる大諸侯の道中に譲らするの觀より特に余の感じたるは總べての擔夫は日本里程二里即ち約五哩を進む毎に豫備擔夫と交替し以て其疲勞を休め其勞力を平均せしむる一事ふりき(略中)
本日の旅程は十五哩に過ぎざりき下田川に沿ふて坂路を登攀しつゝ河水糸の如くふるに至りて頂上に達す之を梨本村

と云ふ此村は戸數僅かに百戸に満たざる寒村ふるも老杉巨松茂生せる間に位置して頗る自然美に富む特に余の旅舎に充てられる寺院の如きは村中の最高所に位置して遠山近岳一時に集り欄に倚りて下瞰すれば梨本の全景百五十呎の眼下に展開す此日餐作に於て晝餐を取る

十月十一日幕府は米使ハリス來ル十四日を以て着府すべき旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕

堀田様御渡

大目付に

亞墨利加使節來ル十四日江戸着之事

十月十一日

十月十一日藩主齊護書を世子慶順に與へ米國官吏登城につき閣老に質問の件了承の旨を答ふ

〔神庫文庫 上丙 三十三番 六百五十五〕(齊護自筆)

別紙令披見候現此度米利幹官吏登城 御目見被 仰付候儀其御主意難相分因而同席相談之上閣老へ相伺候ニ決定ニ相成候由ニ而被申越趣い才令承知候右返答如此候以上

十月十一日

十月十四日米使ハリス江戸に至る

〔維新日交の米外真相〕(ハリス日記)

十一月卅日 (月曜日)

本日は愈々江戸入の日より是れ余の生涯に最も記念すべき好日ふるのみならず日本の開國史上更らに重要なる記念日

と云はさるべからず思ふに將軍が江戸に於て外國使臣を召見するは余を以て嚆矢とふすべく而して余が企畫しつゝある通商條約の可否如何により日本の國運に至大の影響を及ぼすべし余は將軍及幕府の意嚮萬一鎖國に傾く事あらば大使の威力を示し其迷夢を一掃せんとするの決心を有す

午前八時に至らざるに早くも川崎を出發し行くこと幾何もなくして六郷川を渡る此川も流れ廣くして底深く橋梁ふければ渡船に依りたり余は此日馬上にありて江戸に入らんとしたるに下田奉行は大に之を讚し荐りに乗馬を勤めて止まず余却つて彼の意嚮を疑ひ百方言を設けて其實情を知らんと努めたる結果奇なる事實を發見したり即ち三百諸侯の參勤交代の爲めに江戸に来る者僅かに數名の大諸侯の外は乗物の儘にて江戸に入るを許さず孰れも馬上若くは徒歩するを例とす然るに今副奉行の余に乗馬を勤むるの意は陽に余を尊敬して余の言に従ふか如くにして其實西人疎外の官吏根性に外ならず余は此情偽を看破したれば故らに馬を捨て、乗物を選びたり品川に着するや余の行列を變更して下田副奉行最先頭に立ち凡ての從者機夫に至るまで悉く一列とふしたれば行列の長さ一哩に餘りたり而して此長大なる行列が石をも煉瓦をも敷かざる路上を足拍子揃へて靜かに練り歩き塵埃濛々として天に沖するには少からず閉口したり道路の廣さは四五十呎に及ぶべく兩側の人家は悉く木造にして屋根には瓦を葺き二階建より高きはあらず品川に着きてよりは見物の數益々増加するも絶えて土下座若くは拜伏する者を見ず官吏警吏等は殆ど百二十ヤード毎に佇立して余に叩頭の禮を行ふも人民は却つて直立して余を諦視したり

此日混雜を防ぎ且つ不逞の徒に備へんが爲めに各横町の木戸は悉く之を鎖し一般の通行を止めしが尙ほ余の通路の左右には見物の堵を築きて旅館に入るまで少隙を餘さざりき余は乗物の中にありて此群衆の數を十八萬五千人と概算したり蓋し品川より余の旅館までの距離を七哩と見積り其間に列を作れる見物は幅二呎毎に一人と假定し人牆の厚さ五人と計算したるより然かも沿道各戸内に充滿し或は屋根の上に黒山をふしたる人數は此計算外にして若し之を加ふれば百萬を超えたるやも知れず

見物の群衆は孰れも美服を纏ひ血色活氣を帯び然かも靜肅にして秩序を保つ風あり之を歐米文明國の人民に比するに耻つる處ふかるべし而して彼等を取締らんが爲めに數百名の警官配置せられたるも見物が意外に順良なりしを以て聊か手持無沙汰の觀ありき日本の警官は兩刀を手挟む外に長さ二呎直徑一吋計りある鉄桿(十手)を手にあり此武器は不逞の徒を懲らすに最有力なるも余は此日一回だも使用せらるゝを見ざりき其他人民の列の前には道路取締役ありて絶えず「吐ッ、」と叫び「下れ、」と叫びて余等の道路を開くに努めたり

斯くの如き光景の内に余は七個の橋梁を渡りしが其の第六橋は「日本橋」と稱し恰かも經緯度時間等の計算起點を英ゲリオンウキツチに取るが如く日本全國の里程は此日本橋を起點としたり

日本橋を通過するや余等の行列は北に西に向つて進み幾何もなくして一の濠渠に達したり此濠は將軍の居城を繞れる濠濠なるものにして其對岸には堅牢なる石壁あり其高さ地勢の起伏に従つて一様ならずも二十呎乃至四十呎に達するが如し余等が此濠に沿ふて進むこと約一哩に及びし頃巖天は一切に其進行を速めしと見る間に余の乗物は巨大なる門を入り厳しき玄關の式臺に昇き据へられたり斯く乗物を屋敷の内部まで昇き入るゝは非常の好意を表する所以にしてフューステン氏の如きは表門にて乗物を下らしめられたり

余等の旅館に着するや下田にて舊知なる井上信濃守余を出迎へ直ちに各室を案内して其設備を見せしむ余は不完全ながらも西洋家具を以て裝飾したる苦心を諒したり

余の専用に供せられたるは居間寢室食堂にしてフューステン氏も亦余の隣房に居間と寢室とを與へられたり此外余の應接室は活動する壁の開閉に依りて室の大小自在なる装置を施されたり此活動壁は日本家屋特有の設計にして之を換と名け如何なる家にも備へざるべく之に依りて或は分ちて數室を作り或は合して巨大なる一室をふす等最も便利の装置あり浴室は余の寢室に接して設けられ全く余の専用に供せらる余の旅館は極めて巨大なる建築にして政府の所有に屬し従前番書調所(ばんしょていごう)と稱して洋學の調査に充てられ實に日本に於ける大學の始祖なり

旅館の巡視を終るや井上信濃守は余の江戸入に對する政府の苦心を語りて曰く「貴官入府の風説は夙に國內に知れ互りたれば見物の爲めに江戸に入り込む者數百萬の多きに上り滔々として底止する所なくんば或は狂人若くは固陋の徒危害を加ふるふきを保せず而して之が取締に遺憾ふからしめんと欲せば勢ひ見物人の來集を制限するの必要あり茲に於てか老中會議の結果町奉行に嚴命を下して昨夜來全く江戸の各見附を封鎖し出で去る者は之か通過を許すも入り來る者は一人も之を許さず尙ほ本日貴官の通路には特に警戒を嚴にして事變の發生を豫防するに努めたり幸にして幕府の苦心其効を奏し無事ニ貴官を當旅館に迎ふるを得たるは老中一同の深く欣幸とする所なり」と余は之に對して深厚ある謝意を表したり

井上信濃守は更らに語を繼いで曰く「貴官は強大なる國家を代表して來れる使節ふれば將軍に於ても特に歡迎の意を表せんか爲めに攝伴委員八名を任命したり」と余は曩に下田に於て厚遇の美名を以て探偵を身邊に附せられしことあるか故に今回の接待委員は亦た斯る秘密的任務を有するふきやを疑ひしも全く余を歡迎するの他に何等の意味ふきを知りたれば直に之を快諾したるに信濃守は委員連名録を余に指示したり即ち左の如し

- 一、土岐丹波守頼旨
- 二、林大學頭 輝
- 三、筒井肥前守政憲
- 四、川路左衛門尉聖謨
- 五、井上信濃守清直
- 六、鶴殿民部少輔
- 七、永井玄蕃頭尙忠
- 八、塚越 藤助(ツノ)

右の内林大學頭と鶴殿民部少輔とは去る一千八百五十四年(安政元年)ペルリ提督第二回來航の際親しく談判の衝に當りて神奈川條約を締結したる人なり此時幕府より特使來り明朝將軍より余の安着を祝する爲め使者を派遣すべき旨通牒せらる

余は堀田關老に對して一書を裁したり書中には第一に余の安着を報じ第二に余は米國大統領の國書を持參せる旨を通

知し第三に將軍謁見の時日を質問し其他二三の要件を記したり井上信濃守は此書翰を自ら關老に傳達すべき旨語られしを以て即ち氏に托したり斯くて純日本式の饗應を受く日本の食膳は一人毎に之を別にし階級に依りて其高低を異にせり余の食膳は高さ十時ありしもフュースケン氏の分は四時の高さありき

余は滞在中の經費は一切余の負擔に歸せんことを提議し是れ歐米の慣例あるを附言したるに信濃守は之を拒否して曰く「貴官は幕府の貴賓ふれば幕府の支給せる凡ての物に對して代價を拂ふは禮にあらざされど貴官の從者が市中に於て各自の買物を必ず場合には則ち代價を支拂ふを助けず」と余は下田より料理人を拉し來りたれば食料品は彼をして市中より直接購買せしむれば足れりと爲し信濃守の提言を認諾し茲に多事ふりし江戸入の日を終り信濃守は辭して歸れり余は甚しく疲勞を覺えぬ

十月十八日幕府は來廿一日を以て將軍米使を引見する旨を達す

〔相州御備場御用一件〕

十月十七日備中守殿御渡十八日觸

來ル廿一日亞墨利加使節登城御目見被 仰付候禮席に不拘向者慰斗日半袴着用候様向々に可被相達候事

十月

十月十七日備中守殿御渡十八日觸

大 目 附に

來ル廿一日亞墨利加使節登城御目見被仰付候御以前使節御目見之席致案内爲見習禮爲致可被申候尤下田奉行並通詞
茂附添候事

一使節に御座敷爲見候前ニ出仕之面々大廣間に相廻詰候席々ニ可罷在候事

安 政 四 年

右之通可被得其意候

十月

十月十七日備中守殿御渡十八日觸

來ル廿一日亞墨利加使節登城御目見被仰付候付先達而相達候面々五半時登城候様可被達候

十月十七日

十月十八日米使ハリス閣老堀田正篤を訪ひて謁見式辭の事を議す

〔維新日米外交の真相〕(ハリス日記)

十二月四日(土曜日)

午前十時堀田閣老を訪問せんが爲に旅館を出發す井上信濃守其從者と共に同伴す余の行列は江戸入り當時と同じく唯だ荷持料理人等を缺けるのみふりき閣老の居宅は千代田城内にあり途中幾度か湊濠を超え石壁の見付を通過したり此邊は一帯に大名屋敷櫛比し其從臣各々街路の警戒に當り武者窓よりは余の登城を見んとする女性の首無數に列立したり然かも余は彼等の服裝に就ては毫も見ることを得ざりき

聽て閣老の邸に到達するや余の分を除くの外凡ての乗物は表門の外に下されたり余の乗物を擔へる陸尺は閣老の門を去ること約百五十碼(我が一町と十五六間)の距離より急に其歩調を整へ門を入るや全速力を以て玄關に進み式臺の上に横着にしたり茲には清淨なる敷物を敷き陳ねて余を歓迎したり

余の乗物を出つるや余の草履持は直ちに新たなる革製の日本靴(革足袋の事か)を余に勧めたり日本人は凡ての階級を通過して戸外に於ては藁製の履物を穿つも一度室に入るや悉く此草履を脱ぎ捨て、足袋のみとふるを常とす是れ日本の躰は世界特有にして卓子寢臺卓子及段床等の用を併有するが故に常に清潔を保つるの要あればあり

玄關に於ては袴の禮装をよしたる三十名許りの武士拜伏して余を迎へ夫れより右折して進むや余の接伴委員等は舉つて茲に出迎へ土岐丹波守一同を代表して寒暄を叙し敬禮を交換したり斯くて或る一室に導かるゝや余は其所に余とヒュースケン氏との爲めに特製せられたる二脚の椅子を發見したり是れ余の常用せる椅子を模造せるものにして其手際極めて巧妙あり而して黃銅製火鉢には炭火を活けて暖を取らしむ待つこと少時にして二箇の卓子は運はれ其上に煙管と煙草と煙草盆とを載せたり按排終るや贅澤なる日本式點茶を饗せらる是れ茶の粉末に熱湯を注入して攪拌し泡沫出づるに至りて客に見するふり故に日本語にて之を「茶の湯」と云へり取つて飲むに外見よりは味ひ大に美ふり

余の喫茶を終るや直ちに閣老に面會さるべきやを問はる余は然りと答ふるや換はスルノと左右に滑走し茲に初めて日本政府の總理大臣兼外務大臣たる堀田備中守と會見の幕は開かれたり余と閣老とは黙禮を交換したる後閣老は更らに余等を導きて會見の室に入れり茲には一方に二脚の歐洲風椅子併列せられ之に對して十脚の日本風黒漆の床几置かれたり聽て閣老は鄭重に余の着席を請ひ然る後自身も着席し同時に各接伴委員等も室に入り余に一禮して件の床几に凭れり

相互の席定まるや閣老は壯重の口調を以て余の健康を祝し且つ萬里の波濤を越え幾多の邦國を通過して遠く極東に來任せるの勞を犒ひたり蓋し閣老は頗る外國の事情に通曉し印度以東の外國航路に於て經過せる邦國を知悉したり余は之に對して深厚なる謝意を表し且つ外交上の任務を負ふて江戸に來れる外人は余を以て嚆矢とふす余は此意味に於て最幸福ふるを覺ゆと答へたり

挨拶終れば數名の家臣各々一個の卓子目八分に捧げ摺足の音靜かに室に入り各人の前に排列したり次に煙管、煙草、日本茶、及三寶に載せたる菓子各人に勸む此三寶の高さは余と閣老との分は同一にして他より數吋高かりき閣老は親しく余に菓子を勧め且つ自己は喫煙せざる旨を謝したり而して彼れは亦た余の禁酒主義を知るが故に特に酒宴を省ける旨を陳謝したり

安政四年

暫時四方山の談話を交換したる後余は將軍に謁見の際述べべき式辭の寫しを閣老に渡し且つ該式辭は専ら簡明を主とし繁褥の言辭を省ける旨を附言したり茲に於て閣老は少時退席して該答辭を翻譯研究すべき旨を述べ余と井上信濃守のみを残し各接伴委員を拉して去れり此日日本の通譯官は如何なる故にや終始病を患ふるか如くに身體顫動し其前額よりは念珠の如き汗を流したり余の席は床の間の前に位し左右に漆器製と黄銅製の火鉢を置きて暖を取るに任せしが此火鉢には灰の代りに雪白の坭石粉を入れ之を日本の聖山たる富嶽の形狀に盛り上げ頂上には炭火を置くべき門所を設けたること恰かも富士山頂の噴火口を擬せしが如し

待つこと約三十分間にして閣老は席に歸り余の式辭は研究の結果全く満足すべきものあるを述べ同時に之に對する將軍答辭の寫しを余に交付したり是に由り之を見れば將軍は全く閣老の作製せる文句を代讀するに過ぎず閣老の威權亦盛んある哉閣老は更に附言して曰く「將軍の面前には通譯官と同伴すること能はざるを以て豫め將軍の答辭を余に交附するより之を翻譯して持參さるれば別に日本通譯官を伴ふの必要ふければなり」と用談茲に果てたれば余は起立し別れの敬禮を交換し堀田閣老は余を送りて先刻余を迎へたる部屋に至り茲に再び最後の敬禮を交換して閣老に分れ次で各接伴委員に訣別して玄關に出つれば多くの家臣は復も以前の如く並列して余を送り余は其敬意を受けつゝ乗物に乘れり初めの會見に於て余の印象に残りたる堀田閣老は三十五歳許の壯年政治家にして快活聰明ふる風貌を有し其音吐は低けれども音樂的なりき

十月十九日日本藩管轄地の變更に關し更に幕府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

此案文十月十八日吉田持參川路左衛門尉様並組頭兼へ入御内見候處御存寄無之案文之通早々堀田様に差出候様御申聞翌十九日差出ニ相成候

堀田 備 中 守 様 に

今般越中守に増御預所被仰付候武藏國多摩郡之儀者畑勝永上納専ニ而自然之節糧米之備相調兼候付而者最前村替之儀奉願置候通御座候處今以御沙汰無御座年内内繼ニ相成若當冬之御所務方來年ニ追送取扱候様ニ茂相成候而者第一懸念仕居候肝要の糧米來暮ニ至不申候而ハ相調兼口米永之儀も當暮不被渡下候而ハ役人共取扱方彼是甚以難澁之次第ニ付何卒急ニ御沙汰被成下候様偏ニ奉願候尤村替之儀者巨細奉願置候通松平内藏頭様御預所御取米高ニ向合候丈之村方御差替被成下候者縱令國郡違所々ニ而被渡下取扱筋等繁劇不辨利御座候共糧米之備充分相調候譯を以御備場詰之者共に安着仕候様相論可申候得共自然御取米高内藏頭様よりハ相減其上郷村數ヶ所ニ隔り被渡下候様ニ茂御座候而ハ御預所引除役人共郡村之取扱筋大小となく別途ニ取分萬端大ニ手數相増不案内ニ而ハ尙更往々共困窮仕候儀ニ而無餘儀重而奉歎願候様ニも御座候而ハ重疊奉恐入候付何卒願之通御取米高充分之郷村ニ御差替被成下候様若自然右様之御場所如何躰ニも難被渡下御模様ニ茂御座候之多摩郡之内ニ而江戸最寄御取米專之村方一郡限被渡下候様奉願候左候ハ、兼而御内意仕置候通江戸表に引付置候人數御備場等に繰出候節之辨利故其譯を以糧米之備内藏頭様に向合兼候段者相論一統安着爲仕大切之御用柄一際出精爲相論可申と奉存候間再應手元勝手之事而已申上候様ニ而不容易御儀別而奉恐入候得共畢竟御預所且替村等之儀再三奉願候儀茂根元御備場相備之方々に對兼樞要之人夫並糧物之備及不足候處より不
得止奉願候儀ニ付何分御汲取被成下免茂角茂此節安着之場ニ至候様急ニ御沙汰被成下候様猶又御内意申上候以上(文
再申請に基き十二月十一日所
管村變更の幕令を受けたり)

細川越中守家來

吉 田 平 之 助

十月十九日

十月廿一日米使ハリス登城して將軍に謁見し國書を進む

〔相州御備場御用一件〕(國書は十二月廿九日の條に出づ)

安 政 四 年

九二九

- 一 亞墨利加使節登城御目見就被仰付溜間詰牧野備前守松平和泉守御譜代大名同嫡子高家雁之間詰同嫡子御奏者番同嫡子菊之間椽類詰同嫡子布衣以上之御役人法印法眼之醫師登城
- 一 出仕之面々直垂狩衣大紋布衣素袍着之
- 一 下田奉行使節召連登城通辯官も大手下馬令下駕使節も下乘橋外ニ而下駕役々附添下田奉行令案内御玄關階上ニ大目付一人御目付一人出迎一掛之後令案内使節者殿上間下段御襖之際北向ニ罷在通辯官者同所西之方御張付際ニ在之何も橋令蕭下田奉行差添罷在書簡者臺ニ載之使節之脇ニ置之
- 一 御用掛之面々一同出席及挨拶
- 一 出御以前大目付御目付案内ニ而使節殿上間より大廣間御車寄之際假控所ニ相違書簡者通辯官持之相從此所ニも下田奉行差添罷在大目付御目付ハ二之間板縁ニ着座

一大廣間

出御御立烏帽子御小直衣

御先立

内藤紀伊守

御太刀

御刀

御上段御厚疊七疊重錦を以包之四之角大總附之

御曲糸ニ出御

- 一 御上段御中段御下段並御縁通御雁掛之御上段兩脇之御雁者垂之中一開揚之二之間三之間四之間御縁類御雁掛卷上之
- 一 御後座ニ御側衆御太刀之役御刀之役奥向之面々伺候
- 一 御下段之方上より一疊目通より松平譜岐守井伊掃部頭松平越中守松平民部大輔松平宮内大輔酒井雅樂頭牧野備前守松

平和泉守順々着座

- 一 同所東之方上より一疊目通より年寄共着座
- 一 御中段西之御縁類ニ若年寄並御後座ニ伺候無之御側衆着座
- 一 御下段西之御縁類ニ疊敷之高家列居
- 一 南板縁次ニ諸太夫之雁之間詰同嫡子御奏者番同嫡子菊之間縁類詰同嫡子番頭芙蓉間御役人列候
- 一 二之間北之方二木目柱之邊より御襖障子際東之方四品以上之御譜代大名列候
- 一 二之間ニ諸太夫之御譜代大名同嫡子三之間ニ布衣以上之御役人法印法眼之醫師列居
- 一 出御之節ニ至大目付より下田奉行に會釋有之而下田奉行使節召連二之間板敷ニ控在之書簡者通辯官持之引續而罷在
- 一 備中守御前を伺使節可差出旨御奏者番大目付に會釋大目付より下田奉行に會釋候時披之御奏者番御下段下より二疊目東之方ニ罷出下田奉行使節召連罷出御下段御敷居際板敷ニ着座使節御下段下より二疊ニ罷出拜禮通辯官者書簡を持板縁ニ罷在此時亞墨利加大統領使節を披露使節御下段下より四疊目ニ而又拜し御下段上より三疊目に進謹拜大統領之口上申上之舉而一拜上意有之其時通辯官書簡持出使節に渡之板敷に退備中守座を立書簡請取之復座使節謹拜御會釋有之使節最前之通御下段下より四疊目二疊目ニ而謹拜而退去下田奉行差添大目付御目付令案内御車寄假控所に退去此間若年寄一人西之御縁類通御下段に罷出備中守より書簡請取之西之御縁に退座奥御右筆組頭に渡之相濟而御間之御襖障子開之御下段御敷居際立御御譜代大名其外一同御目見相濟而入御
- 一 但御料理者旅宿ニおゐて被下之
- 一 通辯官に之被下物も下田奉行より相渡之
- 一 御前邊ニ而者通辯無之控所ニおゐて下田奉行通詞を以譯解之此席より以後通詞等差罷出此方口上者下田奉行通詞に申聞及通辯使節口上ハ通詞譯之下田奉行承候而申聞之

押ららそミ

濃茶

杉緑高

黄龍設頭

菓子

水くり
河草
黒もじやうじ

薄茶

同

後菓子

金平糖
紅いらふ付
白石飴
宇治の星
白菊形落雁
黄木絨巻
杉よふし

以上

通辯官にそ木地足打ニ而奈良臺押無之塗燭鍋ニ而差出候事

〔維新日米外交の真相〕(ハリス)

十二月七日(月曜日)

將軍謁見の當日なり余は午前十時旅館を出發す從者行列凡て前日堀田兩老を訪問せる時に同じ唯た此日の從者は悉く袴を着け袴は僅かに膝關節に至るものにして下脚部は全く露出せられたるは奇異の感ありき此日余の服装は米國國務省に於て制定したる大禮服の金色燦爛たる裝飾を施せる上衣に狹袴は兩方に廣き金筋入りたるを着し帽子は烏毛鬘々たる文官大禮服帽に金總を飾り劍は腰に眞珠を鑲めたる長劍を佩びたり登城の路程は兩老訪問の際と同じく大名街の見物亦た前日の如し第一の涅槃に至るや余と信濃守とを除くの外凡ての乗物は棄捨てられたり第二の橋を渡り堅牢なる城門と升形と稱する方庭を通過して尙進行を續けしが四方の景物單調にして何等の變化なく井上信濃守の説明あるに非れば余は同一の場所を往復し居るの感なき能はざりき

斯くて最後の橋梁に達する前約三百碼に於て信濃守は乗物を捨て、徒歩し余等の乗馬信濃守の乗物槍及其他從者は特別の任務ある者の外一切之を全所に止めたり然かも余は尙乗物を下らずして最後の橋上まで昇上げられたり信濃守の談に依れば此橋上まで乗物を進むるは日本人にありて至難の事に屬すと余は茲に於て乗物を出で大統領の親書をフェリスケン氏に捧持せしめたり該橋を渡りてより更らに進むこと百五十碼乃至二百碼にして余等は初めて迎接館に到達したり斯くて余等が玄關を入らんとするや二名の官吏出て來りて一揖し余等を導きて一室に入りしが茲には二脚の椅子と美術的なる火鉢は要意せられ煙草は出されざりしも點茶の禮應を受けたり

殿中に於ける各高等官者流の服装は奇妙極まるものありき即ち其袴は長さ六七呎に及び歩行に當りて背後に餘端を曳き宛として膝行するの觀あり肩衣着けたる兩肩は雙翼を張れるか如く長袴は矮少なる日本人を一層矮少ならしめ其狀恰かも夢中の人を見るが如し若し夫れ彼等の冠に至りては更らに奇を極め到底筆舌の克く説明し得る所にあらず即ち大體の形狀は蘇克蘭のクルマノック帽の如く黒漆を以て製せられ之を僅かに頭部の頂上に載せ前部は額部と垂直の邊に達するに過ぎざるも背部は後頭部よりも遙かに後方に延長したり而して此不思議なる冠は容易に墜落するの恐あるが故に華麗なる絹の打紐を以て頸部に結び付けられたり

友人井上信濃守は將軍謁見の際余が東洋の儀禮に不熟なる結果萬一不敬に亘るか如きことありては大變ふりとして余に謁見の豫行演習を爲さんことを勸告したるも余は靜かに之を拒絶して曰く「凡そ世界各國に於ける皇室の儀禮は自から一定の法則あり余不肖と雖も外交官として貴國に來任し今日大使として將軍に謁見するに當り豈に粗野禮を失するか如き舉に出でんや余を引見するに際して貴國の取るべき儀式の詳細は貴官の説明に依りて既に之を了承せり而して余が大使として大統領の意を將軍に言上するに當りては即ち泰西の儀禮に則るべきは論なき所あり」と信濃守の此提議は敢て余を輕侮せるものにあらずして余の舉措が不要意の内に同席者の反感を招くことよからしめんか爲めの老婆親切に出でたるは余も亦之を認む然かも信濃守は此豫行演習の爲めに既定の謁見時刻より少しく早目に余を殿中に伴ひ來りたれば今や演習中止と共に余は次の間に下りて謁見時刻の到來を待つことよふれり

間も無く謁見時刻に達せるを以て余は再び謁見の間に進入したり而して數多の大名袴の禮裝にて次の間の兩側に平伏

せる間を余は瞰下しつゝ進みしは聊か氣の毒の感ありき斯くて大名の列の先端に至るや余は彼等の右列の先頭に直立しヒュースケン氏余の背後に追隨し信濃守は余の前面にありて膝行(原註)（兩手と膝とを以て匍匐す）して進みたり廳で台圖に依りて信濃守更らに膝行して謁見室に案内し余亦た其後に從ひ室に入るや侍従は一聲高く「アンパツサデー、メリケン（米國大使參上の意）」と呼びたり茲に於て余は室の入口より進むこと六歩にして停止敬禮し次に室の中央まで進みて再び停止敬禮し次に室端より十呎許りの所まで進み右には堀田閣老左方には御三家と稱する將軍の近親と並列して停止し三たび敬禮を行ひたり而して閣老を除く他の五老中は何れも堀田備中守の下位に併列して拜伏したり居ると爰時にして余は左の演説を試みたり

「謹んで陛下(原註)（ヒス、マゼスチーの稱號を用ひたる）に奏上す北米合衆國大統領は特に外臣を遣はして茲に信任狀を捧呈せしめ恭しく陛下の健康と洪福を祝し併せて貴國領土の安寧を祈るの意を傳へしむ 陛下の宮中に於て斯る高遠重大なる任務を盡さんが爲めに北米合衆國の大使に選任せられたるは深く外臣の光榮とする所ふり庶幾くは外臣の熱心なる努力に依りて日米兩國を結べる友愛の紐帯は將來益々鞏固を加へんことを」

余は演説を終りて辨したり暫時沈黙の後將軍は其右足を踏鳴しつゝ其首を左方に曲けて背後を見らるゝこと再三ふりしが漸やく壯重典雅なる態度と音吐を以て左の上意を賜はりたり

「萬里の異域を遠しとせずして貴大使と國書とを送りたる大統領閣下の盛意を喜び併せて今日貴大使を引見して鄭重なる祝辭を寄せられたるを謝す願くは日米の親好永久に繼續保衛せられんことを」

茲に於て室の入口に直立しつゝありしフュースケン氏は三拜の禮を行ひつゝ大統領の國書を以て進み出で余の傍に来るや外國事務專任なる堀田閣老は起立して余の右方に併列したり余は先づ匣を被へる絹を除き次に匣を開きて國書を取出しつゝ之を閣老に示し而して再び之を匣中に收めて手つから閣老に交附したるに閣老は兩手を以て恭しく之を捧げ受け美麗なる蒔繪の臺上に之を置きたり次に余は再び將軍に面せしに將軍は謁見の式終れりとの意味に於て余に鄭

重なる會釋を賜はりたれば余亦一揖して退くこと數歩停止して再辨し又退きて三揖し而して此光榮ある室を去りたりし謁見終りて次室に退き喫茗休憩中賜宴の形式に就て端ふくも一場の議論を生じたり即ち日本官吏の云ふ所に依れば殿中に於て特に余とフュースケン氏とに限り午餐を賜はるべしとの由あるも余は此賜宴には御三家の一人若くは閣老自身陪食せられんことを要求したるに日本官吏は是れ古來の儀式に其例なき所あるを以て之を拒否したり茲に於てか余は泰西諸國に於ては賓客を饗應するに當りては必ず其家の主人若くは主人代理が宴に列して親しく式を掌るを常例とし賓客のみが單純に饗應せらるゝか如きは斷じて之なきを辯明したり然かも此點に於ける東西兩洋の儀禮は到底一致せざるか爲めに終に賜宴の事を中止し饗應は之を余の旅館に傳送せらるゝことゝふりて此問題を解決したり

次室に下りて間もふく堀田閣老來りて謁見式の無事に済みたるを祝し且つ將軍よりの下賜品ふりとて箱に入れたる絹三巻を余に贈れり余は閣老の盡力に對して敬意を表し又下賜品に就て甚大の謝意を將軍に言上せんことを閣老に托したり談話終りて後互に長揖して余は玄關に出てしが玄關附近まで見送られたる堀田閣老と再び最敬禮を交換して式臺に下りたり茲には以前余等を導きたる官吏二名待ち受け居りて再び訣別の敬禮を交換し余は乗物に座乗し以前の路程を踏みて歸途に就きたり

此日將軍は普通の床上より約二呎高き上段の席に於て椅子に凭り其面前には御座を下げ重き總を付けたる太き絹紐を以て之を絞り上げた然るに式部官が此御座の絞り方不充分なりしか爲め余の位置よりは全く將軍の冠を見ること能はざりき蓋し余にして日本人の如く二三吋短身ふりしふらんには將軍の冠を見得たるべきふり而して後に聞く所に依れば將軍の冠は黒漆を以て塗られ恰かも半鐘を逆さまに懸けしが如き形状ふりしと將軍の服装は他の廷臣と様式を異にし外衣は寛潤にして袴は普通の長さを有し衣装は固より絹にして少しく金糸を織込まれ敢て華美ふらざるにあらざれども高價なる寶玉燦然たる黄金等を以て裝飾せらるゝことふく其欄を金剛石を以て纏めたる歐洲皇帝の寶劍の如きは將軍に於て佩用せざる所否ふ歐米各國に於て少しく贅澤なる者は一私人と雖も遂に日本の將軍よりも美麗の衣服を

着すべく余の大禮服の如きも寧ろ將軍の服装よりも高價なるの觀ありき
 質素は單に將軍の服装に止まらずして殿中の各室には殆んど裝飾と稱すべきものなく排置されたる器具は單に幾個かの火鉢と余等の椅子二脚のみありき
 余等の歸館後間も亦く下賜の料理到達したるが何れも純日本式の料理にして頗る見事なりき而して飾物は小さき櫃と鶴龜の作物にして是れは何れも長命を壽く象徴あり
 然かも斯る見事なる料理も余は一片だも食すること能はざりきそは余の歸館後急に惡寒を覺え肺部に痲衝を起し恐るべき瘡に罹れるが如く身軀戰慄したればより依つて井上信濃守に一書を裁し以前下田在任中同氏の紹介に依りて英語を教へたる醫師を迎へたり彼は余を一診したる後余が下劑を用ひたるを聞き更らに一服の發汗解熱劑を與へ余に與ふ限り多くの衣類を着し厚き寢具を纏ひて安臥すべく注意して歸れり

〔相州御備場御用一件〕

亞墨利加使節拜禮之節口上之趣和解

殿下の意に適はせ度事

マイエステイト合衆國大統領よりの吾か信書を捧る時殿下の安全幸福及び殿下の邦の繁盛のためマイエステイト大統領誠ニ願へるを殿下ニ述る事を予ニ命せり吾を合衆國全權使節の高大なる事を殿下の庭ニ於て全ふせん爲撰まましハ大なる名譽とす且兩國永久親切の緒を堅く結ふハ吾懇願なる故此良き日常を遂る迄隨ニ予か丹誠をなまへし
 亞墨利加國より差上候書翰和解
 亞墨利加合衆國のプレシデント、フランクリン、ピールセ日本大君殿下ニ呈す
 大良友

合衆國と日本との間ニ取結ひたる條約を修正して殿下の大國と合衆國と夥しき諸産物の貿易を是ましくよりも大に爲し

易き様取極得をしと思へり是を以て予此事件ニ就て貴國の外國事務宰相或は其他殿下の撰任せる役人と會談せしむる爲ニ此書狀の使として此國の人高貴威嚴なるトウンセントハリスを撰ひたり但此者は既に合衆國のコンシユルゼネラルとして殿下の外國事務宰相の信用を受ふり予合衆國と日本との親交を篤くし且永續せしめ兼而兩國の利益の爲ニ通商の交を増加する條約の趣ニ就て宰相或ハ其他の役人同意すへき事疑なしと思ふ殿下深切ニ高貴威嚴なるハリスを待遇して予のためニ殿下に申立る言を十分信用し給ひ事予ニ於て疑なしと思ふ予神の殿下を安全ニ保護せん事を神ニ祈念す予此書に合衆國の國璽を添へ華盛頓府ニ於て自ら姓名を書き

千八百五十五年九月十二日

フランクリン、ピールセ 筆

プレシデントより

セクレタリスフハンスタート 官名

ウエエレマルシ 筆

十月廿一日日本藩老臣等横井招聘の件は拒絶するを可とすへきの意をのべて藩主の下問に答申す
 〔神庫文書人印密書輯録 二十四印〕

横井平四郎儀越前守様より御所望之一條御不安心之筋被爲在於御家老共茂御同様ニ付御斷被 仰進夫ニ而被爲濟候得之御宜被爲在候得共此節御直書之趣且於江戸藏人に御直對之御様子ニ而之猶又御直ニ御頼談之筋茂可被爲在哉左様之節御答之御都合ニ茂可被爲成哉と申談候趣乍恐申上候此度福井表學問所御取建付而教官之思召ニ而御所望との儀ニ候得之往々御國家之御爲ニ可相成程之人躰ニ茂候ハ、折角御貸被遣候詮も可有之候處平四郎儀素より夫程之見識可有之様茂無之第一學流之内ニ之弊害を生し候躰之儀も有之御政事筋ニ付而茂不安意之筋有之處より於御國許をら選用不仕

人物強而御所望ニ被應候儀之於御家老共御請難申上段申上 上ニ茂御同様之 思召ニ被爲在候得之御托も不被爲出來 殊ニ御間柄御事を被分候而之御頼談筋ニ之御座候得共御望ニ被應候而之往々迄も御心痛之筋ニ付幾重ニ茂御斷被遊候 との御趣意ニ而之如何程ニ可被爲在哉之事

十月廿一日

十月廿二日米使ハリス書を閣老堀田正陸に贈りて談判開始の事を豫告す

〔維新 日米外交の真相〕(ハリス)

十二月八日 (火曜日)

此堀田正陸と改む

病勢昨日よりは稍軽減したるも尙不良の状態にあり堀田閣老に一書を送り深く日本の利害に關係せる件に就て重要なる會商を遂げんとことを豫告したり而して此會商は單に閣老との間に開始され或は他の老中とも同座することあるべき旨を附言したり

余は昨日の日記に洩らしたるが將軍より下賜せられたる料理は四五十臺の白木の三寶に乗せられ三寶の高さは余の分は十一吋にしてフユースケン氏の分は五吋ふりき而して此料理を食するに當りては別に細少ふる漆器の皿に分ち盛らるゝふり(中略)

午後信濃守は登城の歸途余を訪問し昨日の謁見に就て殿中の評判を語りて曰く「昨日の式に列席せる諸員は貴使が將軍の尊嚴に打たれて恐懼失措身は顛へ言語は訥吃するふらんと豫想せるに案に相違して貴使の態度の壯重にして其精神の沈着ふるに一驚を喫せざるふく何れも讚嘆の極米國人と和蘭人とは大に其選を異にせるを感じたり」と余は信濃守が更らに此種の評判を語り續けんとしたるを以て忙かはしく之を沮止したり

十月廿三日藩主齊護横井招聘の頼談に應ずる能はざる旨を松平慶永に答ふ

〔神庫文書人印密書輯録三百九十四印〕

(袖書)安政四年十月廿三日出 常盤橋へ返書案 松平越前守様

八月十二日之華翰相達致拜見候愈御安寧被成御入之旨恭喜之至奉存候從是こそ御無沙汰罷過申候然之於貴國學問所御取建御家中子弟教訓之筋世話御申付之處元來教官乏敷候上生員も増加ニ付而者老年之教官動向之繁劇ニ堪兼候趣も有之壯年之内ニハ御見込御座候而も今暫之處御取立被成兼候御氣味合も有之御當惑之由右付而家來横井平四郎儀ハ先年諸國游歴之砌貴國に茂罷越御家來之内而會相談等いたし候族も有之候而御聞及被成候由依之子弟教訓之世話として平四郎儀來冬迄御貸申候様御相談委曲被仰越候御端書之趣共具ニ承知仕候任其旨早速差出可申處右之者ハ御家中子弟教訓之世話といたし候教官之場ニ者至兼可申兼而不安心ニ付家老共にも得斗評讀爲致候處是以同様之趣申出候左候へハ差出候而も却而御用ニ相立申間敷御用ニ相立不申見込之者を差出候而ハ重疊不本意之次第ニ付何分貴命ニ應兼不得止御斷申上候折角之御相談無御據趣巨細御書中之通ニ而教官之助之端共相成候見込ニ候へハ早々差出可申候得共右之次第ニ付不惡御汲取可被下候くをノも御相談ニ隨兼候段心外之至奉存候復早略如斯御座候恐惶謹言 猶々次第ニ寒冷相増候條御自愛奉祈候且又爲御見廻佳品遠境御惠贈被下千萬忝々奉存候隨而不珍候得共國産——進覽仕候御笑留被下候ハ、太慶奉存候以上

〔自筆狀扣〕(十月廿三日附藩政府の通讀回答書の奥)

委細被仰越候御端書之趣共致承知本文御返書去ル十四日着之御飛脚ニ相連候處同日ハ目白臺御屋敷に罷越翌十五日之若御前様御袖留ニ付白金に罷越被是ニ而右之 御返書一昨十七日之朝届上之儀取計せ其上ニ而同日晝比方常盤橋に罷出中根親負に致而會候事ニ御座候最前御頼談被仰進候御同席に御相談之儀御小屋に御使者を以別段被仰付其後一ト

通之御請旁罷出候節も態々被召出御懇篤之御沙汰有之候付御斷荒方之演舌迄ニ而ハ相成間敷其上此節限ニ而再度御起
り無之様之都合ニも致度存念ニ而些委し過候様ニも有之候得共別紙書取之通申演候處案外御受も宜敷大方此節限ニ而
思召止り候儀ハ相考申候然處右書取末文之通ニ候ヘハ今度之御返答問ニ合兼福井表ヨリ御國許ニ之御使者萬々一發足
も難計左候ヘハ東西演舌之趣意符合不致候而ハ甚以御不都合ニ相成候間不取敢右書取ニいたし差進候事ニ御座候右付
而之嚙々御心痛爲有之於爰許茂前後大ニ致心配候事ニ御座候御返書振之寫ハ留置申候以上

十一月十九日

十月廿六日米使ハリス閣老堀田正陸を訪ひ世界の大勢通商貿易の必要及び信數の自由を説く

〔夷事拵録〕

亞墨利加使節申立之事

十月廿六日堀田備中守様御宅ニ而申立之趣大意

- 一今日申上候事柄之至極大切之儀ニ而大統領深切之存念ヨリ出候事ニ付公方様ニ於も其御心得を以御聞取可被下其書簡
之趣を今日尙又各様に申述候間右之御心得を以御聞可被下候
- 一全躰合衆國之儀之外之國々々違ひ唐土日本之方角ニ所領之望無之殊ニ千才を以合衆國之部ニ引入候儀等之決して無之
只禮義を以諸國ニ條約取替し和親を結ヒ交易致候迄之儀ニ御座候
- 一近五十年來西洋之様子も種々變革仕蒸氣船發明以來遠方懸ケ隔候國々茂極テ手近之様相成殊ニエレキトルテカラフ
と申奇術を考出候以後江戸表方亞墨利加都下迄茂一時之間ニ應答出來候様罷成候ニ付西洋諸國ニ而之惣之世界中を一
族ニ相成候様致度心得ニ有之趣て外國ニ交を不結國有之候得之右之碍りニ相成候間取除候心得ニ罷在候
- 一右世界一統致候ニニケ條之願御座候一ニ之使節同格官人ミニストルと申者を相互ニ國々之都下ニ附置候儀ニニハ國々
之商民相對勝手之商賣を許し役人之手ニ渡らざる様致し度存念ニ御座候右兩條之亞墨利加而已ニ無御座西洋諸國之本

願ニ御座候右之次第ニ付先年御當國に罷出候英吉利國之使節ヤームステルリング長崎ニ而取結候條約之英國之政府ニ
而ハ不伏ニ而日本との交接茂諸國同様致度との存念ニ御座候

一元來英國之日本と戰爭ニ及儀を好罷在候子細之魯西亞國世界第一強大之國ニ而西洋諸國之領地をも追々ニ蠶食致候儀
を心懸居先年方都兒格之地ニ於て戰爭有之且又印度之地を裏手方攻候て英國之領分を押領致候計略有之未々志を得不
申候間近日之東方ニ手を廻シカムサツカより唐太蝦夷ニ手を付滿洲唐國を領し極意英吉利所領之東印度を押領可致と
の萌有之若右様相成候而之防禦之手段殊之外六ヶ敷相成候間英國ニ之魯西亞ニ先立チカラフト箱館を手ニ入軍勢を右
ヶ所に渡しカムサツカの湊とカラフトとの間を斷切候便と致度心懸居申候

一日本並唐國ハ西洋諸國同様之通交開ケ不申矢張一本立之姿ニ而大統領ニ於も當時唐國之振合ニ心を付候様吳々申付候
唐國十八ヶ年前英國と戰爭致し散々之敗北ニ而數十萬人之人命を失候而已ふらす金銀之費夥敷剩へ數ヶ所之土地乗取
らる候も元之廣東奉行之計ヒニ任せ置北京政府ニ而之取扱無之兩國之事情貫通不致處方起候儀ニ而前文申上候ミニス
トルの官人北京ニ罷在候ハ、ケ様のもつれニ及とさる儀ニ御座候大統領誓而申上候日本ニも外國同様港御開商賣御
始ミニストル御迎置被成候ハ、御安全之事ト奉存候

一大統領考候ニ之御當國ハ世界中ニ於尤武勇ニ達せらる候御國柄ニ御座候處勇氣ハ戰爭ニ臨候而ハ格別尊キ物ニ御座候
ヘ共勇ハ術之爲ニ被制候もの故勇氣而已ニ而術無之候而ハ實ハ貴ひ候儀ニ之難參ものニ御座候其上治平打續候ヘハ武
備相怠り訓練等行届兼候物ニ而御座候今時之戰爭ニ之蒸氣船其外之軍器便利を得候物第一ニ而警ハ今英國と御合戰候
共英國ニ之左迄之事無之御國ニ取候而ハ夥敷御損失有之候儀と奉存候然處御國ハ誠ニ御天幸ニ而戰爭之苦辛ハ書史之
上ニ而御覽被成候迄ニ而遂ニ實地を御覽無之重疊之事ニ御座候併し英吉利佛蘭西杯之國ニ格別相隔居不申候ハ、疾ニ
戰爭相起可申之處全ク懸隔り居候故今以其沙汰無之儀ニ御座候迎も戰爭之終りハ和睦ニ相成何レ條約取結不申而ハ難
相成儀ニ而大統領之願ハ何とそ御國も戰爭ニ不至互ニ禮義を盡し條約相結候様致度との念願ニ御座候近來西洋ニ於て